細音啓

Kei Sazane

Illustration
ふゆの春秋

Haruaki Fuyuno

2

世界の終わり

アンコール

共鳴世界録

極光の竜帝

——Rh/Nel Ar, KyelS ele kiss Lo Corn.

Calra, The Dragon Lord of Gloria

MF文庫

終わりの世界録（アンコール）

極光の竜帝

2

Rh/ Nel Ar,
KyelS ele kiss I-Corn.

Calra, The Dragon Lord of Gloria

先代魔王エリーゼ
かつての冥界の支配者。
今は転生して
10歳時の姿に。

竜姫キリシェ
かつて英勇と世界を救った
封印より目覚めし
伝説の竜姫。

大天使フィア
レンの成長を見守っていた大天使。
かつての英勇の仲間。

レン
伝説の英勇エルラインに
見た目だけそっくりな少年。

「遊ボウ……？」
巻き上がる大量の砂。
まるでそこに強力な爆弾が投下されたかのごとく、
鉱巨人（ゴーレム）を中心として、
砂漠に巨大なすり鉢状の陥没が出来ている。

竜帝カルラ

キリシェの妹で、
秘境リ・インファリエルを
治める竜の長。

6 世界の終わりの世界録＜アンコール＞2

MF文庫J

アンコール

世界の終わりの世界録

2：極光の竜帝

細音　啓

口絵・本文イラスト：ふゆの春秋

Contents

Prologue
『竜の聖域（せいいき）』

Record.1
『新生旅団（パーテイ）はどこへいく』

Record.2
『いざ古代墳墓（ダンジョン）へ』

Record.3
『土の始原精霊（ノーム）』

Interval.
『剣聖（けんせい）』

Record.4
『人と竜と幸せと』

Record.5
『極光の竜帝カルラ』

Epilogue
『終焉（しゅうえん）の地』

Continued
『咆吼（ほうこう）する世界』

CHARACTER
キャラクター

旅団：「再来の騎士」構成メンバー

◉レン Ren

「偽英勇」と呼ばれる少年。キリシェに誘われ「世界録」を探しに旅立つ。

◉キリシェ Kyelse

かつてエルラインと共に世界を救った伝説の竜姫。300年ぶりに封印から目覚める。

◉フィア Fear

天界最強と謳われる大天使で、かつてのエルラインの仲間である伝説の三大姫の一人。

◉エリーゼ Elise

冥界の支配者であった先代魔王その人。今は転生によって10歳児相当の姿に。

STORY
ストーリー

世界の終焉（しゅうえん）と再来とを記した至宝「世界録（アンコール）」の在り処を世界中の国や旅団（パーティ）が探し求める世界録大争奪時代——英勇エルラインそっくりの容姿から「偽英勇」とバカにされる少年レンは、かつて世界を救った伝説の竜姫キリシェ、大天使フィアに誘（いざな）われ、共に世界録を探しに旅立つ。伝説の仲間の一員である先代魔王エリーゼを仲間にするために、炎の将魔アシェンディアを倒したレンたち。その名は、旅団（パーティ）「再来の騎士」として、一躍世界中に知れ渡ることになった。

KEYWORD
用語

【英勇（えいゆう）】

かつて歴史上で剣帝エルラインのみに与えられた世界を救った者の称号。世界録を見つけだした者にその2代目の栄誉を与えられると国家間で決められている。

【世界録（アンコール）】

伝説の英勇エルラインが遺した至宝。世界の終焉と再来の秘密が記された手記。手にした者が世界の覇権を握ると言われ、世界中の国家や旅団（パーティ）がその在処を求めている。

【旅団（パーティ）】

この世のどこかにある世界録を探すことを主目的に結成された、武装した旅行者の一団。その役割は財宝の探索や徊獣の討伐、都市の警備など多岐にわたり、「王立七十二階位特務騎士団」など国家公認となっている集団も存在する。

【剣帝エルライン】

かつて竜姫と大天使と魔王を引きつれて世界を救った伝説の剣士。世界滅亡の危機である「終焉戦争」を鎮め、歴史上ただ一人「英勇」の称号を持つ。26歳で没するまでに世界中を旅し、最後に「世界録」を世に託した。

【旅団の構成技能（タイプ）】

[**騎士（マスター）**]剣や斧といった武装を使用。常に近接戦闘を求められるがゆえに危険（リスク）も高く、卓越した技能と冷静な判断が求められ、チームの『主力（マスター）』とされる。

[**法術士（アリア）**]悪魔の用いる呪術・攻撃用法術を、複雑な儀式により人間の身で再現する。

[**精霊使い（スピリット）**]精霊の力を宿した精霊具を利用して法術を使用する。

[**武闘者（フルタイプ）**]防御法術と肉体活性を併用したうえで、自らの肉体と闘技のみで敵を討つ近接特化戦闘員。武器や鎧の強度に依存しないという強みをもつ反面、非常に多くの素養と修練を必要とすることから『全能（フルタイプ）』と称される。

[**結界士（エンチャンター）**]隠蔽、封印、遮断、加護など天使の得意とする法術を使役する。

[**癒法士（ヒーラー）**]肉体活性や蘇生法術のほか、薬学、医学の知識も求められる技能（タイプ）。

[**狩人（ハンター）**]害獣に関する様々な知識を活かして狩猟する知識系戦闘員。遠距離からの射撃特化で旅団（パーティ）の戦闘を後方から支援する。

[**探索士（シーフ）**]旅団（パーティ）の頭脳担当で、分野としては考古学者に近い。過去の古代遺跡の調査情報をもとに、そこに仕掛けられた罠や隠し通路を探知する技術が求められる。

“――世界録を発見した者に、歴史上二人目となる『英勇』の称号を授与する”

世界連合協議会　議事録より

WORLD
世界概要

秘境リ・インファリエル（竜の渓谷）
覇都エルメキア
聖地カナン
炎崖都市ジオ
凱旋都市エンジュ
聖・フィオラ旅学園
聖地・秘境を含む
人類未踏破・調査難関エリア

Prologue ― 竜の聖域

ぶあつい雲に覆われた曇天――

見わたすかぎりの灰色の大地。それは観察すれば、莫大な量の灰が、同じ色の岩盤に積もったものだとわかるだろう。

草木もまばら。そのほとんどが巨大な岩と砂礫だけで埋めつくされた渓谷。

秘境リ・インファリエル。

世界地図上で『竜の渓谷』とも記載される竜の聖域だ。

大陸を縦断する巨大な連峰の、その中心に位置する山と山の境界。

その場所で――

『……疾く去りなさい、騒々しき者たちよ』

鮮やかな極彩色に輝く竜。

こだまするように響く人語は、竜という別生物の声帯から発せられたものながらも澱みなく、大いなる威厳に満ち、そしてどこか女性的な印象だった。

『ここは竜の住処。この地に無断で踏みこむ行為がどれほど愚かで、そして許されざる罪であることか。今あなたたちに命があるのは、私からの最初で最後の哀れみです』

竜が見下ろすその先には、剣の刃が折れ、強靱な戦闘衣をことごとく破壊され、全身に火傷を負った旅団。

総勢二十名以上。

いずれも屈強な騎士、法術士、武闘家たちが為す術なく大地に膝をつき、絶望的な表情で竜を見上げる光景がそこにはあった。

――暴虐。

たった一体の竜により、徒党を組んだ旅団が一人残らず返り討ちにあったのだ。

一瞬。極光色の竜が放った一度の息吹だけで、すべてが終わってしまった。

これが竜種。

天界の天使、冥界の悪魔と並び、地上を統べる高位存在として君臨する種族。

『二度目の警告はありません』

竜が、大きく翼を拡げて威嚇の姿勢。

それを見た瞬間、旅団のメンバーたちが皆一様に悲鳴をあげて逃げだした。

野心にあふれた面持ちで竜の渓谷に颯爽と乗りこんできた時と打って変わり、疲弊しきった様

子で遠ざかっていくその姿に――

『……浅ましい』

極光の色彩を湛えた竜帝カルラは、ただ一言、溜息にも似た言葉をもらした。

いつものことだ。

竜の聖域として名高い秘境リ・インファリエルに、血気盛んな、そして身の程知らずの人間の旅団が攻めこんでくるのは。

ある者は竜退治で名声を上げようと。

ある者は秘境探検を口実に、竜の住処を上足で踏み荒らそうとする。

悠久の時を生きるカルラにとっては程よい退屈しのぎにもなるのだが、世界録を求める人間の旅団の数が圧倒的に増えてからは、この秘境に現れる人間の頻度が「退屈しのぎ」から「面倒くさい」に変わりつつあった。

『人間……これほど身の程を弁えぬ種も珍しい。弱い。そして愚か。キリシェ姉様はいまだにこんな種族と戯れていらっしゃるというの』

敗走する旅団。

その姿が見えなくなって、かわりに後方からやってきたのは小型の疾竜だった。部下にあたる同胞が小さくカルラに何かを告げて――

『キリシェ姉様が戻ってくる？　それは本当ですか？』

竜帝カルラのその一言に。

彼女の後ろに控える何十体という竜が、一斉に歓喜の様子で顔を上げた。

『ちょうどいい機会です』

うなずくカルラ。

『今度こそ、キリシェ姉様には竜の姫としての自覚をもってもらわなくては。いまだあのエルラインなどという人間のことを引きずっていては困ります。世界録とやらを探す旅も、ここで終わりにさせましょう』

Record.1 ―― 新生旅団はどこへいく

1

炎崖都市ジオ。

いまも火口から噴気を放出するガリア大炎山、その麓に栄えた都市。火山の蒸気と地熱によって、冬であっても真夏のような強烈な熱気に包まれている。

その中心部に位置する大講堂にて。

「退屈だ……」

賓客室の椅子に座り、呆けた表情で棒付きキャンディーを口にくわえるキリシェ。

――神秘的な少女だった。

海よりも深い緑玉色の瞳に、真珠さながらに煌めく銀色の長髪。

そんな幻想的な色味にくわえ、その面立ちも童話の妖精のように愛らしく。

旅装束に身を包みながらも、その透けるように白い肌と華奢な肢体は、可憐というほか表現のしようがない。

童話に描かれる妖精のように可憐な姿だが、その正体は人間ではなく竜。

それも最古の竜種である「天銀竜」の姫であり、全竜種どころか地上のあらゆる生物、天界の女神にも冥界の歴代魔王にも恐れられた史上最強の高位存在である。

……だけど、そんな伝説の竜のはずが。

……今は椅子に腰かけて、俺の前で「退屈だ」と連呼して溜息をついてるんだよな。

「レン、何か面白いことしてほしい」

「面白いこと？」

「歌とか踊りとか。人間はそういう芸が器用だろう」

「……俺、すげぇ音痴だからムリ」

苦笑で応えるのは、くすんだ茶色の髪をした少年だ。

レン＝E・マクスウェル。

おさまりの悪い髪を無造作に切った髪型に、濃い青の瞳。

ほどほどに整った顔だちながら、まだ初々しさも残る素朴な表情。

身長は同じ十七歳のなかでは平均程度だが、レンの目指す『騎士』が、いずれも屈強な偉丈夫ばかりであることを踏まえるならば、競争相手である学生騎士の中ではむしろ小柄な部類に含まれるだろう。

「エリーゼとかフィア先輩とかと一緒に、都市のなか散歩してきたら？」

「見知らぬ人間にジロジロ見られるのは好かない」

口をへのじに曲げて答える竜姫。

天界、冥界、地上――この三界のうち地上における絶対覇者とされる竜だが、圧倒的な力を有する反面、警戒心が非常に強いというのは有名な話だ。

「むしろエリーゼとフィアが、なぜああも気安く人間に接することができるのか不思議でしょうがない。そもそも大天使と先代魔王ともあろう者が気安く人間に接していると知られれば、天界と冥界の沽券にも関わるはずなのに……しかもいま外をうろついてみろ。あっという間に人間に取り囲まれて大騒ぎされるに決まってる」

「……まあ、そりゃ炎の将魔と戦った後だもんな」

先代魔王であるエリーゼの部下であり、かつての魔王候補にして五大災とも呼ばれる最上位悪魔の一体が、現魔王に反旗をひるがえして地上に現れた。

それが『炎の将魔』アシェンディア。

この大悪魔が降臨した場所こそが、この都市の目の前にそびえ立つガリア大炎山。それをレンたちが撃退して冥界へと退けたまではよかった。

問題はそれから。

ことの発端はつい二日前。つまりアシェンディアを撃退した翌日からだ。

世界的に名の知れた百戦錬磨の旅団たちをさしおいて、無名の旅団であったレンたちが五大災を撃破。その話題性が炎崖都市の住民はもちろん、五大災撃破のために集まっていた多くの旅団にも広がり、レンたちの名前が世界中に注目されてしまった。

「俺もさっき外出てみたんだよ。昨日まで疲れとケガでロクに動けなかったじゃん。今日は体調もいいから身体動かしたくてさ」

「そういえば、その割にはすぐ戻ってきていたな？　どうだった？」

「大講堂を出た途端に、すげえ人数の人たちに囲まれたの。サインとか握手とか求められて。……で、二言目には『あの英勇と関係あるんですか？』とか聞かれるんだもん。そりゃ逃げたくなるって」

「諦めろ。それだけはお前の宿命だ」

二本目の棒付きキャンディーを取りだすキリシェ。

「なにせわたしでも間違えたほど似てるんだから」

「そっかな……」

呆れまじりの吐息をついて、レンは窓枠に映る自分の横顔をぼんやりと眺めた。

自分の容姿。誰もが見入る美形でもなければ、歩くだけで周囲に威圧感を与える巨漢でもない。それはレンも自覚の上だ。

ただし一つだけ特徴を挙げろと言われれば――

剣帝エルライン。外見だけが、伝説の剣士に酷似しているという点だろう。

歴史上ただ一人『英勇』の称号を与えられた史上最強の剣士。

人間はもちろん、世界を統べる三界の高位存在――地上の竜、天界の天使、冥界の悪魔たちを相手に、何百戦にもおよぶ激戦をくり広げて無敗。さらにその後、世界終焉の危機となった大戦をも鎮めてしまった。

それが三百年前。

今では世界中に彼の銅像や肖像画が作られ、彼の功績を称える象徴となっている。

そんな英勇と生き写しのレンが、悪魔の中でも最上位の存在である五大災を退けたのだから、他の旅団たちがそれに注目しないわけがない。

すなわち――

伝説の英勇の再来ではないか？　と。

「まあ、いいんだけどさ。偽英勇って言われるのもいい加減に慣れたし……」

当事者であるレンには複雑な心境としか喩えようがない。

偽英勇。

その容姿から、ことあるごとにエルラインと比較されるものの、現実は残酷だった。

過去の英勇とは程遠い剣才。所属していた聖フィオラ旅学園では「偽英勇」とまで呼ばれ、クラスメイトからも指導教官からも呆れられていたほどだ。

「偽英勇呼ばわりは気にするな。このわたしが鍛えているんだ。すぐに冥界の現魔王だろうが天界の女神だろうが叩きのめせるようになる」

「それ、もはや人間業じゃないと思うんだけどな……」

真剣この上ない表情のキリシェ。

そんな彼女に、レンは苦笑まじりに肩をすくめてみせた。

「ところでエリーゼとフィア先輩だけど、遅くない？」

「む。確かにそうだな。炎の将魔を撃退したから、その報酬を受けとりに行くだけだと言っていたのに」

「たぶん手続きとかあるんだろうけど。……あ、でも噂をすれば」

扉を隔てた大講堂の通路。

その奥から、小さなスキップ調の足音が伝わってきた。

「たっだいま！」

扉が開き、部屋に入ってきたのは褐色の肌をした幼女だ。

外見の年齢はちょうど十歳頃だろう。光の加減で黒にも茶にも映る長髪のツインテールに、好奇心旺盛そうな赤褐色の瞳が印象的だ。

「いやー、すごいね！　アタシらが炎の将魔を追いはらったって情報が出まわってるみたいで

さ、どこいっても握手とサイン求められちゃった」
「応じたのか？」
「うん。人間て面白いよね。アタシが冥界で魔王してる時なんか、アタシの姿を見るだけで怯えてたのに。今じゃ大歓迎だもん」
先代魔王エリーゼ。
地下世界たる冥界のかつての主その人だ。
三百年前の戦いで身体が消滅したことでその座を退いたが、ちょうど十年前に今の幼い姿で転生に成功。かつての記憶と力の一部を有して甦った。
「エリーゼ、それでフィア先輩は？　一緒に行ったと思ったけど」
「お待たせしましたわ」
再び扉が開き、姿を見せたのは見目麗しい金髪の少女だった。
フィア・ネスフェリア――おっとりとした目元に優しげな微笑。身にまとう純白の衣装もあいまって可憐かつ高貴な雰囲気を湛えている。
彼女の正体もまたキリシェやエリーゼ同様、人間ではない。
天界を統べる女神直属の最高位天使にして、単純な戦闘に関しては女神をも上回るとされる最強の大天使。
――すべての竜種を束ねる竜姫キリシェ。
――かつての冥界の支配者たる先代魔王エリーゼ。
――天界を統べる天使の頂点、大天使フィア。
彼女たちのいずれもが、かつて英勇エルラインに率いられた伝説の三大姫だ。
……それが俺の目の前にいる。
……ほんと、信じられないくらい伝説の面々だよな。
聖フィオラ旅学園で偽英勇呼ばわりされ、学友の誰からも相手にされなかった自分に声をかけ、そして世界録を求める旅に誘ってくれた彼女たち。
「レン？　どうかしたか？」
「ああ、いや。何でもないよ。ただちょっと色々考えてただけ」
自分を見つめるキリシェに軽く手を振って返事。
「ところでフィア先輩。例の手続きの方は？」
「済ませましたわ。炎の将魔撃退の報酬はちゃんと頂けるそうですよ。ところで……」
妙な横目遣いでこちらを見つめてくるフィア。
「レンは温泉に興味ありますか？」
「温泉？　温泉て、地面から温かい湯が噴きだしてるやつ？」
「ええ。ここは目の前が火山ですから。マグマの熱で温められた地下水がわき出す場所がいくつもあって、炎崖都市でも温泉が観光名所だそうです。湯治という言葉もあるくらい、温泉はケガ

の治療にも効果がありますし。話を聞いたら、私たちが行くなら貸しきりにしてくれるそうなので」

「へえ、フィア先輩もしかして詳しい？」

「お風呂が嫌いな女の子はいませんよ。それは人間も天使も同じです」

と言っている間に、すでにフィアの手には着がえの入った小ぶりな鞄が。

「キリシェ、温泉饅頭という銘菓も売っているそうですよ。ほどよい甘さが人気で、毎日すぐに売り切れてしまうお菓子だそうです」

「……む。それは見過ごせんな」

さっと立ち上がるキリシェ。

「行くぞレン。ついでだ、わたしからもちょうど話をしたいことがある。貸しきりなら温泉に浸かりながら話せばいい」

「待ったキリシェ。何の話かは気になるけど、温泉に浸かりながらって……」

「なんだ？」

「いや、だから温泉なんだろ。一緒に話すったって、あの、ほら……俺、男子だし。温泉だって男と女って別々になって入るから――」

「心配には及びませんわ」

いたずらっぽい笑みでウインクしてみせる金髪の大天使。

「私が予約したのはもちろん混浴の方ですから」

「……混浴？」

「ええ。つまり一糸まとわぬ男女が湯煙の中ゆったりしっとりと……」

「ちょっと!?　え、混浴!?　冗談だろフィア先輩？」

「ふふ、楽しみですわね」

レンの腕を脇に掴んで、そのまま有無を言わさずフィアが歩きだす。

「さあ行きましょう。大講堂の入口は私たち目当ての人だかりで、杯ですので、裏口からこっそり抜けますわ」

「いやだから問題なのは混浴の――」

「何事も経験ですわ」

「そういう問題じゃないって、ちょっと!?」

フィアにがっしりと腕をおさえられ、レンは通路を引きずられていった。

2

真っ白い蒸気に覆われた浴場。

簀の子をしきつめた床を進んだその先に――天然の岩盤でできた湯船と、それを満たす乳白色

の濁り湯がわき出す光景。
「わぁ、広いねぇ！　泳げそうなくらい広いじゃん！」
ちゃぷん、と湯をかき分けて湯船を進んでいくのは水着姿のエリーゼ。身につけている紺色のワンピース水着は、わざわざ浴場の受付で買い求めた新品だ。
「露天風呂というやつか。ガリア大炎山が一望できるというのは面白いな」
岩盤に腰かけて銘菓の温泉饅頭を口にするキリシェ。
こちらは白のワンピースであるフリル付きの水着で、腰からのデザインがミニスカートのような形状になっている。水着とはいえ肌の露出度は低め。その気になれば、今のままでも公道を歩けそうなほどファッション性の高いデザインだ。
……ここまではいいんだよ。
……だけど問題が、最後の一人で。
「レンてば。そんな隅っこで背中向けてないで、もっと真ん中はいかがです？　せっかく貸しきりなんですから」
「い、いや俺はこっちで……」
「そう言わず。ほら、お姉さんが背中を流してあげますわ」
ちゃぷんと跳ねる水音。
湯船のなかをゆっくりと歩いてくる気配が、自分の真後ろまでやってきて。
「はーい、レンつかまえた」
「フィア先輩!?」
背中側から金髪の少女に抱きつかれ、レンは思わず声をもらした。
しかもその抱きつき方がそっとどころではない。ぎゅっと身体と身体を密着させて、身体を前のめりに押しつけている状態だ。
そして背中にふれる双つの感触。
柔らかくて、重みすら感じるほどの圧倒的なボリュームで。
「だ、だから先輩！　絶対わざとだろ！」
「あら？　なんのことですか？　私、さっぱり何のことだか」
くすくすと含み笑いをこぼしながら、ますます身体を密着させてくる大天使。
「こら、レンから離れろ色ボケ天使」
キリシェの呆れ声。
岩盤に腰かけた竜の姫が、腰に手をあててじろりと大天使を睨みつける。
「ところ構わずレンを誘惑か？」
「だってレンてば可愛いんですもの。顔真っ赤にして背中を向けちゃって」
楽しげに声を弾ませるフィア。
背中が大きく露出したホルターネック型の黒水着。それも身体の要所を隠す布の面積が極端に

少ない、まさに彼女の豊満な体つきが際だつデザインになっている。
それが似合うというのはフィアのスタイルの良さあってのことに違いないが、年頃の少年にはあまりに刺激が強すぎる恰好だ。
「レン？　ほら、そろそろこっちを向いてもいいしてるんだし。お互い何も気にすることはありませんわ」
「だったらその恰好を何とかしてほしいんだけど……」
ただでさえ深すぎる胸の谷間を強調するため、大天使。本人もそれは当然あえてやってることで
「私、見られて恥ずかしい身体はしていませんの
「俺の方が目を向けられないって意味でだよ」
溜息をこらえながらレンはふり返った。
とにかく水着ごしにも刺激的すぎるフィアの妖艶な身体つき。蒸気と濁り湯のおかげでその艶姿が曇って見えることだけが唯一の幸運だろう。
「ああ、でも温泉はいいですわぁ。三百年前の古傷も癒される気分です」
頭にタオルを巻いて髪を留め、肩まで湯につかって幸せそうなフィア。
「身も心も洗われる気分。あとはここに極上のお酒があれば地上の楽園なのですが」
「フィア、なんだか年寄りくさ――」
「何か言いましたかエリーゼ」

「な、なんでもないよ!?」
一瞬で目の前に迫る大天使に、慌てて手を振ってごまかす先代魔王。
「アタシじゃなくて、レンがそう言ってたような」
「ウソつけ!?」
悲鳴にも似た絶叫がレンの喉からこみあげた。
……フィア先輩、年齢の話は厳禁っぽいもんな。
……エリーゼがあんな怖がるくらいだし。キリシェも口にしようとしないからな。
目の前の彼女たち全員が、三百年前に終焉戦争を戦った伝説の三大姫。
しかしキリシェは永き封印からつい最近解き放たれたばかり。その実年齢は、人間年齢にしてまだ十六歳。つまりレンの一歳下だという。
先代魔王のエリーゼは、こちらも転生に成功したのが十年前。
言うなれば今の彼女は『生まれ変わり』であって、その実年齢も幼女という外見どおり十歳ということらしい。
そんな中――
三百年前からただ一人変わらず生きているのが、この大天使フィアになる。
……もちろん天使ってすごい長生きだって聞くし。
……フィア先輩も、見た目十八歳とかそれくらいだもんな。
とはいえ実年齢の話は厳禁。
フィアの正確な年齢はレンも知らないし、聞く勇気もない。
ソレを知っているであろうエリーゼが、悪戯心でそれをネタにからかってはフィアに怒られるという流れが日課のようなものになっている。
と。
「レン、お前、傷の具合はどうだ？」
ちゃぷんと水が跳ねる音。
可愛らしい白水着姿のキリシェが、腰まで湯に浸かりながら近づいてきた。
「ちょうどいい。ちょっと腕を見せてみろ。あと背中もだ」
「え？　ちょ、ちょっと!?」
後ろに回りこんで自分の背中をじーっと見つめる少女。
「なんだ？」
「いや、その……何となく、恥ずかしいというか」
もちろんレンも水着を着用しているが、それでもこんな浴場で、しかも同い年くらいの外見の少女にじろじろと上半身やら二の腕を見つめられれば気恥ずかしくもなる。
「炎の将魔から受けた火傷を見ているだけだ」
「いや、まあそうなんだろうけど……」

「人間は竜と違って傷の治りが遅いからな。ごく当たり前という表情ですらすらと答えるキリシェ。
そんな彼女に対し――
「……」
「？　どうしたレン、そんな惚けた顔をして。
「そんな心配してくれるんだなって。わざわざ悪いな」
「……べ、別に！　わ、わたしはただ、傷が悪化したら今後の旅に差し障ると思っただけだ。おお前も心配されないようにさっさと治せ！」
ほんのりと頬を赤らめてさっと背を向けるキリシェ。
かと思えば、その先にいる少女二人を指さして。
「そしてそこの二人！　なんだその意味深なニヤニヤ笑いは！」
「えー？　だってさぁ。ねぇフィア？　あのキリシェが人間相手にねぇ」
「まったくですわ。レンは私の方が先に目をつけてましたのに。いつの間にそんな関係になっちやって。ズルイですわぁ」
コソコソと、それでもこちらに聞こえる声で囁きあうフィアとエリーゼ。
「キリシェってば、耳まで真っ赤ですわよ」
「珍しい画だよね」
「こ、これは湯に浸かってるせいだ！……うるさい、とにかくうるさい！」
湯を手で掬ってパシャパシャと二人に浴びせるキリシェ。
その場面だけ見れば、完全に少女三人がじゃれ合っている姿にしか見えない。三百年前、世界を救ったという威厳もどこへやらだ。
「あのさキリシェ、例の話したいことがあるっていうの気になるんだけど」
「……む。そうだな」
湯を掬う手を止めてふり返る少女。
そのまましばし腕組みして、何かを考えるそぶりで。
「話というのは、今後のわたしたちの行き先についてだ。世界録を探すうえでの」
世界録。
その単語をキリシェが発したと同時、大天使と先代魔王の顔つきが一変した。
いままでの戯けたものではなく、彼女たち本来の表情である尊厳と知性と、そして圧倒的なまでの迫力を湛えたまなざしに。
〝世界録を発見した者に、歴史上二人目となる『英勇』の称号を授与する〟

世界中の人間が知っている国家連合協議の発表。
歴史上ただ一人の『英勇』――すなわち英雄よりも勇者よりも優れた功績を残した大人物、剣帝エルライン。
竜姫、大天使、当時の現魔王を率いて終焉戦争を終わらせた、その人だ。
そんなエルラインの手記が『世界録』。
いまだ誰もその全容を知らない終焉戦争の『真実』が記された唯一無二の歴史書であり、数多くの古代遺跡や精霊の住処が記された世界地図でもある。
たとえば古代遺跡からは稀少な『失われた術式』を発掘できる上、精霊の聖域では強力な精霊の加護を得ることもできる。また古くから秘境や聖域といわれるエリアは、強力な武器の原料となる稀少金属の採掘地である場合が多い。
――しかるべき者が世界録を手にすれば。
――そこに記された情報は、世界の覇権を掌握するに余りある。
世界各地の聖域や秘境を目指す者たちが『旅団』と呼ばれ、現代まで百年続く世界録大争奪時代、そのキッカケとなった至宝でもある。
「そういえば、世界録のありかについて心当たりがあるとも言っていましたね」
温泉の端の岩盤に腰かけるフィア。
「その話に関してでしょうか？」
フィアの隣に並んで座るエリーゼ。
「へぇ。なんだ、それなら早く教えてよキリシェ。エルラインの遺品が世界録なんでしょ？　他の人間に取られたら嫌だもん」
こちらは足でパシャパシャと湯を蹴りながらの幼い仕草だが、その視線は深い知性と、そしていつにない真剣な雰囲気を湛えている。
――他の旅団にとっての世界録は、英勇の称号を手に入れるための道具であり財宝。
――けれどこの場の少女たち三人は違う。
三百年前にエルライン本人に付きしたがって共に旅した彼女たちにとって、世界録とは、かつての仲間が遺した最後の思い出そのものなのだ。
赤の他人である旅団に先に奪われるわけにはいかない。
なにしろその世界録には、エルラインが彼女たちに遺した伝言が含まれているかもしれないのだから。
「そう。世界録の隠し場所だが、この百年で人間の旅団が世界中を探検して、なおも見つかっていないのだから、もう考えられる場所は一つしかない。つまり……この百年、人間の旅団がどうやっても立ち入ることのできなかったであろう場所だ」
「……やはり。あの地ですか」

「まあそうだよね。……うーん、アタシあんま良い思い出ないんだけど」
「私も。あの場所だけはちょっと……ですわね」
キリシェの言葉に、顔を見合わせてうなずく大天使と先代魔王。
その表情はどちらも曇ったもの。まずどんな状況でも微笑を絶やさないフィアですら、苦々しい口調を隠しきれていない。
「というわけだレン」
「いや、そう言われても全然心当たりないんだけど……？」
さも当然といった感じでふり返るキリシェ。その彼女に見つめられながら、レンは素直に思ったままを告げた。
英勇エルラインが隠したと思われる世界録のありか。
キリシェは予想がついているという。それを聞いたフィアとエリーゼもどうやら何かを察したらしい。
雰囲気。けれど自分はまったく見当もつかない。
「なあキリシェ？　それ、具体的な地名までわかってるってことか？」
「あくまで見当がついているという段階だ。話すにしろ、もう少しだけ時間がほしい。その前に行っておきたい場所もある」
「それが当面の目的地ってこと？」
「リ・インファリエル」
「竜の渓谷!?　あの、あらゆる竜種が集まってるっていう秘境だろ！」
伝説の秘境として名高い場所の一つだ。
レンの所属していた聖フィオラ旅学園でも、教官からそう教わったのを覚えている。
多くの旅団が踏破を目指して訪れるが、そこで待ち受ける竜の洗礼によって、ほぼ例外なく追い返されるという。
渓谷に立ち入ることを許されるのは、本当にごく一部の旅団のみ。
「ていうことはキリシェの故郷？」
「故郷どころか、キリシェは竜の渓谷を束ねる歴とした姫ですよ。非常に稀少な天銀竜の純血ですし、個体としても史上最強の竜として名高いわけですから」
そう答えたのはフィア。
「渓谷の竜としても、姫の帰還となれば喜ぶでしょうね」
「帰還じゃない。……一時的に立ちよるだけだ。目的を果たしたらすぐ離れる」
ぼんやりと頭上を見上げる銀髪の少女。
その緑玉色の双眸にうかぶ感情は、帰郷という割にどこか寂しげで、複雑そうな想いを色濃く描いていた。
「竜の渓谷だろ。よりによって超有名どころの聖域に行くんだな。緊張してきた……」
「そんな大層な場所でもない。単にわたしの同胞がたくさんいるだけだ」

「竜の住処ってだけで人間からすりゃ凄い場所だってのあらゆる竜種が一堂に会すると言われる秘境。
その大いなる聖域は、世界地図においても正確な位置情報の記載がない。
創設したての旅団が意気込んで竜の渓谷に乗りこんだ挙げ句、竜の怒りを買って大事故に繋がるという危険性を考慮してのことだ。リ・インファリエルの場所を知り得るだけの実績を積んだ者だけが、秘境に挑戦する権利を得る。
「ちなみにその場所だけど、いまここで俺が聞いてもいいの？」
「それは歩きながら話す。なにぶん長旅だ。ガリア大炎山を越えて、さらにその先の連峰を大きく迂回する必要があるから徒歩で半月以上ほどは覚悟しろ。その間はひたすら剣の修行をしながら進む」
「半月？　ねえキリシェ、あの古ぼけた墳墓は近道に使わないの？」
そう言ったのは、黙して会話を聞いていたエリーゼだ。
「墳墓……？」
「なに言ってんの、キリシェが教えてくれた遺跡じゃん。エルラインが初めて竜の渓谷に来た時に使った近道があるって。アタシも実際に通ったことはないけど、アレを抜ければ渓谷まで早いんでしょ？」
「――おっ、そうだった！　思いだした！」
しばらく宙を眺めていたキリシェが、ふと思いだしたように手を打った。
「あの古代墳墓か。そうだな。まだ遺跡として残ってるかわからないが、試しに行ってみる価値はある」
「でしょでしょ！　行ってみようよ！　あの古代遺跡、実はちょっと面白い噂があってさ。アタシも前から気になってたの！」
互いに頷きあうキリシェとエリーゼ。
「……ええと。竜の渓谷に行く途中でどっかの遺跡に潜るってこと？」
彼女たちの仕草を眺めながら、レンはその場で腕組みした。
――通常の経路を歩いていけば半月以上かかるであろう竜の渓谷。
――しかしその近道になる遺跡があるらしい。
「わかった。じゃあそこらへんの道案内は任せるよ。ところでキリシェさ。肝心の、その竜の渓谷に行く目的って？」
「二つある」
レンの問いかけに、キリシェが指を二本立ててみせる。
「一つはわたし自身の反省。炎の将魔との戦いで痛感したが、今のわたしは三百年前と比べてあまりに弱すぎる。話にならない」
「そ……そうかな？」

「わたしを誰だと思っている。本来なら最強無敵のわたしが、たとえ相手が五大災といえども、元の姿に戻ることさえできれば後れを取るはずはなかった」

愛らしい水着で胸を張ってみせる少女。

そんな仕草のキリシェに、レンはしばらくその場で黙考した後に。

「……ええと、すごい初歩的な話になるけど、『元の姿』って？」

「竜に決まっているだろう。わたしは竜の姫なんだから、この人間の姿はあくまで人間を驚かせないための変身だ」

「あ、そういうことか」

初めて出会った時から、キリシェは目の前の少女の姿だった。

竜の姫ということは当然レンも知っているが、本来の姿が竜だというのは今もあまり実感がわかないというのが本音ではある。

〝流石、あの伝説の竜姫キリシェ。これで全盛期の力の二割か四割程度かしら。さらにまだ人間の姿だなんて。あの美しい竜の姿には戻らないの？〟

思い返せば炎の将魔戦でもそうだ。

ほかならぬアシェンディア本人が、竜の姿についてキリシェに問いかけていた。

「確か……二百年前に人間の姿のまま封印されたせいで、いまも竜の姿に戻れてないっていう理解でいいんだっけ？」

「そういうことになるな」

レンがキリシェから聞いた話によれば、過去、キリシェは二種類の法術を併用することで人間の姿への変身を可能にしたとのことだった。

組成変換――竜の質量を保ったまま、肉体を「人間の少女」に変化させる。

空間圧縮――組成変換後、その質量を人間サイズまで圧縮させる。

つまり最初に「竜サイズの巨大な人間キリシェ」に変身した後で、身長と体重を調節して人間の大きさになっている。

しかしキリシェ曰く、この術式は竜本来の力を自ら制限するものであるため、竜の姿であれば使えるはずの力までも抑圧してしまうらしい。

「今のわたしは、三百年前の封印のせいで体内の竜因子が欠損した状態だ」

自嘲にも似た苦笑をこぼすキリシェ。

「わずかに残っている竜因子も眠ったまま。そのせいで竜に戻ろうとしても簡単には戻れなくなっている。この眠った竜因子を覚醒させるのが、竜の渓谷に向かう目的だ」

「そこまでは了解。ところでさ、一つ気になる質問していい？」

「なんだ？　そんなあらたまって」

言ってみろ――

目線でそう促す竜姫に、レンはやや抑えた声で。

「キリシェも、やっぱり元の竜に戻るとすげぇデカいのかなって。ほら、俺、本物の竜を見た経験も疾竜くらいだし。竜の姫ってどんな感じなのか気になるじゃん」

「……ふむ、それはだな」

「それは？」

「秘密だ」

にんまりと、ここぞとばかりにキリシェが笑んでみせる。

「え？　ますます気になるんだけど。もしや、とんでもなくゴツイ竜になるとか？」

「そ、そんなわけないだろう!?　仮にもすべての竜を束ねる姫だぞ！　わたしの竜の姿は、それはそれは美しくも可憐なんだから！」

焦ったように口早にまくしたてる竜の姫。

「……こほん。とにかく竜の姿に戻れば、失った力も幾分かは回復する。先も言ったが、眠ったままの竜因子を強制的に覚醒させるには、竜の力がもっとも目覚めやすい場所での儀式が必要になる。今回はそのための帰郷だ」

「へえ。キリシェの強さが戻るっていうなら心強いよ。今でも十分強すぎるけど」

「楽しみにしておけ」

満足げにうなずき返す少女。

「そしてもう一つ。竜の渓谷を目指す理由だが、わたしの力の回復だけじゃなく、世界録を探すうえでも気になる情報がある。これはつい昨日、炎崖都市の上空を通りすぎた同胞から聞いた話だ。レン、お前も目撃したアイツだ」

「ああ、あのでっかい竜だろ。やっぱりキリシェの知りあいだったんだ」

昨夜のこと。炎崖都市の上空に突如として巨竜が現れ、都市の上空を旋回していたかと思いきや一声、大気をふるわせる咆吼を発したのだ。

……五大災に続いて今度は竜の襲撃かとも思ったけど。

……何だかそんな様子でもなかったもんな。

咆吼としかレンには喩えようがなかったが、気になったのはその声が実に一分近くも続いていたことだ。まるで人間が交わす言葉のように――

「竜語？」

「そういう理解でいい。人間の言葉ほど複雑な情報をやりとりできるわけではないが、要は竜の渓谷に、ある人間の旅団が訪れたと言っていた。ちなみに竜の渓谷を訪れる旅団は、その多くが身の程知らずだから叩き返すのが大半だ。渓谷への出入りを許しているのはごく一部の旅団だけ。わたしが封印されていた間の決め事だから、どういう基準で通行を許すのかまでは知らないが、今回は――」

蒸気で濡れた前髪。

額にはりついた銀髪をさっと払って、竜の姫は言葉を続けた。

「シオンという人間が竜の渓谷を訪れて、何かを調べていったという話だ」

「それ、あの剣聖シオンのことか!?」

剣聖シオン――

『王立七十二階位特務騎士団』の騎士王ゼルブライトと名声を二分する最高位剣士。

そして彼に率いられし旅団こそが『精霊の調べ』。

わずか四人という編成ながらも、四人全員が最高位の剣士や術者ばかり。

世界中で数多くの聖域や未探索の遺跡の調査に成功し、世界録発見の最有力旅団とも目されている者たちだ。

「剣聖シオン……現代のエルラインとも称される若き剣上ですわね。私も、レンと一緒に人間の旅団養成学園にいた時にその活躍を幾度も耳にしました。いずれも偶然で成せる活躍ではなさそうでしたし、人間にしてはかなりのものだと思いますよ」

「アタシも聞いたことある。一回、アタシが転生してすぐの頃に冥界にも来たとか聞いたような。人間にしては面白い奴だって現魔王が言ってた」

思いだしたように声を上げるフィアとエリーゼ。

……天界の大天使と先代魔王からも一目置かれる剣聖シオンとその旅団。

……それが竜の渓谷に現れて、何かを調べていった？

なかば無意識のうちに額に手をあてて、レンはその場で下唇を噛んだ。

「何だろうな。そいつらが調べたこととか、目的とかは――」

「それを確かめるのも目的の一つだ。わたしの力を覚醒させるためには渓谷での儀式が必要だし、それなら渓谷で直に話を聞いた方が確実だからな」

湯面を進んでいくキリシェ。

湯船の端にあたる岩盤に足をかけた格好で、少女はこちらにふり向いて。

「五大災も退けたし、炎崖都市での目的は果たした。ゆえに次の目的地は竜の渓谷。しかし道なりに歩いていっても無駄に時間を食うだけだ。途中の古代墳墓を突っきって、最短距離で渓谷へと向かう。レン、油断するなよ！」

「それはわかったけど。キリシェ、俺からも一つだけ」

「なんだ？」

真剣極まりない表情の少女。

一方で、レンはそんなキリシェの佇まいをぼんやり見返しながら――

「そんな水着姿で、しかもフリル付きの可愛い白水着で恰好いいこと言われても、なんだか逆に緊張感が抜けるというか……」

「わ、わたしのせいじゃない！　これしかサイズの合うのがなかっただけだ！」

照れ半分、恥ずかしさ半分といった様子で顔を赤らめて、銀髪の少女は身体（からだ）を隠すように背を向けた。

Record.2 ― いざ古代墳墓（ダンジョン）へ

1

噴き上がる蒸気と地熱。
夏でもないのに陽炎（かげろう）が生まれるほどの熱気に満ちた山道は、頂へと近づくほどに暑く、その場に立っているだけで汗が止めどなくしたたり落ちていく。
ガリア大炎山（だいえんざん）――
「……」
「どうしたレン？」
隣を歩きながら、不思議そうにこちらを見上げるキリシェ。そんな彼女に、レンは微苦笑まじりに頭をかきながら辺（あた）りを見回した。
「んと、なんか平和だなって。やっぱ穏（おだ）やかなのが一番だなって思ってさ」
二日前。
炎の将魔（しょうま）の異名を持つ悪魔アシェンディアの待つ頂上を目指して火口へと駆け上がった時は、レン自身、どうやって山を登ったかさえ覚えていない。
無我夢中。
ただ漠然とそれだけが記憶にある。
冥界（めいかい）の覇者たる『悪魔』。その力の前に次々と敗れていく他の旅団（パーティ）たち。
絶望的な状況下で、レン自身、圧倒的な格の違いを見せつけられたアシェンディアに、満身創痍（まんしんそうい）の身で挑み続けた。
……勝てたのは俺の実力だなんて、今も絶対思えないもんな。
……奇蹟（きせき）に奇蹟が重なっての結果だったからけれど同時に、自分の信じて積み重ねてきた修練は間違っていなかった。
そうとも思える戦いだった。
死闘から二日――
「それは、わたしたちの前を歩く商人たちのこととか？」
「それもあるし、さっき通りすぎたほかの旅団（パーティ）もそうだし。家族を乗せた馬車もさ」
五大災（ごだいさい）が降臨して事実上封鎖されていた山道。
それが、わずか二日でここまで復旧したのは――
炎崖（えんがい）都市に向かう交易商や、手紙を運ぶ運送業。馬車で山道を進む家族連れの姿もある。悪魔の脅威が消えたことで炎崖都市との行き来が再開したのだろう。
「思った以上に早く人の行き来が戻って良かったなって」

「そうですわね。実際、アシェンディアやその配下たちが山道を破壊したという話もありませんでしたし。言うなれば一時的な関所のようなものだったと」
「それも嫌な関所だなぁ……」
こちらは通りすぎる家族連れに笑顔で応えるフィア。
と。最後尾にいたエリーゼがぼそっと一言。
「ていうかレンは知らないだろうけど。山を破壊した一番の原因は悪魔じゃなくて、どこぞの大天使さんなんだよね」
「どういうこと？」
「ほらあそこ。あの斜面にできたでっかい陥没見えるでしょ？」
山の急斜面をエリーゼが指さしてみせる。
その先に、直径数十メートルはあろう巨大なすり鉢状の陥没。
「あー、そうそう。実は気になってたんだよ。なんか妙に真新しい感じで、しかもあんな場所に突然できてるから不自然だなってさ」
隕石でも落下したかのような破壊の痕跡。
たとえ竜が全力で地面を踏み砕いてもあの半分の痕もできないだろう。一体どれだけの衝撃が加われば、地面にあれほどの痕が残るのか想像もつかない。
「あれ、フィアの拳一発で出来た破壊痕だからね」
「え？」
「ねー、フィア」
いつもの悪戯っぽい眼差しで天使を見上げるエリーゼ。
「どうせアシェンディアの配下と戦ってるうちに愉しくなっちゃって、ついつい辺り構わず殴り壊したんでしょ？」
「あら困りますわエリーゼ。そんなレンに誤解されるような言い方、ダメですよ」
対する金髪の大天使は、あくまで余裕の微笑を崩さずに。
「それにエリーゼだって。レン、あの火口を見てください。あの一帯だけ周りの岩が粉々に砕かれて、立木もことごとく枯れているのがわかりますよね」
「ああ。アレも気になってたんだよ」
フィアが指さしたのは、登山道から見上げた位置にある火口だ。
いま歩いている山道は道のそこかしこに巨大な火山岩が転がっていて、細々ながら木立や雑草が茂っている箇所もある。
が——あの一帯だけは別だ。巨大な大岩が、まるで溶けたように細かい砂礫と化して、わずかな木立も真っ白に枯れた状態で立っている。
何かの衝撃や攻撃を受けた形跡はない。
なのにあらゆる大岩が砂礫と化し、植物が枯れているという不気味な現象。

「エリーゼの障気による影響ですわね。ありとあらゆる物質を浸食して分解する黒の障気。悪魔であっても不用意に触れれば即座に昏倒するという。かつて冥界中を覆い支配した恐怖の障気ですわ」

「怖っ!?　なんだよそれ、下手な呪詛よりよっぽど怖いんだけど!?」

「そうでしたわねエリーゼ」

「えー、どうだったっけかなぁ」

頭の後ろに手をやって意味ありげに笑む先代魔王。

「まあでも、全部アシェンディアのせいにすればいいし」

「それもそうですわね。知らんぷりしていれば、誰も私たちのせいだなんて気づかないでしょう。悪いのは全部アシェンディアということで」

「……俺、アシェンディアが気の毒になってきたかも」

巨大な陥没に、火口付近にできた禍々しい腐敗地帯。

当初からわかってはいたことだが、敵も強いがとにかく自分の仲間である二人の少女も桁外れに強い存在なのだ。

「ところでレン、ほら、後ろだけじゃなく前も見た方がいいですよ」

「え？　前って……」

ふり向いてすぐ、視界に映ったのは二組の旅団だった。

どちらも十人近い比較的大規模な編成。

その二組。つまり二十人ものメンバーがすれ違う直前に立ち止まり、自らの胸に手をあてて、一斉に会釈してきたのだ。

――旅団同士の慣習。

――互いの健闘と無事を祈る意味をこめての挨拶。

レンが聖フィオラ旅学園を発った時には、どの旅団とすれ違ってもされなかった挨拶だ。

自分たちは当初、旅団とすら認識されていなかった。あの時はエリーゼと出会う前の三人旅だったこともあるが、たとえエリーゼが同伴していても、つい数日前までは、少年一人と少女二人という変わった旅行集団としか思われなかったに違いない。

それがこうして、一つの旅団として認められている。

「ほら、レンも。挨拶されたら返すのが作法ですわ」

「わ、わかってるって！」

後ろで楽しそうに見つめるフィアにそう急かされて、レンも急いで会釈を返した。

聖フィオラ旅学園で挨拶の練習も教わったのに、慣れないせいで自分の胸に手をあてる肝心の仕草を忘れてしまったのは愛嬌だ。

と――

会釈するレンが顔を上げたのを見計らって。

「恐れいります。炎崖都市で、あの五大災を撃破された方々とお見受けしますが」
通りがかった旅団の一つ。
その先頭を歩く若い男性騎士が、突然にこちらの方へと近づいてきた。
「『再来の騎士』の皆様方でしょうか」
「え？　あ、あの……ええと」
「その通り。このレンが、一人で炎の将魔を退けた。よく覚えておくといい」
「って、キリシェ!?」
「嘘は何一つ言っていないぞ。ただ事実を言っただけだ」
むしろ当然とばかりに堂々と胸を張って答えるキリシェ。
一方でその騎士は興奮しきった口調で。
「やっぱり！　炎崖都市で配られた記事、拝見しました。ええと、レン＝E・マクスウェルさんですよね。見た感じ俺と同い年くらいなのに……驚きました！」
惜しみない敬畏のまなざし。自分と大差ない年齢のはずなのに、まるで自分よりはるか格上の先達を見るような感動しきった面持ちだ。
「ちなみにどうでした？　やっぱりあの五大災は強かったですか」
「うむ。なにしろ伝説の大悪魔だ。お前たち人間が名を上げようという邪な目的で挑んで勝てる相手ではない。まずは身の程を知ることだ」
「わ、わかりました！　ご助言痛み入ります！」
キリシェの言葉に深々と頭を下げる若き剣士。
そのまま足早に自分の旅団に戻っていって、また炎崖都市への山道を歩きだす。
「あの剣士、炎崖都市で配られた記事を見たと言っていましたね」
立ち去っていく旅団の後ろ姿を見やるフィア。
「それに私たちのことも『再来の騎士』と呼んでいました。どうやら私たち、もう世界中にその名前で認識されているようですわ」
発端は、炎の将魔を退けてすぐ炎崖都市で配られた噂まみれの記事。
その中でレン、キリシェ、フィア、エリーゼの四人を紹介する時に使われていた旅団名が『再来の騎士』。もちろんレンたちが名乗ったものではなく、無名の旅団を紹介するにあたって、報道側が勝手につけた名だ。
英勇エルラインに酷似したレンと、三人の少女という構成。
伝説のエルライン剣帝旅団の再来か？　という誇大宣伝に基づいた旅団名だが、既にその名は炎崖都市の外にまで広がっているらしい。
「私たちが炎の将魔を撃破したのが三日前です。その時には何十という旅団が炎崖都市に集結していました。それが再び世界録を求めて世界中に散っていったわけですから、もう噂として広

まったのかしら。レンてば、すっかり有名人ですわね」
「……勘弁してってばフィア先輩。俺、こういう周りから騒がれるのって慣れてないし。今のだって緊張で手の平汗だくなんだから」
後ろ頭をかきながら、レンは溜息をついてみせた。
偽英勇と呼ばれたり小馬鹿にされてばかりだった自分が、まさか見知らぬ旅団から、あんなにも羨望感あふれる表情で声をかけられる日が来るなんて夢にも思わなかった。
しかもその相手が、まさに自分と同い年くらいの剣士だなんて。
「気に入らないのか？」
「俺にはまだ早すぎるかなって気分」
お気に入りの棒付きキャンディーを取りだすフィアに、レンは苦笑いで答えた。
「炎の将魔との戦いだって、勝った嬉しさよりも、むしろ人間と悪魔の底力の差を思い知らされたっていう方が本音だし。……まだまだ、このままじゃいけないって思う」
「そう。レン、あなたのその前向きな意志は好いですわ」
真後ろから左肘を抱きかかえてくるフィア。
「ねえレン、それなら今度から古代召喚術の訓練の後、お姉さんが毎晩、特別訓練をしてさしあげましょうか？　一人っきりの個別授業で」
「……訓練のはずなのに個別授業って言うあたり、怪しいイメージしかないんだけど」
「武術です。攻撃より体捌きの方を重点的に」

「武術？」
見目麗しい天使の口から返ってきたのは、予想外の単語だった。
「私、前にも言いましたとおり、一番得意なのが武術ですから。レンの場合、たとえば拳による殴打より体捌きを中心に覚えれば、剣技にも活かせるかなと」
「あ、フィアずるい！　抜け駆け禁止だよ！」
今度はエリーゼが後ろから反対側の腕に飛びついてきた。
「ならアタシだって、レンに法術教えるもん！」
「いいえエリーゼ。レンは法術全般がとにかく苦手だと知っているでしょう？　まずは見こみのある分野から伸ばすべきです」
「そうかなー。苦手な分野を伸ばして弱点を補うって考え方もあるよ？」
「待て二人とも。まずレンは何より剣技を習得すべきで、それは私が教えるんだ」
二人の口論に割りこむのはキリシェ。
「しかし武術はあらゆる分野に応用がききますし――」
「まずは苦手な法術から勉強だよ！　アタシに任せなさいってば！」
「いいや、やはり剣士らしく剣技からだ」
むっとにらみ合う伝説の三大姫たち。
そのまま睨みあいを続けていたものの、ややあってフィアが手を打った。
「わかりました。ではこうしましょう。レンの日課ですが、午前中はキリシェと剣の訓練。午後は古代召喚術で精霊召喚。夜には私と武術の稽古をして、最後の仕上げにエリーゼから法術全般についての講義を」
「うむ。それならまあ」
「アタシも文句ないよ」
「……いや、さすがに俺が過労死すると思いますが」
満足げにうなずく少女たちを後目に、レンは大きく溜息をついてみせた。ようやく手を離してくれたフィアとエリーゼを交互に見返して――
「やっぱり、まずは剣士らしく剣技の練習だろ。でも武術と法術も、時間を見つけて頑張るからさ。エリーゼとフィア先輩にも、その時には頼むよ」
「なるほど。わかりましたわ」
「いつでも言ってね。さあレンに何の法術教えようかな、楽しみだね。歴代魔王御用達の超広域型殲滅法術なんてどう？　地平線の端から端までくらいの範囲すべてを塵にする問答無用の禁呪。たぶん習得に千年単位でかかるけど」
「無理にも程がある!?」
「あはは、冗談だってば。でも法術の勉強はしておいた方がいいのはホント」
くるりと身体を回転させてエリーゼがふり返る。

「大事なのはレン自身が法術を使えることじゃなくて、法術そのものの理論を知ること。まず滅多に遭遇しないけど、聖域に潜んでる神獣とか、あと好戦的な精霊も並の悪魔よりよっぽど強力な法術を使ってくるからね」

「……あ、それ学園の教官も同じこと言ってたっけ」

エルラインが世界壊滅の危機に立ちむかったとはいえ、人間という種族は今も弱小種族に区分される。

地上の竜、天界の天使、冥界の悪魔といった三界の覇者に加え――

繁栄した都市を一歩離れれば、そこは危険な神獣。時として真獣あるいは聖獣とも称される、童話にも出てくる伝説級の怪物との対峙も考えられる。

聖域と呼ばれる地に赴けば、その守護者たる大型徊獣が闊歩する弱肉強食の世界。

「ところでキリシェ？　俺らの目的地は竜の渓谷だろ。で、今はその近道のために大昔の墳墓に向かってるってことでいいんだよな」

「そのとおりだ。竜の渓谷までまともに歩けば何週間とかかるからな」

チョコレートを噛りながらうなずくキリシェだが、その近道として選んだのが、キリシェの知る古代墳墓を通過するという選択肢だ。

炎崖都市から竜の渓谷までは、その行く手を阻むかたちで標高四千メートル級の連峰がそびえ立っている。その連峰を迂回するのが通常のルートだが、その近道として選んだのが、キリシェ

「山に作られたトンネルのようなものだ。そこさえ通過すれば、竜の渓谷はここからでも意外に近い。炎崖都市にわたしの同胞が現れたのを見ただろう？　アイツは竜の渓谷から山を越えて直接ここまで飛んできたはずだ。その程度の直線距離になる。墳墓の中を……そうだな、二日程度で抜けられれば上出来だろう」

「その墳墓って、やっぱ危険な徊獣とかいるのかな」

「どうだろう。私も三百年前、エルラインから際に向かうのはこれが初めてだ。エリーゼに言われるまで完全に頭から抜けていたほどだから」

「ちなみに蛇足ですが――」

目の前に見えてきた左右二つに分かれた分岐点。

そこに設置された看板を指さすフィア。

「今から私たちが向かうのは右の分岐です。この山道を下っていけばキリシェの言う墳墓のある密林につきますが、こちらはまず誰も通らない道です。ほら、向こうの馬車や旅団も、私たちとは逆に左側の道を下っていっているでしょう？」

「本当だ。こっちは……ええと、港街だっけ」

「そうです。港街フェルシア。貿易港として発展したお洒落な街ですよ。他の大陸にある都市に移動するには、その港の旅船を使うことが必要ですからね」

世界五大陸。

レンたちが立っている大陸はその東端にあり、大きさも人口も五大陸のうちの二番目とされている。広大な海によって隔てられているため大陸間の交流は滅多に行われることがなかったが、それが一転して活発化したのが百年前。

世界録大争奪時代。

多くの旅団が他大陸への進出を目指して海路に目をつけたことを皮切りに、旅船の数も航海技術も飛躍的な進歩を遂げたとされている。

「たとえば聖地カナン――」

左の分岐道を進んでいく旅団を横目で追いながら、フィア。

「もっとも多くの精霊の住処が見つかった場所であり、世界で唯一、精霊信仰が栄えた地。公に認知されているという意味で現代唯一の『古代詠唱士』、つまり精霊を使役する古代召喚術の使い手である聖女がいる都市に向かうのにも、船が必要ですからね」

「……精霊、か」

自分に言い聞かせるようにして、レンは頭上を仰ぎ見た。

精霊――この世界で唯一の完全なる霊的波動体。

竜にも天使にも悪魔にも聞こえない神秘の波長を有し、それを「声」として聞くことができた古代の人間だけが、かつて精霊を使役できたという。

それが古代召喚術。現代では「失われた術式」の一つに数えられる稀少術式だ。

その世界最後の継承者と言われるのが聖地カナンの聖女。

だが、世界はまだ知らない。

レンという二人目の可能性。大天使フィアの羽という強力な発動体に助けられながらも、精霊『火の始原精霊』の召喚に成功した少年の存在を。

「聖地カナンだっけ。そこ、いつか行ってみたいな。その聖女って人に話を聞けば、俺ももう少し精霊の召喚のコツが掴めるかもしれないし」

「それは構わんが、今はさしあたっての行き先がある。ほらレン、遅れるな」

「……はいはい。大丈夫だって」

服の裾を軽くにぎって引っぱってくるキリシエ。

その仕草が妙に幼く、けれど似合っている気がして、レンはこっそり苦笑した。

2

ガリア大炎山・山麓――

赤茶けた火山から一転。山道を下っていったのは、昼間でも陽が地面に届かな

いほど鬱蒼と大樹が密生する原生林だった。
雨が降っていないにもかかわらず、地面は湿気を帯びて半液状化。
見上げるほど巨大な古代樹の根が地面のいたるところから顔を覗かせて、少しでも気を抜けば一歩踏みだすだけで根に足を取られかける。
「げ……なにあの不気味な虫。嘴みたいなのから変な液体出てるんだけど」
「あら、珍しい。稀少種のムカデですわ。レン、それ捕まえて持ちかえれば生物学者が高値で買い取ってくれますよ」
「へえ。それなら――」
「ただ、王毒種といって虫の中でも特に強い毒性をもった虫ですので。噛まれないように気をつけてくださいね。噛まれると即死です」
「え？　ちょ、ちょっとそんなあっさり危険な台詞!?……て、うわっ！　今度は何だこの蔓!?　腕に絡みついてくるんだけど!?」
伸ばしかけた手を慌てて引っこめるレン。
と、その腕めがけて緑色の蔓が何本も勢いよく絡みついてきた。
「あー。それ吸血植物の蔓だね」
同じく伸びてきた蔓を、こちらは軽快なステップで回避するエリーゼ。
「早く逃げないとたっぷり血吸われちゃうよ」
「だから何なんだよこの森は!?　本気で洒落にならないって！」
腕に絡みついてくる蔓をなんとか振りほどく。
さすがは未開の原生林。
だが世界中にはこんな危険な樹海が、いやコレすら比べものにならないほど危険な砂漠や沼地、火山帯がまだまだ未開のまま残っているという。
「キリシェ、フィア先輩、無事か!?」
「あら、どうかしましたか」
「無事も何も、そもそも心配されるようなことなんてないぞ」
絡みついてくる蔓を、何事もない様子で引きちぎりながら進むフィア。
さらにその先では、襲いかかろうとする例の毒ムカデを素手であっさり捕らえ、はるか彼方に放り投げるキリシェの姿。
「……ホントに心配いらなそうだな」
「何事も経験ですわ、レン」
地面から突きでた木の根を、あくまで可憐な仕草で飛びこえるフィア。
「そもそも私たちがその気になれば、この程度の樹海なんて、時間で焦土なり焼け野原にできますからね。そうしないのはレンの経験のためですもの」
「こういう毒虫とか、危険な植物なんかとの遭遇ってことか……」

知識より経験が物を言う世界。
聖フィオラ旅学園で危険な動植物についても学んだが、そこで得た知識も全体の割合からすれば一割どころか一パーセントにも満たないだろう。
「炎の将魔と対峙した時、嫌でも命の危機を察したでしょう。これも同じです。未開の地を踏破するのに必要なものは、知識以上に経験と勘。何が安全で何が致命的なのか、初めて遭う物に対して即座にそれを理解できるようになってください」
「……努力するよ」
頭上で蠢く蔓や、見たこともない羽虫たち。
さらには血のように真っ赤な水の流れる小川まで。レンから見れば辺り一面危険だらけだが、キリシェやフィア、エリーゼはまるで臆せず進んでいく。喩えるなら、子供用のアスレチックを悠々と突破していく大人のよう。
「エリーゼも慣れてる感じで歩いてるけど、こういう樹海の経験あるのか？」
「アタシ？　んー、アタシはほとんどないよ。エルラインの旅団に合流したのも最後だったし、こういう冒険て少ないから楽しいね。でも――」
クスッ、と怪しげな笑みをこぼす先代魔王。
「冥界の樹海はこんなもんじゃないよ。樹木そのものが動いて襲ってくるし、そこら中が底なし沼だし。おまけに磁場が狂ってて磁石も意味ないから。もっともっと刺激的で楽しいの。いつかレンも連れて行ってあげる」
「……おう。だけどもうちょっと後に頼む」
先頭を歩くキリシェ、続くフィアを追いかける。
見たところ二人とも地図も方位磁石も手にしていない。頭上からこぼれるわずかな陽の角度だけで、完璧に現在位置と進行方向を把握しているのだろう。
「あった。ここだ」
樹海を進むこと二時間近く。
じわりと浮かぶ汗をレンが拭いかけた矢先、古代墳墓。
かつてガリア大炎山の噴火でできた溶岩洞。
トンネル状に掘り進んで作りあげた遺跡だという。
「これを抜けると、要は山の反対側に出られるってことだろ」
「そう。竜の渓谷も目と鼻の先だ」
ぎっしりとシダ植物と蔓に覆われた入口。
一抱えはある巨大な岩石をいくつも積み上げるものはなく、ただ真っ暗な通路が大きく口を開けているだけ。
……二百年前。

……エルラインが、竜の渓谷に向かう時に辿った道か。

「んじゃ行くか。見た感じ通路狭いし暗いし、誰から先に行くかって話だけど」

「レンがんばって」

「お前、行け」

「期待してますわ」

「……だよなぁ」

当然とばかりに少女三人から背を押され、レンは古代墳墓の人口に向かって歩きだした。

3

古代墳墓・地上層――

山の斜面をトンネル状にくり抜いて、それを天井から床までぎっしりと立方形の岩石を積み重ねることで補強した通路。

それでも何百年という月日の中で岩壁も割れ砕け、赤褐色の地肌が天井や壁のそこかしこで覗いている。地面だけは敷きつめた岩が残っていて歩きやすくはあるが、それも永き年月をかけてそこかしこに亀裂が入っている。

その中で。

「先客がいるらしいな」

ぼそりと、レンのすぐ後ろを歩くキリシェが独り言のように呟いた。

彼女が見つめるのは通路の横壁。

そこに取りつけられた人工の簡易燭台と、今も煌々と光を放つ小さな炎だ。もちろん、何百年前の遺跡の炎が今も燃え残っているわけがない。

「てことは俺ら以外の旅団かな？」

「珍しいことではありませんわ。エルラインが通ったということは最低でも三百年前から知られている遺跡です。この古代墳墓がどれだけの広さがあるかはわかりませんが、まだ未調査の部分があってもおかしくありませんからね」

「そっか。未調査の部分に貴重な財宝とか残ってるかもしれないし。それでか」

フィアにうなずきながら、レンは目の前の燭台をのぞきこんだ。

……まだ蝋燭の溶け方が新しい。

……案外、俺たちのほんの数時間前にここを通ったのかも。

「ねえねえ。じゃあ競争？　アタシも宝石好きだし、お宝探しなら早い物勝ちでしょ？　先に進んでる旅団なんてさっと追いぬいちゃおうよ」

「待ってエリーゼ、今回は近道として通るだけだろ。競争……っていうか、それ以前に、そんな急いだら危ないって。何があるかわからないんだしさ」

先行する旅団が取りつけた燭台のおかげで、通路のおよそ数メートル先までは見通せる。逆に言えば、それより先は常に薄暗くてほとんど何も見えない状況だ。

遺跡の奥に危険な徊獣が潜んでいる場合。

または、古代墳墓ということで侵入者対策の罠が仕掛けられている場合。どちらが危険とは言いきれないが、まず頭に思い浮かぶのは先の樹海だ。

……あんな危険な植物や毒虫が生息してる樹海だし。

……そのど真ん中にある遺跡に、危険な生物が棲みついてないわけがない。

「用心して進まないと」

「そうですね。ところでレン、炎崖都市で剣を新調したようですが」

腰に提げた剣を見つめるフィア。

「今度のものは、前よりだいぶ良さそうですね」

「ああ。前のは骨董品みたいにボロボロだったけど、今回はちょうど武器工房で俺の体格に合った新品があったから」

聖フィオラ旅学園時代から使っていた剣は、炎の将魔との戦いで砕けちった。

折られたわけでもなく防御されたわけでもない。

あの最上位悪魔が身に纏う障気に触れた途端、刃が一方的に腐蝕したのだ。人間が悪魔に挑むという行為が、いかに無謀に近いかを見せつけられた瞬間だった。

「今度のはさすがに大事にし……」

言いかけた矢先。

不意に足を止めて手を真横に掲げ、レンは、後ろの少女三人を制止した。

――二叉の分岐。

右に進むか左に進むか。

地図のない遺跡では勘に頼るしかないが、おそらく片方は罠。そうでなくても延々と遠回りをさせられた挙げ句に行き止まりになっている可能性が高い。

レンが学園で教わった遺跡探索の基礎知識だ。

「どうした？　好きに進んでいいぞ」

「そう言うけどさ。これ、間違った道に進んだら危ないから慎重に選ばないと」

気楽な口調のキリシェに向かってふり返る。

「こういう時に探索士がいれば心強いんだけど……」

探索士とは旅団の頭脳担当であり、分野としては考古学者に近い。

過去の遺跡調査をもとに、仕掛けられた罠や隠し通路を探知する能力に長けた技能だ。

騎士や法術士といった戦闘の主力と比べれば地味ではあるが、世界録争奪時代の到来によって多くの旅団が遺跡を調査する機会も増えたことから、その重要性に注目が集まりつつある。

「あ、それアタシできるよ」
「ん？」
「Ｉ級探索士の資格持ってるもん。ほら」
ポケットから皺だらけの証書を取りだすエリーゼ。公印付き『Ｉ級探索士』資格証書に記載されているのは彼女の名前で間違いない。
「エリーゼが？　え、でもどうして」
「だからアタシ、宝石好きだって言ったじゃん。レンにあげた神具も琥珀だったでしょ。こういう遺跡って『失われた術式』の実験記録とかが見つかることもあって、元の身体に戻る方法のヒントもあるかなってちょっと期待したの。転生してからの十年、アタシ一人で遺跡回ってたんだよね」
危険度の高い遺跡では、探索士の同行が義務づけられている場所もある。
そういう場合は所管都市の警備隊が遺跡の入口で探索士の資格証書を確認するのだが、そのために取得したということなのだろう。
「でもすごいじゃん。かなり時間かかったんじゃないか？」
「ううん。実技試験一回受けてすぐ合格したよ。最年少記録だって驚かれたけどね」
さも当然という口調の褐色の幼女。
「ていうかアタシこれでも元魔王だし、人間が遺跡に遺した罠なんて一目でわかるもん。呪詛探知の応用なんだけど『悪意感知』って言えばレンにもわかる？　それさえできれば、数百年前に設置された人間の罠なんて見え見えの悪意の塊だしね」
「……そんな方法聞いたことないんだけど」
「人間には無理だね。悪魔なら、別に魔王じゃなくたって難しくないよ。ってわけでレンが迷うならアタシがどっちの道行くか決める！」
言うなり、返事も待たずに左の道へと走りだすエリーゼ。
「お、おい!?　ホントに任せちゃっていいのか!?」
「平気だよー。こっちの道の方が明らかに……面白そう？」
エリーゼの発した何気ない一言に。
なぜか喩えようのない不安を感じ、レンは言われたままを呟き返していた。
「なあエリーゼ？　さっきの面白そうってのは？」
「うん。たとえばアタシの立ってる横の壁、小さな窪みがあるでしょ。歩き疲れてきた時にさ、思わず手をついて寄りかかりたくなるような感じで」
言うままに、向かって右手側の壁を指さすエリーゼ。
「え？　ああ、そう言われてみれば……」
「で。試しにコレに手で触れてみよっか。たぶん毒矢が降ってくるから避けてね」

「……はい？」
「えいっ！」
可愛らしいかけ声と共に壁に手をつく幼女。
直後。
反対側の壁の亀裂から、何十本という鉄の矢がレン目がけて撃ちだされた。
「やばっ!?」
反射的に身を屈める。すぐ頭上を一瞬で掠めて通過していく何本もの矢。さらにそれが、レンの背後にいる少女二人にも襲いかかって――
「キリシェ、フィア先輩避けろ！」
「ん？　何がだ」
ぺちっ、と素手で毒矢を叩き落とす竜姫。
その横では。
「あら錆だらけの弓矢、触るのも汚らわしいですわ」
同じく金髪の大天使が、何十本という弓矢を軽く振るった拳ではじき返してしまう光景。直接触れることすらなく、その拳の風圧だけでだ。
「……二人とも無事そうで何より。ってかエリーゼは何してんだよ!?」
「いやはや拍子抜けだね。もう二桁くらい矢の数が多いかと思ったんだけど」
「そうじゃなくて！　いまワザと罠発動させなかったか!?」

「うん。だってその方が面白いじゃん」
無邪気な笑顔でうなずく先代魔王。
「こういうの良いよね。昔の人間が必死で作った他愛ない罠を片っ端から暴いて、それを残念でしたってからかうの楽しすぎ」
「……もう何から突っこんでいいかわからないけどさ。あえて一つ聞いておくとすれば、エリーゼが選んだ左の道ってもしや」
「もちろん罠の多い方」
「やっぱりかよ!?」
壁に突きささった鉄矢を恐る恐る眺め、レンは額の汗をぬぐい取った。
「ダメ。分岐まで引き返す。わざわざ罠があるってわかってる道を選ぶ必要はないだろ。こっちが左の分岐だから右の分岐にしようぜ」
「えー。こっちの道のが楽しいのに？」
「それはまた今度にしてくれって」
渋るエリーゼを手招きし、歩いてきた道を分岐まで戻っていく。
いま気づいたが、自分たちが進んでいる左側の通路には、さっきまで取りつけてあった人工の燭台がまったくない。
つまり先行する旅団も、しっかりと安全な右側のルートを選んだのだろう。
……そのかわりに、こっちの側の通路にはヒカリゴケが密生してる。
……それが明かりの代わりになってたけど。
密生したヒカリゴケ。
それ自体が、左の通路を選ばせる罠だったということなのだろう。
「右の分岐にするからな。ほらエリーゼこっち」
「むぅ。つまんないの。こっちの道なんて弱い徊獣がウロウロしてるだけなのに」
「それだけで十分脅威だろ。……って、いま何て――」
爆音。
通路の曲がり角の奥から勢いよく粉塵が舞い上がったのは、その時だった。
爆風の震動を受けて遺跡そのものが微震する。その微震と共に、通路をふるわせる何か巨大な足音が近づいてきて――
「竜!?」
「バカ、あれは蜥蜴だ。翼もないし頭も悪い。あんなのを同胞と一緒にするな」
爆炎に巻かれながら現れたのは巨大な岩蜥蜴。
体高一メートル。全長でいえばレンの二倍以上あるだろう。一体だけでも通路の横幅を埋めつくしかねない巨体と、あれだけの爆風を受けても軽傷にしかならない強靱な鱗と、その内側の筋肉と脂肪の三重鎧。

獰猛な性格。そして日陰と湿地帯を好む生態が知られる徊獣だ。となれば、古代墳墓はまさにうってつけの住処なのだろう。

「ちっ！」

こちらを見るなり詰め寄ってくる岩蜥蜴。

対し、レンもまた地面を蹴って徊獣へと一気に距離をつめた。後ろにキリシェたち三人、通路の横幅を考えても剣を十分に振るだけのスペースは無い。

――集中しろ。力比べじゃ話にならない。

――ぶつかりあったら押し負かされるのは俺の方だ。

一刀。

飛びかかってくる岩蜥蜴の鼻先めがけて剣を振りあげ、一瞬たじろいだその隙めがけ、さらに踏みこんで距離を詰める。

「はっ！」

振りあげた剣の柄が、狙い違わず岩蜥蜴の顎先を打ちぬいた。

脳震盪。

種族差こそあるが、およそあらゆる動物に通用する一撃だ。効果は神経機能麻痺による失神。特に岩蜥蜴のような頑丈な装甲を持つ相手の場合、無理に剣で斬りつけるのでなく、筋肉に守られていない脳を「揺らす」方が確実に相手を無力化できる。

『……』

未体験の衝撃を受けて、ふらふらと床に倒れ伏す徊獣。

「……あぶない。冷や汗かいた」

頬を岩蜥蜴の爪が過ぎった時はぞっとしたが、結果的には無傷での勝利。

「ふむ。その類の小手先の曲芸はさすがに慣れてるな」

「それ褒めてる？」

「褒めてるぞ。ある意味もっとも人間らしい戦い方だ。法力で悪魔にも天使にも及ばず、力では竜はもちろん徊獣にも勝てない人間の、まさに生きるための術だ」

昏倒した獣の頭をコン、と足のつま先で蹴りつけるキリシェ。

と。

岩蜥蜴が現れた曲がり角から、続くように足音がこだました。

「プルミエール、こっちだな」

「は、はい先生！　今の法術で仕留めきれなかったので、いつまた襲ってくるか……」

まず姿を見せたのは純白の法衣を羽織った少女だ。

歳はまだ十代中頃だろう。外向きに撥ねた金髪が印象的で愛らしい。

その後ろから、こちらは上下一体の闘衣をまとった剃髪の男。

赤銅色に日焼けした肌。レンより優に頭一つ高い長身に、一切の無駄なく鍛え上げられた全身。鋼鉄を想わせる肉体はもちろん、その佇まいだけで歴戦の勇士とわかる。

年齢にして二十代だろうが、その無骨な面立ちと落ちつきはらった物腰ゆえ、年齢以上の威厳と威圧感を感じさせる。

そんな二人が先の通路から走ってきて――

「岩蜥蜴がっ!?」

「先を越されたな。いずれせによプルミエール、先の法術でこの徊獣を仕留めきれなかったのは修行不足だ。精進を怠るな」

「は、はい……タイラス先生」

倒れた徊獣を見て声を上げる少女。

一方で徊獣とこちらとを、冷ややかな目線で見比べる長身の偉丈夫。

「そして、お前たちは引き返した方がいい」

「……ん?」

「見たところ結成後間もない新生旅団のようだ。この遺跡は奥に進むほど罠も、そして潜む徊獣も危険なものになる。十分な用意をしてから挑むべきだろう」

お前たちにこの古代墳墓への挑戦はまだ早い。

遠回しにそう言われたことに対する感情はもちろんあるが、レンがそれより先に引っかかった言葉は――

「あのさ、なんで俺たちが新生旅団だってわかるんだ?」

「逆に問いかけよう。私の闘衣と彼女の法衣を見て、我々の所属がわからないか?」

白を基調として金の刺繍をあしらった闘衣。

そして、プルミエールという少女の法衣もまた同じ趣向。

彼女の物は襟もとから足首を隠すほど長いが、徊獣との戦闘時も考慮し、激しい運動にも対応できるよう一人一人の身体に合わせて型から作られた特注品だ。

法衣の生地そのものも、絹のように滑らかで光沢ある高級品。

――大事な戦闘衣とはいえ。

――一人一人に合わせた闘衣と法衣を用意するだけの資金的余裕と、そして自信。

たとえば、漆黒の戦闘衣が代名詞となる王立七十二階位特務騎士団。

それに比類するほどの世界的旅団といえば。

「我々を見てなお、旅団名が咄嗟に思いつかない。要はそれが、私がお前たちを新生旅団と断定した理由になる」

「ああ、なるほど」

そう口にしたのは。

隊列の最後尾で、法衣姿の彼女たちをじっと観察していたフィアだった。
「聖地カナン。その聖女率いる旅団『カナン巡礼聖教船』。その方々ですよ、レン」
「ああ。そうか、アンタらが有名な……？」
「そ、そう、そのとおりです！」
プルミエールと呼ばれた少女が嬉しそうに胸をはる。
カナン巡礼聖教船――精霊信仰の地として名高い聖地カナン。その最高位術者であり、現代唯一とされる古代詠唱士の聖女が率いる一大旅団だ。
最大の特徴は、その構成員の大半が女性で占められていること。
男性に適した騎士や武闘家といった前衛は少ないが、それを補ってあまりある強力な法術系術者たちが揃っている。旅団を目指す少女ならば、誰しもがこの旅団への加入を夢見るといっても過言でない。
「へえ、すごいな。プルミエールだっけ？　まだ十四か十五だろ、それで旅団に入れてもらったなんてよっぽど優秀なんだ」
「あ、そ、そんなことないです！　あたしもまだ、ようやく半年前に仮人団させてもらったばかりで修行中の身でして。タイラス先生にもご迷惑をかけてばかりで……」
顔を横に振りながら、それでも嬉しそうに答える少女。
「あたしたちエリエス様からの指令で――」
「プルミエール。口は災いの元だという言葉、知らぬわけでもあるまい」
「っ、そうでした。申し訳ありません先生……」
あわてて自分の口をおさえる少女。
それを横目に、小さく溜息をつくのはタイラスと呼ばれた男だ。
――おそらく武闘家。
その身に一切の剣や鎗、甲冑すらつけていないことからも想像がつく。
極限まで鍛えあげた肉体に守護法術を重ねることで、我が身を最強の剣にして鎧と化す。あらゆる武装に依存することなく実力を発揮できるかわりに、武術と法術の両面を鍛える必要があることから『全能』と名付けられた経緯がある。
察するに、プルミエールという見習い術士の護衛であり教育役なのだろう。
それは二人の会話からも推測できる。
「年端もいかない少女三人に少年一人の構成。察するに彼女たち三人が法術士か結界士で、男のお前が騎士だろう？　どこかの養成機関を卒業した勢いで、すぐさま世界録を目指して旅に出たといったところか」
「まあ、遠からずだけど……」
キリシェ、フィア、エリーゼの三人を横目に、レンは素直にうなずいた。
彼の言い分はもっともだ。確かに自分たち四人の構成を見れば、騎士一人に術者三人と考える

のが妥当なのだろう。

……実際は、フィア先輩は武闘家で。

……キリシェにいたっては何でもできる万能系だもんな。

唯一エリーゼが法術重視とはいえ、探索上の技能持ちであると先ほどわかったばかり。たった四人の旅団ではあるが、逆にできないことを探す方が難しいほどに完成された構成になっている。

しかしそう言い返したとしても、簡単に信じてもらえるわけもない。

「悪いことは言わぬ、引き返した方がいい」

淡々と告げる剃髪の武闘家。

「お前たち以外にもいくつかの旅団がこの遺跡を探索中のようだが、いずれも罠や徊獣に苦戦している。熟練の旅団がその有り様だ。お前たちのような新生旅団が無理をする必要はない。まずは攻略ルートが確立された遺跡から挑戦し、経験を積むことだ」

「お心遣い痛み入りますわ」

あくまで穏やかな表情でもって応えるフィア。

だがそんな彼女の口元には、珍しくも不敵な笑みが浮かんでいて。

「しかし、その忠告の裏にはどうやら複雑な思惑もありそうですが」

「……なんだと？」

「最初からバレバレだよ。アタシたちに隠したいこと、あるんでしょ？　この遺跡、アタシも興味があって調べたことあったもん。ちょっとした噂もあったしね」

両手を頭の後ろに組みながらエリーゼが前に進みでる。

毅然とした態度のタイラス。その正面で。

「噂？　噂とは？」

「ごまかさなくていいよ。アタシ、鼻は効く方だから。で、この墳墓に入ってから妙な匂いが漂ってて、もしやって思ってたんだけど。そんな時に、ひょっこり精霊信仰の旅団と出くわしたってことは、もう考えられるのは一つしかないでしょ」

「……意味がわかりかねるが」

「なら、わかるように言ってあげよっか」

好戦的とも思えるほどつり上げた瞳で、正面の人間を見上げる先代魔王。

「この占代墳墓のどこかに精霊の住処がある。それ目当てで来たんでしょ？」

「あ、あうっ!?」

「好い反応。そっちの金髪の娘は素直だね」

クスクスと笑い声をもらすエリーゼ。

「で、アンタの方は？　表情は何一つ変えてないけど、一瞬、身体を覆ってる守護結界が揺らいだのは惜しかったかな。いや、むしろすぐに守護結界を立て直したのは偉かったよ。でも残念、

のが妥当なのだろう。

……実際は、フィア先輩は武闘家で。

……キリシェにいたっては何でもできる万能系だもんな。

唯一エリーゼが法術重視とはいえ、探索上の技能持ちであると先ほどわかったばかり。たった四人の旅団ではあるが、逆にできないことを探す方が難しいほどに完成された構成になっている。

しかしそう言い返したとしても、簡単に信じてもらえるわけもない。

「悪いことは言わぬ、引き返した方がいい」

淡々と告げる剃髪の武闘家。

「お前たち以外にもいくつかの旅団がこの遺跡を探索中のようだが、いずれも罠や徊獣に苦戦している。熟練の旅団がその有り様だ。お前たちのような新生旅団が無理をする必要はない。まずは攻略ルートが確立された遺跡から挑戦し、経験を積むことだ」

「お心遣い痛み入りますわ」

あくまで穏やかな表情でもって応えるフィア。

だがそんな彼女の口元には、珍しくも不敵な笑みが浮かんでいて。

「しかし、その忠告の裏にはどうやら複雑な思惑もありそうですが」

「……なんだと？」

「最初からバレバレだよ。アタシたちに隠したいこと、あるんでしょ？　この遺跡、アタシも興味があって調べたことあったもん。ちょっとした噂もあったしね」

両手を頭の後ろに組みながらエリーゼが前に進みでる。

毅然とした態度のタイラス。その正面で。

「噂？　噂とは？」

「ごまかさなくていいよ。アタシ、鼻は効く方だから。で、この墳墓に入ってから妙な匂いが漂ってて、もしやって思ってたんだけど。そんな時に、ひょっこり精霊信仰の旅団と出くわしたってことは、もう考えられるのは一つしかないでしょ」

「……意味がわかりかねるが」

「なら、わかるように言ってあげよっか」

好戦的とも思えるほどつり上げた瞳で、正面の人間を見上げる先代魔王。

「この占代墳墓のどこかに精霊の住処がある。それ目当てで来たんでしょ？」

「あ、あうっ!?」

「好い反応。そっちの金髪の娘は素直だね」

クスクスと笑い声をもらすエリーゼ。

「で、アンタの方は？　表情は何一つ変えてないけど、一瞬、身体を覆ってる守護結界が揺らいだのは惜しかったかな。いや、むしろすぐに守護結界を立て直したのは偉かったよ。でも残念、

人間の法術なんてアタシから見たら一目瞭然なんだよね」

「……何者だ？」

警戒の表情でエリーゼを見下ろす武闘家。

「新生旅団というのは間違いないはずだが……しかし、そういえば最寄りの街で奇妙な噂を聞いた。そうだなプルミエール」

「え？　あの炎崖都市のですか？　ガリア大炎山に降臨した五大災を、たった四人の旅団が撃破したっていう噂ですよね。それもまだ十代の少年少女たちの――あっ！　まさか、つまりあなたたちが!?」

甲高い驚きの声を上げる金髪の少女。

「あ、あなたたちが、あの『再来の騎士』!?　い、言われてみればエルラインの肖像画に似てる人がいるなと思ってはいましたけど。……あの記事なんてどこかの情報屋が勝手に作った噂だと思ってたのに。まさか本当だったなんて……」

「まあ、『再来の騎士』ってのは勝手につけられた旅団名だけどさ」

苦笑まじりにそう答え、レンはカナン巡礼聖教船の二人を交互に見返した。

「アンタらにも事情があるんだろうけど、俺たちだって目的があってここに来てる。ほかの遺跡じゃダメなんだ。俺たち、この古代墳墓を突破した先に用があるから」

「突破？　この遺跡の未開拓エリアの調査が目的ではないと？」

怪訝そうに眉を寄せるタイラス。

そして。

「――不審すぎる。お前たちの行動以上に、お前たち四人の正体が」

背後に控える金髪の少女を先に退かせて。

その男もまた、最後までこちらへの警戒を緩めぬままゆっくりと背を向けた。

「三度目の警告はない。このまま我々を追ってくるのであれば、危険な相手とみなして強制排除も厭わない。心することだ」

小走りになるプルミエールの靴音が通路にこだまする。

こちらの返事を待たずして、曲がり角の奥へと消えるカナン巡礼聖教船の二人。

「だってさー。どうしよっか？」

「どうするも何も……弱ったな。やっぱ完全に警戒されてるみたいだし」

溜息をつきたくなる衝動をこらえ、レンは眼前に延びた薄暗い通路を見わたした。

――この古代墳墓が竜の渓谷への最短経路。

――でも、この早々にあんな大型旅団と敵対しても良いことなんてない。

だとすれば残された選択肢は。

「戻ろう。さっきの分岐点。カナン巡礼聖教船が右の通路を進んでるわけだから、俺らが左の通路を進めばそうそう鉢合わせしないだろうし」

「罠が仕掛けられているという道の方か？　それでもいいが、わたし一人であの連中をまとめて遺跡の外に放りだしても構わないぞ？」

「いやいや、ここは穏便にさ」

意気揚々と拳を握るキリシェを押しとどめ、後ろの通路へときびすを返す。

「キリシェとフィア先輩は俺の後ろからついてきてくれ。で、エリーゼは……」

「先頭でしょ。任せてってば！」

弾むような足取りで分岐点まで走っていくエリーゼ。

二叉にわかれた左側通路。

うすぼんやりと輝くヒカリゴケだけが、おぼろげに通路を照らしだしている。

「えーと、さっきの毒矢が飛んでくる罠は……と」

「押すなよ!?　頼むからもう二度と押さないでくれよ!?」

「あはは、レンて面白い。そんなに慌てなくたって大丈夫だよ。アタシだって同じ罠二回は飽きちゃうもん」

屈託のない笑顔でふり返るエリーゼ。

毒矢の罠が仕掛けられていた壁面を指さして、褐色の幼女が肩をすくめてみせる。

「でもね、この道選ぶのはレンにとってもいいことあるかもよ」

「ん？」

「精霊の匂い。さっき言ったでしょ」

「ああ、この墳墓のどこかに精霊の住処があるって話だろ？」

カナン巡礼聖教船がこの遺跡を訪れている理由。精霊の住処を見つけることができれば、精霊使いにとって強力な精霊具を手に入れる貴重な機会になる。

あるいは精霊信仰の一環として、純粋に精霊を祀りに来たのか。

「その匂いなんだけど、こっちの道からの方が強いんだよね。もちろんカナン巡礼聖教船のメンバーたちが右側の通路を選んだからには右側からでも行けるんだろうけど、たぶんアタシたちの進んでる左側の方が――」

「危険だけど近道ではあるってわけか」

「そういうこと」

器用に片目をつむって先代魔王がウィンクしてみせる。

「竜の渓谷にも早く着けるし、もしかしたらあの人間たちより先に精霊の住処までたどり着けるかも。うまく精霊に気に入ってもらえれば、レンが占代召喚術で召喚できる精霊も増えるってわけ。良いことずくめでしょ？」

「……まず、この罠だらけの道を無事に通過できることが前提だけどな」

ヒカリゴケの密生する通路。

だが、通路の奥へ進むほどにヒカリゴケも減少している。それに応じて通路も闇と同化してほとんど床や壁、天井さえ漆黒に塗りつぶされているのがわかる。

「あのさ、ちょっと待ったエリーゼ」

「ん？　どうしたのレン？」

「明かり。さすがに暗すぎるからさ。ちょうど試したいこともあるし」

その場で足を止め、レンが懐から取りだしたのは白く輝く発動体。

――大天使の羽。

天界最強の天使であるフィア本人のものだ。この神具を利用することで、レンは『失われた術式（エイシェント）』とも称される古代召喚術を発動することが可能になる。

……アシェンディア戦の時は召喚できた。

……でも、あれが偶然の成功だったんじゃダメなんだ。

確実に。

いついかなる時にでも成功できなくてはならない。

――『Rh/ s hec ele Selah（詔え　世界の扉）』――

召喚言語。

レンが口ずさんだ刹那（せつな）、虚空に小さな火花が生まれた。

初めは火の欠片（かけら）でしかなかったものが、みるみるうちに紅蓮（ぐれん）の炎（ほのお）へ。

それが通路を埋めつくすほどに膨（ふく）れあがったかと思いきや、今度は凝縮（ぎょうしゅく）をはじめ、最後に、翼を持つ火蜥蜴（トカゲ）の姿として顕現（けんげん）した。

火の始原精霊（サラマンダー）。

かつては火の小精霊としてレンの周囲を漂っていたものが、古代召喚術によって完全な姿でもって現れたのがこの精霊になる。

「おぉっ！　これがアシェンディア戦で活躍したっていう火の始原精霊（サラマンダー）ね。ほら、アタシまだ見てなかったから気になってたの！」

「……始原精霊。私も姿をまともに見たのは久しぶりですわ」

レンの肩のあたりを浮遊しながら発光する精霊。

その神秘的な姿を眺め、大天使と先代魔王とがそろって声を弾（はず）ませる。

「レン？　この子を呼びだした理由は精霊召喚の練習ですか？」

「うん。それにほら、通路真っ暗じゃん。こいつ炎の精霊だし、炎を灯（とも）して周りを明るくできるかなって思ったんだけど……そんな命令も必要なかったな」

通路の先までを照らす火の始原精霊（サラマンダー）の輝き。

外見だけならば炎の凝縮体と喩（たと）えるのが一番近いが、これだけ近づいても熱を感じない。いま

だその多くが謎に包まれている神秘の存在だ
『……一緒ニイク？』
レンの肩のまわりを漂う火の始原精霊。
「そうそう。てわけだからエリーゼ、こいつも一緒な」
「待てレン。そう急くな」
服の裾をつかんで、珍しくもキリシェが困惑した表情で見上げてくる。
「お前は精霊と対話できるようだが、あいにくわたしたち三人は精霊の声が聞こえない。ちゃんと話せ」
「……あ。そ、そっか。悪い。そうだったよな」
神秘の波長とも喩えられる精霊の声。
竜にも天使にも悪魔にもその声を捉えることはできず、まともにその意味を理解できるのは古代詠唱士の素養を持つ世界で二人の人間だけ。
聖地カナンの聖女と呼ばれる聖エリエスと、そしてまだ未熟ではあるがレンだ。
……でも火の始原精霊の声。
……アシェンディア戦よりも聞こえやすくなってる？
あまりにも自然に聞こえたため、キリシェたちにも当然聞こえているはずと無意識に思ってしまったほどだ。
「ええと、とにかく一緒に来てくれるみたいだ」
「なるほど。では、しばらく明かりには困りませんわね。見た目も可愛いですし」
浮遊する精霊を微笑で見上げるフィア。
「では先に進みましょう。エリーゼ、道案内は頼みますよ」
「あいよー。まあ適当に進めば何とかなるでしょ。こんな遺跡より、冥界にあるアタシの城の方が百倍は大きいし複雑だもん。簡単簡単！」
すたすたと、まるで罠の存在を忘れたかのようにエリーゼが走りだす。
「お、おい!?　危ないってば！」
「大丈夫だよ。ちゃんと罠引っかかる前に引っかかるよって言ってあげるから」
「わざとひっかかります宣言じゃねえか!?」
――任せきりは逆に不安だ。
そう考えて、先頭のエリーゼの真横へと並んで歩く。
「お、レンどうしたの？」
「遺跡の歩き方とか勉強する良い機会だからさ。それに一つ思うんだけど、この場所……墳墓って言われてるけど、実は神殿なんじゃないかって」
「あら？」
隊列の最後尾、弾んだ声を上げたのはフィアだった。

「興味深いですわね。どうしてそう思ったのですか」
「ここ歩いてても、あんまり墓っぽい感じがしないんだよ。墓ってことは死者を弔う場所ってわけだろ。そこ歩いてる俺らが言うのも何だけど、墓の主にしても墓の設計者にしても、本当はそういう騒がしい真似とか墓荒らしとかは避けたいって思うのが普通じゃん。墳墓自体は豪華にするにしたって、入口だって普通は封鎖してるはずだし」
だが今回の墳墓は違う。
樹海の中とはいえ、墳墓への入口は一目でわかるよう設計されていた。
「何百年ていう中で徊獣の住処になっているのは仕方ないことだろうけど、右側の通路は、ほら、さっき俺らも歩いた感じ安全そうだった。入口自体も誰でも歓迎って感じで開いてたし。何よりカナン巡礼聖教船が来てたことも考えると、考えられるのは――」
「ここは精霊信仰の神殿だった、というわけか？」
チョコレートの欠片を口に放りこみながら、キリシェ。
「そう。俺の勝手な推測だけどさ。それで、左側の通路に罠が設置されてるってことは、神殿の貴重な祭具とかが安置されてて、それを盗まれないためなのかなって。そう考えれば色々と説明つくだろ」
「一理ありますわ。実は私も、同じことを思い描いていたところでした」
横の壁をそっと指先で触れながら、フィア。
「私の根拠はもう一つ。カナン巡礼聖教船の彼女たちの発言、思いだせますか？　私たちが古代墳墓、あるいは墳墓という単語を何度か口にしていたのに対し、あの二人はあくまで一貫して『遺跡』としか言っていませんでした」
「なるほどね。わざと曖昧な表現にしてたのは、ここが精霊信仰の神殿ってことを悟らせないための配慮ってわけだったんだ」
「そう。そしてタイラスという武闘家、レンも珍しいと感じませんでしたか」
「え？……珍しいって言われても、カナン巡礼聖教船に男が混じってる点くらいしか俺には思いつかなかったけど」
「それで正解ですよ」
片目をつむってフィアがにこやかに首肯。
「レンも旅学園で教わったでしょうけれど、カナン巡礼聖教船は聖エリエスを筆頭に、そのほとんどが高位の女性術者で構成されているのが特徴です。そんななか、見習い術士の教育役とはいえ、武闘家の男が旅団に採用されていること自体が非常に珍しい。それほど貴重な人材――つまりは腕の立つ者なのでしょうね」
「うん。俺もそんな雰囲気は感じてた……」
一切の無駄なく鍛えあげられた鋼の肉体。
だがそれ以上にレンが注目したのは、彼がプルミエールと走ってきた時の気配だ。

ほぼ無音。
あれだけの長身と隆々たる筋骨を誇っていれば、どうしても体重が増加する。
体重が増せば身のこなしも鈍重になるのが必然。しかしタイラスという男の足運びは、鈍さを感じさせるどころか、レンが目を疑うほどに流麗かつ軽やかだった。
――体術の極み。
――己の肉体を鍛えあげることにすべてを捧げた者だけがたどり着ける極地。
なにしろ女性主体のカナン巡礼聖教船があえて採用するほどの男。
それに見合う逸材ということなのだろう。
「タイラスという男、おそらく旅団の幹部級のはずです。そんな男がただの遺跡調査という理由で派遣されるはずがないでしょう？」
「そっか。それがエリーゼの言った『精霊がいる』ってことにも繋がるんだ」
思わず声が昂ぶってしまう。
精霊の気配を探知したエリーゼの嗅覚だけではない。
あのタイラスという幹部級の人材がわざわざ派遣されるほど重要な遺跡。その事実自体が、この場所に精霊がいるという一つの根拠になるというわけだ。
「じゃあやっぱりエリーゼの言ったとおりか。さすが」
「でしょでしょ？」
立方形の石を積み重ねた壁をじっと見つめるエリーゼ。
「あとはそうだね、精霊信仰ってことは使えそうな精霊具が残ってる可能性もありそう。こっちの道で正解だったんじゃない？」
「そうだけど、俺は精霊具使えないんだって。学園でも散々試したけどさ」
「あー、そうだった。精霊具は使えないのに精霊だけ召喚できるってのも不思議だねえ。レンてば、本当に古代召喚術に才能全部割りふっちゃった？」
むしろソレを面白がるような口調でエリーゼ。
隣を歩きながら、ふとこちらの足下を指さして。
「あとレン、そこ罠だからね」
「ん？」
彼女が指さした先は、通路の床にできた小さな亀裂だ。一見すれば地面に出来た無数の亀裂と何一つ変わらないが、よく観察すれば、あのひび割れだけが妙に深い。
「ああわかった。不用意に歩いていくと、靴のつま先がひび割れにひっかかって、その奥に埋めこまれた仕掛けを押しこんで罠が作動ってことか」
「たぶんね。押してみればわかるけど」
「何でその選択が出てくるんだよ!?　いいか、押すなよ？　押すなよ？」
「あ、ごめん。もう押しちゃった」

「エリーゼエエエっっ!?」

カチッ。

満面の笑みでエリーゼが罠のある亀裂に足を踏みいれる。その数秒後、巨大な地鳴りと震動が遺跡の通路を震撼させた。

音源は後方から。

凄まじい質量の何かが、凄まじい勢いで自分たちの歩いてきた方向から――

「落盤……いや、大岩か!?」

視界と通路。その双方を埋めつくす巨岩が転がりこんでくる。

いや、雪崩れこんでくると喩えた方が適切だろう。わずかに坂となった斜面によって、転がるほどに速度を増し、周りの横壁や天井の岩盤を抉るように削り、その上砂をも巻きこむ様はもはや土石流に近い。

「くそっ、大事な神殿を守るにしたって程があるだろ!?　とにかく前に逃げる。キリシェ、エリーゼ、フィア先輩も――」

「凍地氷天」

地鳴りが、止まった。

「レン、お前の鞄の中にわたしの飴が入ってるはずだ」

真っ青な氷塊と化して凍りついた土石流。

石一つ、砂一つにいたるまで完全に、そして瞬時に凍らせてしまう法術をただの一言で言霊として発動させた竜姫が、ツンツンと脇腹を突いてくる。

「一つほしい。まだ残ってるか?」

「……あるけど、俺としては今の出来事を説明してほしいんだけど」

「邪魔だから凍らせただけだ」

当たり前のように答えるキリシェ。

受けとった飴の袋を丁寧に剥がし、小さな飴を口の中に放りこんで。

「おいしい」

「嬉しそうで何よりで……つうか、無事で何よりなのかすらわかんなくなってきた。むしろ必死で罠をしかけた大昔の人間の方が気の毒になってきたかも」

「ねえねえ、次の罠は誰が踏もっか?　レンいってみる?」

「勘弁してくれって……」

目をキラキラさせて見つめてくるエリーゼに、レンは重い溜息で応えた。

「だけど毒矢に、それにさっきの土石流だろ。どっちも相当手が込んでたし、あの二つが終わった時点で、さすがに罠も残り少ないんじゃないか?」

「うん。先を眺めても、もうほとんど残ってなさそう。残ってても一つか二つじゃない？　残念だよねえ」

「……今さらだけどさ、エリーゼって罠とか好き？」

「大好き！」

ぴょんと小さく跳ね上がる先代魔王。

「だって罠とか騙し合いって最高に刺激的なんだもん。どんな仕掛けにしようかって考えるのも好きだし、上手いこと成功した時のこと想像するのも楽しいからね。……でも一番好きなのは、誰かが必死に細工した仕掛けを見破って、その上でわざと作動させて、さらにそれを嘲笑いながら打ち破っちゃうことなんだけど」

「腹黒いにも程があるだろっ!?」

「でも勉強になるでしょ。どういう場所にどういう罠が設置可能かなんて、実際に作動させて見て覚えるのが一番だから。そう、これもすべてはレンの勉強のため。アタシも仕方なく罠に引っかかっていると」

「……いや、今さら言われても説得力ないからな」

悪意ある罠を、さらなる悪意でもって無慈悲に打ち破る。

まさに悪魔の駆け引きらしい手法だ。それを誇らしげに語るエリーゼも、さすが冥界の元支配者と言うべきか。

「ところで火の始原精霊、まだ平気？　ずっと出っぱなしだけど大丈夫か？」

『……一緒ニイク』

自分の肩のまわりを浮遊し続ける精霊。

どれほど顕現していられるのかはレンにもわからないが、そんな紅蓮の精霊が、先と変わらぬ様子でコクンとうなずいてみせる。

――精霊の照らす通路。

明かりの心配はいらないが、湿った土の匂いと黴の匂いが奥に進むにつれて強くなり、深呼吸したただけで思わずむせ返りそうになる。

「かなり進んだよな」

「そうですわね。どこかでカナン巡礼聖教船とも合流する道に続くはずですわ。とはいえ、こちらの方が近道ではあるでしょうし。もしかしたら向こうが徊獣との戦闘で手間取っている間に、私たちの方が先に進んでるのかも」

こちらは、変わらぬ微笑のフィア。

人間ならば一息吸っただけで咳きこみそうになる強烈な遺跡の刺激臭も、大天使である彼女には届かないらしい。

……そういやフィア先輩、いつも不思議ないい匂いするし。

……天使の守護結界ってそういう嫌な匂いとかまで浄化してるのかもな。

「レン、何か気になりますの？」
意味深に口元をつりあげるフィア。
「え？　い、いや別に……」
「あらそうですか？　私、レンからの質問なら何でも答えてあげますのに。私のことで良ければ、それはもう余すところなく何から何まで」
「だ、だから何でもないって！」
「ちなみにスリーサイズは上から順に――」
「聞いてないからっ！」
「それは残念。またいつでも聞いてくださいね？　私のいい匂いの秘密なども」
妖艶な表情で、何かを誘うように手招きまでする大天使。考えていたことを完全に見透かされた気恥ずかしさに、レンは無言で顔を背けた。
「それはさておき、ねえレン？　あの宝石、綺麗ですわね」
「宝石？」
「あそこですわ、ほら。あの壁に埋まってる真紅の紅玉」
フィアが指さすのは通路のだいぶ先。
火の始原精霊の光が届くギリギリの距離で、精霊の赤い光と宝石の赤みが混色していたことでレンも指摘されるまで気づかなかった。
通路の壁に埋めこまれた紅玉。
罠だらけの道に、あまりに唐突に、そして目立つ位置に設置してある宝石。
「いや、さすがにコレは論外だろ……」
宝石の目の前まで歩いていって、レンは光り輝く紅玉を凝視した。
罠だ。誰がどう見ても罠。この宝石を壁からひき抜くか、あるいは触った時点で何かが作動する仕掛けになっているに違いない。
「これはさすがに、今さら引っかかる奴いるのかよ」
「……うーん。コレはアタシも拍子抜け。さすがに引っかかる気にもなれないなぁ」
「残念賞ですね。きっと罠の仕掛け人も発想が尽きたのでしょう」
頭をかきながら苦笑するエリーゼの後ろでは、哀れみの表情さえ湛えるフィア。
しかし、その中で。
「待て！　それは違うぞ！」
ただ一人、凛とした声を上げるのはキリシェだった。
煌めく銀髪をさっと指先ではらい、彼女が宝石の手前まで歩いていく。
「いいかレン、これが見た目通りの罠だと思うなら浅い、その考え方はあまりに浅いぞ！　エリーゼにフィア、お前たちもだ」
「ていうと？」

「よく考えてみろ。さっきまでああも巧妙に仕掛けてあった罠の数々。なのにこの宝石の設置はあまりに罠として稚拙。逆に不自然だ」

「……まあ、確かに俺もそれは思ったけどさ」

自信ありげに告げるキリシェに、レンは首をかしげてみせた。

「結局どういうこと？」

「うむ。結論から言おう。この宝石自体は罠ではない。あえて目立つ位置に宝石を配置し、本命の罠から気を逸らすことが狙いに違いない。つまり別の罠がこの近くにこっそり隠してあって、それこそが本命だ！」

胸を張って宣言する竜の姫。

「発想の裏をかいたつもりだろうが、あいにくわたしの目をごまかそうなど百年早い。というわけで、この紅玉は罠に見せかけた偽の仕掛けだ」

「お、おいキリシェ!?　待っ――」

「まあ見ていろ。こんな偽の罠に怯える必要もないということを証明してやる」

レンがそれを制止するより先。

あっという間に壁の紅玉を抜きとって、興味もなさそうにキリシェがそれをはるか後方へと投げすてる。

「ほら見ろ。やっぱり何も……ふぇ？」

呆気にとられたようなキリシェの声。

それもそのはずで、キリシェの放り投げた紅玉が地面に落ちるより先、自分たち四人の立っている地面一帯が消滅していたからだ。

落とし穴。

避ける間もなく、無明の地中へと四人揃って真っ逆さまに落下していく。

「やっぱり罠じゃねえか――!?」

「むぅ……罠でないと見せかけて罠。裏の裏とはなんと深い読み合いだろう。見事だ」

落下しながらも腕組みして妙に満足げなキリシェ。

同じく、一緒に落下しているはずの大天使と先代魔王も余裕の表情で。

「読み合い云云はさておき、この真下は……ああ、なんだ。ただの猛毒の池のようですわ」

「なんだつまんないの。煮えたぎるマグマくらい仕掛けてほしいよね」

「拍子抜けだな。たかが猛毒ごときでわたしたちを仕留められると思ったか」

「俺は即死するってば!?」

はるか真下にうっすらと見える濃紫色の沼地。

ボコボコと煮沸するように気泡が噴きだす様や、その禍々しい色からして明らかに猛毒としか思えない光景だ。

それが目の前にまで迫って――

「まあ、このまま池に落ちて服が濡れるのも何ですし」
光の奔流。
ほとばしる黄金色の輝きが、落とし穴の空洞を隅々まで照らしだす。
「しっかり掴まってくださいね」
背中に巨大な翼を顕現させた大天使フィア。
彼女の両手に支えられ、レン、エリーゼ、キリシェ三人の身体が毒池に落下する直前で空中でぴたりと静止した。フィアの両手にそれぞれキリシェとエリーゼが掴まって、そのキリシェの手にレンがかろうじて掴まっているのだが……
「……んっ」
キリシェの小声。
「ば、ばかレン!? この破廉恥、お前いったいどこを掴んだ!?」
顔を赤くしてキリシェが身震い。
レンを掴んでいない方の手で、ズレた胸元の衣装を直して——
「ち、違う!? 誤解だ！ 俺はただ、普通にキリシェの手を掴もうとしただけだって！ それがちょっと滑っただけで……」
「レンのえっちー」
「あらレン、ずるいですわ。キリシェとだけそんな楽しそうに」
「だから違うって！」
好き放題言われ続けながらも、フィアに引き上げられて地上へ復帰。
「……ふう。人間の学園に入学して以来、翼をまともに使ったのなんて四年ぶりですか。危うく飛び方を忘れかけてました」

http: www manga zone.org

「いや、助かったよフィア先輩」
「どういたしまして。でも大したことではありませんわ」
クスッと声を弾ませる金髪の天使。
その言葉どおり、自分たち三人を引き上げる様子はまるで危なげない。むしろまだまだ余裕すら感じさせる飛翔だった。
「だけど、もうこれで本当に最後の罠だったみたいだね」
通路の奥へと進んでいたエリーゼが、一人で寂しげに溜息。
「残念。ちょっと物足りなかったよね？」
「まったくだ。これなら先の通路で徊獣どもをひねり倒していた方が楽しかったぞ」
「確かに、少しばかり興ざめですわね」
各々好き放題に口にするエリーゼにキリシェにフィア。
人間には命がけの罠のはずが、彼女たちからすれば子供用の遊具か単なる退屈しのぎと大差ないらしい。
「ねえねえレン、次はもっと難しい遺跡行こうよ！　まだ人間が誰も踏破できてない最難関の遺跡、アタシに心当たりあるからさ！」
「それは気になるけど、わざと罠に引っかかるのだけは勘弁してくれって」
声を弾ませるエリーゼに肩をすくめてみせる。
と――
「ん。足音か？」
通路をまっすぐ進んだ先に見える曲がり角。
その奥から近づいてくる気配に、真っ先に反応したのはキリシェだった。
「この匂いは人間だな。レン、複数の人間が近づいてきてるぞ。たぶん旅団だ」
「人間て……さっきのカナン巡礼聖教船のことか？」
近づいてくる旅団。
そんなキリシェの言葉に、真っ先にレンの脳裏をよぎったものは、純白の法衣と闘衣で武装した世界最大級の旅団だ。
再度の遭遇。その予感に、軽い緊張が背筋を走っていくのを感じた矢先。
「なんだ！　おい今の轟音は？」
「まさか、こっちの道にまで徊獣が!?」
小走りで駆けてくる重装備の騎士たち二人。
その後ろには法術士らしきローブ姿の男性二人と、結界士か治癒士であろう女性が一人。最後尾からは、ランタンを持った知的な面持ちの少女が恐る恐る歩いてくる。おそらくは彼女がこの旅団の探索士だろう。ランタンを持つ手の、もう片方の手で地図と計測器具とを握っているのがわかる。

総勢六人。旅団としては標準的な人数であり、その編成も騎士と法術士とを中心に組んだ基本中の基本とも言える構成だ。

……さっきの白の服装じゃない。

……つまりカナン巡礼聖教船とは別の旅団？

「あの、俺たちに何か？」

そう告げるレンの前で、周囲を伺っていた騎士たちが緊張した面持ちで。

「それはこっちの心境だ。後ろで突然に轟音が鳴りひびけば、何が起きたのか気になるに決まっている。……確認するが、徊獣と遭遇したわけではないんだな？」

剣を構えたままの重装騎士。

そんな彼に、レンは無言で首肯してみせた。

「そうか、徊獣でないなら安心だ。なあリェン」

「は、はい！　徊獣の足音とは違う気がしましたので。でも正直ほっとしました」

ランタンを握る探索士の少女が、その場で胸をなでおろす。

だがそんな仕草もそこそこに。

「ちょ、ちょっと待って！　罠が作動してます！」

レンたち四人の後ろにできた巨大な落とし穴を一目見て、探索士の少女が大きく目をみひらいた。

「あ、あなたたち無事ですか!?　誰か落とし穴に落ちたなんてことは……」

「失礼、私たちがお騒がせしてしまったようですね」

そんな少女に、穏やかな口調で声をかけたのはフィアだ。すでに背中からは光り輝く翼が消えていて、いつもの彼女の姿に戻っている。

ちなみに火の始原精霊も、今はレンの後ろに隠れている。

「見てのとおりですわ。私たちの失態で、設置されていた罠に引っかかってしまったと」

「罠に引っかかったって……あの、わたしの聞き間違いじゃなければ、すごい音が立て続けに二回ほど聞こえたんですけれど」

「あー、それさっきの土砂崩れの罠のことだと思うよ。落とし穴と合わせて二回。これで辻褄が合うでしょ？」

飄々とした口調で答えるエリーゼ。

「そかそか。アタシらの前にもこっちの通路を通ってる人間がいたんだね。今までの罠もちゃんと全部避けてたんだ。偉いねぇ」

「え？　あ、ありがとうございます……？」

どう見ても自分より年下のはずの幼女に褒められて、困惑気味にうなずく探索士。

一方で、彼女の前に立つ騎士たちは訝しげな表情のままで。

「……お前たち、あの罠を作動させて無事だったのか？　リェンが言うには相当大規模な罠が設置されていたはずだが」
「大規模？　そんな罠なんてあったかレン？」
「いや、だからさっきの土砂崩れと落とし穴だって話だよ」
真顔で聞いてくるキリシェに、レンは苦笑気味に肩をすくめてみせた。
「ええと、とにかく俺らは全員無事だから。むしろ騒がせて悪かったよ。エリーゼがわざと罠を踏んだせいでとんだ迷惑を……」
「え？」
「ああいや、こっちの話。気にしないで」
聞き返す探索士の少女に、慌てて手を振ってみせる。
「ところでアンタたちは？　カナン巡礼聖教船じゃなさそうだけど」
「あんな有名どころと比べられるほど立派じゃない。こっちはまだ無名の弱小集団だ」
苦笑いを隠そうともしない重装備の男。
「地元の都市周りで経験を積んで、その腕試しに遺跡に挑んだ結果がこれだ。もう一つの通路が徊獣の巣窟になっていたから慌てて逃げてきたが、こっちの道も罠だらけ。リェンがいなかったらどうなっていたことか。お前たちも、罠は作動させてしまったようだが、無事だったのなら不幸中の幸いじゃないか」
「ええ、まあ何とか」
……不幸中の幸いというか。
……ある意味、全員無事なのが必然みたいな感じだけど。
罠の仕掛けられている道の方が楽しいからという理由でエリーゼが選んだ。
そんなことを素直に言う気はレンにもない。
「だけど、そっちも無事そうで。徊獣の巣窟になってる道で徊獣と戦うことは？」
「もちろんありました。だけどわたしたちが苦戦してる間に、カナン巡礼聖教船の方々がその徊獣たちを片っ端から蹴散らしていったんです。……凄すぎて何も言えませんでした。あれが世界を代表する旅団なんだって思い知らされた気分です」
呆けた表情でそう呟く探索士の少女。
「幸いこの先は安全そうな道なので、わたしたちは急いでこの遺跡を脱出するつもりです。まだまだ実力不足なのがわかっただけでも収穫でした。あなたたちは？」
「俺たち？　俺たちは……」
そう言われ、後ろのキリシェたちへと軽くふり返る。
――素直に答えていいんだよな？
その意図が伝わったのか、後ろに控える三大姫たちも無言で頷いてくれた。
「俺らは、もうちょっと遺跡を探検してみるよ。進めるところまで」

この神殿のどこかにいるであろう精霊。それをカナン巡礼聖教船より先に見つけるために、近道であるはずのこちら側の通路を選んだのだから。

「あんたらは脱出か。最後まで気をつけて」

「お前たちもな。参考までにだが、この少し先に休めそうな空洞もあった。まだ遺跡を探索する気なら、軽い休憩にはちょうどいい場所だと思う。――互いに健闘を」

早足で去っていく六人組の旅団。

その言葉どおり、多少無理をしてでも極力早くこの神殿を脱出したいという心情が、背中ごしに伝わってくる。

「なるほど。ともあれこれで、ここでの精霊探しは私たちとカナン巡礼聖教船との競争になったようですわね」

「予想どおりの展開ってことだろ」

並みいる徊獣を蹴散らしながら進むカナン巡礼聖教船。

一方、仕掛けられた罠を片っ端から突破していく自分たち。

共に精霊を求めて遺跡を進んでいる――

「ねね、いま言ってた休憩できそうな空洞あったよ。広くてちょうどいい感じ！」

一人先に進んでいたエリーゼが、曲がり角から顔を覗かせて手招き。

「早く早く、おいでってば！」

「ちょうど頃合いですわね。無理して急いだところで、精霊の住処を見逃してしまえば元も子もありません。ゆっくり進むつもりで一度休憩しましょう」

エリーゼに頷くフィア。

「そうだな。わたしも落ちついて菓子が食べたい。レン、行くぞ」

「了解、そんな急くなって」

先を進んでいくキリシェたちの背を追って、レンも小走りに通路を駆けた。

4

パチ、パチと音を立てて火花が爆ぜる。

小さく舞い上がった火の粉が宙に躍り、一瞬の煌めきを余韻として消えていく。

寝ずの番。

上埃の積もった床に腰を下ろして、レンは目の前の焚き火をぼんやりと眺めていた。

「……夜、十時か」

自分の背中側にはテント。

キリシェとフィア、そしてエリーゼが眠りについてちょうど二時間。洞窟の奥深くでは太陽の位置もわからず、手にした懐中時計だけが時刻を知らせてくれる。

「でもすげえな。やっぱりここ神殿だったんだ」
神殿倉庫――信仰の儀式に使うための祭具や装飾品が置かれていたであろう空間。
あいにく貴重な祭具は既にほとんど持ちだされてしまっているようだが、古びた燭台や砕けて真っ二つになった儀礼具のおかげで、ここがどういう場所なのかは特定できた。
「何の神殿だったんだろうな。やっぱ精霊信仰かな？」
『……』
宙を浮かぶ火の始原精霊。
炎の精霊だけあってやはり火の気を好むのか、今は焚き火のすぐ真上を漂っている。
一度は消えていたものの、レンが一人で焚き火を眺めている間に何の前ぶれもなく現れたのだ。それから何をするわけでもなく、ただ自分の周りを漂っているだけ。
……でも、前からそうだったよな。
……いつも俺が一人の時に現れては消えたりだったし。
「あのさ、もしかしてお前、気遣ってくれてるのか？」
『――』
「そっか。言い方が飛躍しすぎたな。……ええと、もしかして、俺が一人だからって寂しくないように出てくれてるのか？」
精霊は無言。
ただ、何かを考えるようにこちらをじっと見つめて。そして。
『一緒ニ、イル？』
「あ、やっぱりそうなのか。何だか悪いな、お前にまで心配させちゃって」
思わず噴きだしそうになるのを堪え、首を横にふってみせる。
人間どころか、まさか精霊にまで心配させてしまうとは自分でも思いもしなかった。
「でも平気だよ。今は交代で見張りしてるだけだから。お前も今日ずっと顕現たし、疲れただろ？　もう休んで平気だから。また明日頼むよ」
『――』
数秒の間をあけて、ふっと火の始原精霊の姿が消える。
それを見届けて。
「よく懐かれているな」
後ろのテントから、鈴を転がすような声が聞こえたのはその時だった。
微苦笑を浮かべた銀髪の少女。
「キリシェ？　あ、もしかして俺の声で起こした？　悪い」
「もともと寝付けなかっただけだ。……フィアを真ん中に配置したのが失敗だった。とにかく寝ぼけて抱きついてきた挙げ句、あの無駄にデカい胸を押しつけてくる。暑苦しくて仕方ない」
眠たそうな目をこするキリシェ。

「想像つくだろう？　あの胸に顔を挟まれるだけでどれほど窮屈か。息もできないぞ」
「……いや、それ俺としてはすごく返事に困るって」
返事の仕方が思いつかずに適当に相づち。
と、そんな自分の横にキリシェがちょこんと腰かけてきた。
「それはさておき、お前の疲労はないのか？」
「俺？」
「ずっと火の始原精霊を従えていたからな。竜には古代召喚術とやらがよくわからないが、精霊を使役し続けることに術者の負担はないのか？」
「ああ、そっか。普通の法術はそうだもんな」
法術上の攻撃系法術、あるいは結界士の結界もそう。長時間使えば使うほど、それに比例して術者の肉体的・精神的負担は蓄積されていく。
「俺は平気だよ。そのぶん火の始原精霊の方が疲れてるんじゃないかって心配でさ」
「なるほど、それでさっきの『もう休め』という話か」
虚空を見上げるキリシェ。
今しがた精霊が消失した辺りの場所をぼんやりと見つめながら。
「お前らしい言葉だな」
「ん？」
「精霊に対して、『もう休め』と自然に口にすることが。この場所に来る途中でも、同じように火の始原精霊のことを気に掛けていた」
「……ええと。俺らが罠に引っかかりまくってる時のことか？」
〝ところで火の始原精霊、まだ平気？　ずっと出っぱなしだけど大丈夫か？〟
〝……一緒ニイク〟
「変わり者だな」
懐から飴玉を取りだして。
それを手にしたキリシェが、ふっ、とその表情をやわらげてみせた。
「仮にお前以外の人間が古代召喚術を使えるようになったとしよう。きっとソイツらは、覚えたての失われた術式を心ゆくまで自慢して、召喚した精霊がどれだけ力を発揮できるのか、その限界を確かめようとするだろう？」
「……そうかもしれない」
「だがお前は違う。むしろ召喚する精霊のことを気遣って、精霊がなるべく力を出さずに済むことをまず考える。それが『優しい』と呼ぶものかはわからないから『変わり者』と表現したが、とどのつまり、お前はそういう奴なんだろうな」

従順というより、懐いているような雰囲気の火の始原精霊。
自分が古代召喚術を身につける前から頻繁に自分の前に現れて、その声が聞こえない間もずっと一緒にいてくれた。
「お前の古代召喚術は、もしかしたら才能や素質ですら無いのかもしれない。むしろその、精霊を惹きつける性格というか気質こそ、お前本来の『特別なもの』なのかもしれないな。お前が精霊を呼ぶのでなく、精霊の方からお前に集まってくる。そんな印象を受けた」
「俺、それ褒められてる？」
「珍しいという意味で口にしたまでだ。それが褒めるに値するものかどうかは、これからのお前と精霊次第という気がする」
ふしぎな微苦笑だった。「これからのお前」という言葉にどんな未来図を描いたのか。
彼女の視線は、現在ではない遠い未来を見つめているようで。
「あと、この神殿のどこかに精霊の住処が隠されているとエリーゼが言っていただろう。わたしはそのあたり鼻が利かないから、お前とエリーゼとで探しだせ」
「ああ、そうだったよな」
ほかに気になるとすればカナン巡礼聖教船だろう。
最初から精霊発見を目的にこの神殿を訪れて、自分たちとは別ルートで進んでいるはず。さらに言えば、あのタイラスとプルミエールの二人だけのはずがない。まだ奥に何人のメンバーがいるかもわからない状況だ。
「カナン巡礼聖教船には見つかりたくないな。完全に警戒されたっぽかったし」
「問題ない。歯向かってきたら私が神殿の外まで放りだしてきてやる。竜の渓谷では日常茶飯事だからな。人間の扱いは慣れっこだ」
「いやいや、そんな真似したら聖地カナンで指名手配されかね――」
そこまで言いかけた矢先。
不意に頭を過ぎったものは、競争相手である旅団への懸念ではなく、むしろキリシェの言葉に対する好奇心だった。
「そういや竜の渓谷ってどんなところなんだ？　俺も学園にいた時に教官から聞いたけど、世界中から竜が集まる秘境なんだろ」
「秘境というほど大げさではない。ただの住処だ。わたしもそこで生まれて育った」
「おいしい」
手にしていた飴玉の包みを剥がすキリシェ。
一口大の飴を口に放りこんで。
「……夜に甘いモン食うと虫歯になるぞ。まあそれはさておき」
満面の笑みを浮かべる竜の姫。
飴玉一つでここまで嬉しそうな笑顔を見せる少女が、そんな秘境に集うすべての竜たちを束ね

る姫だと、いったい誰が信じられるだろう。
「竜の姫って呼ばれてるくらいだし、キリシェが竜の渓谷で一番偉いんだ？」
「偉いというか、わたしに逆らえる竜がいなかった。それだけだ」
飴を口の中で転がしながら、キリシェ。
その緑玉色の瞳で焚き火をぼんやりと見つめながら。
「竜の社会は年功序列が基本だ。長く生きる竜ほど身体も大きく強い。が、そんな渓谷に生まれた異端児がわたしだった。何しろ生まれた時点であらゆる竜より強かったからな。他の長老竜たちもわたしに屈服するしかなかった」
「力ずくで？」
「そんなことはしていない。わたしは……ただそこに『居る』だけだったのに、同胞たちが皆わたしを恐れ、勝手にわたしを姫と奉った」
そう告げる銀髪の少女の口調は重々しく、いつにない曇った感情を帯びていた。
「とはいえそんな姫としての期間も、人間の時間換算で十数年の間だけだ」
「エルラインの旅団に入ったからだろ」
「そうだ。そこで初めて、気兼ねなく接することのできる仲間と出会った。三百年前は、まさに異例の旅団だと地上も天界も冥界も大騒ぎだったらしいが」
ふり返るキリシェの視線を追って、レンもまた自分の背後を見やった。
静まりかえったテント。
そこで寝入るのは天界最強の大天使フィアに、冥界の主であった先代魔王エリーゼ。
「そっか。でも聞きたかったんだ。エルラインと一緒に冒険してどうだったのかって。世界中を一緒に巡ったんだろ？　楽しかった？」
「……嬉しかった、というのが大きかった。同胞からも恐れられていたわたしに、初めて対等な仲間ができたことがまず新鮮だったから」
しばらく何かを考える空隙を挟んで。
ぽつりぽつりと、キリシェは懐かしむような口調でそう続けた。
「エルラインだけじゃない。フィアもエリーゼとも、時に口論になったり殴りあいの喧嘩になる時もあった。しかしその後すぐ、それができる相手がいることに感謝した。わたしを恐れずに正面から反論してくれたり、正直な意見を言ってくれる人間や大天使や魔王。そのおかげで、初めて人間や天使や悪魔というものを理解できた」
「……俺としては、その口論とか殴りあいの様子も気になるけど」
「一切の手加減も躊躇もなしだ。口論も殴りあいも、余計な禍根を後に引きずるよりは、その場ですべて吐き捨てた方がいい。これは四人の共通意見だったから。おかげで生傷の絶えない旅だったな。敵から受けた傷より味方に殴られてできた傷の方が多い旅団というのも珍しいだろう？」

愉快そうに口の端をつりあげる彼女。
「ええと……喧嘩するほど仲がいいって解釈しておくよ」
「そういうことだ。単純な殴りあいだとフィアが優勢ではあったが、それでも実力は拮抗していた。何でも言いあえる仲間がいた。だから楽しかった。見たことのない世界を巡る旅も、わたし一人ではその魅力も半減していたと思う」
仲間がいたから楽しかった。
――ただ仲が良いだけの旅団ではなく。
――人間と天使と悪魔そして竜とが、時に口論し、時に争いながら絆を深めていった。
その絆があるからこそ三百年後の現在でも、キリシェ、フィア、エリーゼは互いに全幅の信頼を置いている。それはレンの目から見ても伝わってくることだ。
「……そっか」
「どうした？　そんな達観したような溜息なんかついて」
「いや、やっぱり好いもんだなって。そう思っただけだよ」
自分を見つめてくるキリシェ。
その彼女に首を振って、レンはそれだけ口にした。
「ああ、だけど旅をしてる間はどうしてたのさ。今もそうだけど、キリシェがいないから、竜の渓谷の方は、別の竜に統率を任せてたりするんだろ。それはやっぱり年長者っていうか、長生きしてる竜？」
「わたしの妹だ」
「妹!?」
叫んだ声が裏返った。
「え、いや、だって……妹？　そんなの全然知られてないじゃん」
「冥界の現魔王だってそうだろう。アレが先代魔王の実弟だというのも、知っている人間は世界中に十人といない」
そこまで言って。
何か考えるような面持ちでキリシェが腕組みをした。
「とはいえ、今のはわたしの言い方も良くなかったな。わたしの場合、正確には姉妹の契りを結んだ『妹分』だ。そもそもわたしとカルラは同じ血族でないからな」
「カルラ？」
「妹だ。これがまた珍妙な種で、わたしは天銀竜の純血という意味で個体数が少ないが、霊王竜はまた別の意味で数が少ない。カルラの場合は純血どころか、ありとあらゆる竜の血が混じった雑種だが、その中でごく稀に生まれてくる奇蹟の血統がある」
「霊王竜……あの幻の竜か」
レン自身、霊王竜についての知識は皆無に等しい。

たとえば天銀竜が最古の竜種という話は古くから知られている。エルライン剣帝旅団でもあった三大姫のキリシェが天銀竜であるし、それなりの逸話や伝説が残っている。

しかし霊王竜についての情報は、その存在以外、人間側はほとんど有していない。

――奇蹟の血統。

竜種であるキリシェがそう言うほどに、霊王竜については個体が少なく、そして滅多に竜の渓谷から下界に現れることがないからだ。

「とにかくそのカルラっていう霊王竜の妹がいて、そいつがキリシェのかわりに竜の渓谷の統率役をしていると」

「そうなるな。竜の渓谷での『格』は、最古の竜である天銀竜に匹敵する最上位。ただ、単純な強さではわたしが強すぎたから、わたしが竜の姫になった。とはいえわたしに何かあった時には、姫の代わりが必要だろう？　それがカルラとの姉妹の契りだ」

「良い妹じゃん。ちゃんとキリシェの代役を果たしてるんだろ？」

「……代役という意味では、な」

苦笑にも似た溜息で応えるキリシェ。

自分の隣でうずくまるように両膝を抱えて口をつぐむ。それは普段の彼女らしからぬ、あまりに弱々しく儚げな仕草だった。

「もう二月ほど前のことになる。封印から脱出して渓谷に戻ったわたしが、世界録を探しにいくと言った時、一番強く反対してきたのがカルラだった」

「えっ!?　それはどうしてだよ」

世界録は、英勇エルラインにかかわる最後の遺品だ。

かつて彼の仲間であったキリシェが、それを探しにいくことは不自然ではない。むしろ誰よりそれを手にする資格があると言っても過言ではないというのに。

「人間と竜は、生き方も考え方も違う。人間がそう思っても、それがそのまま竜の理屈にあてはまるわけじゃない。一言で言えばそういうことだ」

「……」

「そういう意味で、竜の渓谷に戻るのは億劫というのが本音だ。わたしの力の回復と、剣聖シオンが竜の渓谷を訪れた理由を確かめること。世界録を探すのに必要なこの目的さえなければ、いっそ遠回りしてでも避けたい場所だった」

「……そっか」

キリシェも大変だな。

条件反射的にそう言いかけた言葉を、レンはぐっと喉の奥へと押し返した。

――そんな言葉だけの同情なんて望んでいないだろう。

――隣に座る彼女のゆれる双眸が、それを何より明確に語っていたから。

「悪かった」

「ん？」
「愚痴のようになってしまったな。そのつもりはなかったんだが……」
バツの悪そうな表情で苦笑いして立ち上がるキリシェ。腰についた土埃を払い落として、彼女がゆっくりと、それでいて優雅な仕草でもって背を向ける。
「わたしはテントに戻る。見張りの邪魔をするのも悪いからな」
「おう。……あ、キリシェ待った。後ろ、土埃が取り切れてないって」
ショートスカートの端に付着した土。
キリシェも払い落としたつもりだったろうが、まだ落ちずに付着したままだ。
「まだ残っていたか？」
「ちょっとだよ。取ってやるから後ろ向いてな」
キリシェに後ろを向かせたままレンも立ち上がって、彼女のスカートの端っこに付いたわずかな土を手ではたき落とそうとして――
「きゃうん!?」
その指先が勢い余ってキリシェのお尻に触れてしまった。
ほぼ同時、悲鳴なのか歓声なのかもわからない声を上げ、竜の姫が全身をビクッと痙攣させて飛びはねた。
「あ……」
「ば、ばか！　前に言ったではないか!?」
両手でお尻を隠してふり返るキリシェ。
「竜の……ココは、普段なら尻尾で隠れてる部分だから。触れられること自体まずないから、そ……その……すごく繊細なんだから！」
「ご、ごめん！　いや、ホントそんなつもりじゃなかったんだって！」
「……と、とにかく」
お尻を押さえた恰好で、顔を真っ赤にしながらキリシェがもじもじと。
「そ、そういうのは……ま、まだ早い。わたしにも心の準備が……」
「はい？」
「～～～～～っ、な、何でもない！」
ぷいっと顔をそむけるキリシェ。
それは怒ってるからではなく、むしろ紅潮した頬を隠したい気持ちの表れであるかのように、何だか慌てた印象の仕草だった。
「……だから、わけわかんないって」
ぽつんと一人残されて。
レンは、誰にともなくそう呟いた。

Record.3 ― 土の始原精霊（ノーム）

1

天井からこぼれる雫（しずく）。
外の世界で降り出した雨が地中に染みこみ、それが神殿の壁面を伝って、こうして通路の天井から降りそそいでくる。
地面は水滴を受けてヘドロ状。沼地のように水が溜（た）まった窪（くぼ）みがいくつも出来ている。
そんな神殿通路を――
「へえ。じゃあ冥界（めいかい）って雨が降らないんだ？」
「そうそう。なにせ地底世界だもん。だから、初めて地上に来た時はビックリしたなぁ。誰かの攻撃法術でも浴びてるのかって焦（あせ）ったからね」
「やっぱ自然環境からして地上と冥界って違うんだな……」
上機嫌にスキップ調で進んでいくエリーゼ。
ぬかるんだ地面を軽やかに進む彼女を追いかけながら、レンは驚愕（きょうがく）の声を上げた。
――すべての罠（わな）を抜けた先。
障害も徊獣（かいじゅう）も見あたらない通路。それでも用心しつつ進んでいたのだが、天井から降ってくる水滴を見たエリーゼが、思いだしたように話しかけてきたのだ。
冥界。
地上に設置された審門（ゲート）をこえた先に続く、地下世界。
特殊な大気の流動によって昼間は灼熱（しゃくねつ）、夜間は全（すべ）てを凍（い）てつかせる冷気に包まれる環境。そんな世界の覇者が悪魔であり、その主（あるじ）であったのがエリーゼだ。
「レンも、冥界来るならアタシが案内したげるよ。うちの家すっごく大きいから何人でも泊まっていけるし」
「……ま、まあ。それは機会があればな」
一流の旅団（パーティ）たちでもまず躊躇（ちゅうちょ）する冥界踏破（とうは）。過去多くの旅団（パーティ）たちが冥界の全容を探ろうと突入し、そしてことごとく逃げ帰ってきたのは有名な話だ。
「いやー、懐かしいね。二百年前にエルラインがたった一人で殴（なぐ）りこんできたの。冥界を一人で歩きまわって、襲ってきた悪魔を返り討ちにしてウチの城の場所まで案内させてさ、城の中でもアタシの手下をボッコボコに蹴散（けち）らした挙げ句、アタシに向かって『おい、今すぐ天界と喧嘩（けんか）するのやめろ』とか言ってくるんだもん」
「発想がぶっ飛んでるな……」
「だよね？　そう思うじゃん。そしたらさ、『冥界に来る前に、天界の女神とは話をつけてき

た』って言うんだよ。信じられる？　たった一人の人間がだよ？　あの当時、天界の女神レスフレーゼもそうだけど、天界には女神より危険な戦闘狂の大天使がいるっていうのは冥界でも常識だったし」

くるりとふり向くエリーゼ。

「ねえフィア？」

「お互い様ですわ。あなただってエルラインに大層ひどく惨敗したでしょう」

意味深な視線と口調でせまる先代魔王。

その視線を軽く受け流し、爽やかな微笑で応えるのは金髪の大天使だ。

「でも、確かにエルラインにしかできない発想でしたわね。まさか女神レスフレーゼ様を地上に下ろして、冥界の主である魔皇姫と握手させるなんて」

「まったく。アタシも冗談じゃないって思ってたけど、後ろでエルラインが見張ってるし、負けちゃった側は言うこと聞くしかないもんね。ていうか、あの握手のせいで一年間くらいアタシの手に女神の祝福がついちゃってさ。手がヒリヒリしちゃって」

「レスフレーゼ様も同様ですわ。握手した時に魔皇姫の障気が手にこびりついて、しばらく手の腫れが治らなかったと愚痴っていましたから」

天界と冥界。そして天使と悪魔。

何百年と続く天上世界と地下世界の争いにおいて、その戦いの舞台となったのは中間層にあたる地上だった。

天使と悪魔の戦火が人間社会にも被害をおよぼす。

とはいえ人間がその戦いに割って入ることもできず、ただ逃げまどうのみ。そんな抗争をたった一人で鎮めたのが剣帝エルラインというわけだ。

「そうそう。レンも、冥界なんかより先に天界を案内しましょうか」

「天界……え？　行けるの!?」

冥界とは別の意味で、人類の踏破が難しいとされているのが天界だ。

隠された審門を見つけることさえできれば誰でも通過できるかわりに、危険極まりない生態系と障気に満ちた世界が冥界とされている。

対照的に。

そもそも審門を通過すること自体が至難であると言われるのが天界だ。

天使たちによる審判――天界への到達者の記録は数えるほどだが、天使から課される審門通過の条件は様々だ。天使の気まぐれか。または旅団ごとに必要な通過条件が違うのか。人間の立場からは知りようもない。

「たしか、天界に行くには天使からの要求をいくつも満たす必要があるって聞いたけど」

「その点はわたくしが同行していますのでご心配なく」

頷くかわり、フィアが器用に片目をつむってみせる。

「冥界と違って素敵な場所ですよ。とても美しい光景が広がる楽園です」
「あっ、フィアってばずるい！　冥界だって良い場所だもん。天界なんて行っても退屈なだけだし、冥界の方が刺激的でいいってば！」
「いえいえ、まずは女神様の祝福をレンに受けさせて――」
「ダメダメ。先に冥界の楽しさを――」
「まずは竜の渓谷だ」
にらみ合う大天使と先代魔王の言い合いが竜姫の一言でピタリと止まった。
「あら珍しい。キリシェ、あなたが竜の渓谷でレンを案内すると？」
「わたしが案内しなければ、事情を知らないレンが取り囲まれるか、問答無用で追い返されるだけだろうが」
天井から落ちてくる水滴を手で受けとめながら、キリシェ。
「まあ心配するなレン。竜姫がついている。竜の渓谷にも堂々と入ればいい」
「……そう言われると余計緊張しそうだけど」
秘境リ・インファリエル。
地上の支配者である竜の聖域とも称される旅団ならば一度は踏破を夢見る秘境の一つだが、実際にその秘境を探索した者は決して多くない。
――ことごとく追いはらわれる。
どんなに巧妙に結界を張ろうとも、気配を殺して侵入しようともたちどころに看破され、そして竜の怒りを買う。それがどれほど恐ろしいかというと、たとえば天使と悪魔の抗争が地上で行われる時においても、その秘境リ・インファリエルだけは戦火が及ばないように天使と悪魔側が妥協したと噂されるほどだ。
それほどまでに、竜の脅威は尋常でない。
「エルラインが最後に訪れた聖域が、その竜の渓谷だったんだろ？」
「そうだ。最初に天界で、次が冥界。それで最後に竜の渓谷だと言っていたな。あの時は、天界と冥界を屈服させた人間の噂はわたしも聞いていた。とはいえ、まさかわたしにまで挑む奴がいるのかと驚いたが」
水のたまった地面。
池のように広がる水たまりを悠々と飛びこして、竜の少女がふり返る。
くすりと。
その緑玉色の瞳に、ほのかな悪戯心と期待をこめて。
「お前も早く強くなれ。竜の渓谷もそうだが、天界や冥界も、それに地上にもまだまだ人の知らない秘境、聖域は無数にある。苦労してその場所を見つけても、そこの守護者に追い返されてはつまらないだろう？」

「ああ、そうだよな」
握る手の平に力をこめてレンは頷いた。
……キリシェの言うとおりだ。
……俺だって、そのつもりでこの旅団についてきたんだから。
自分の知らない未知の世界。
どこまでも世界を巡り、その先で何を見て、何と出逢う未来が待っているのか。子供の頃から夢見ていたことだ。
「あとお前の場合、エルラインの剣技の習得より先に、総合的な肉体強化も重要だな」
「ていうと？」
「体力と筋力、それに耐久力。ちなみにエルラインは拳骨一発で疾竜を殴り倒していたぞ。あと、他の竜が全力で踏みつけても生身で耐えきっていた」
「意味不明にも程があるだろ!?」
「わたしだって、そこまで要求する気はない。アレはちと異常が過ぎた」
ごくごく真面目な口ぶりのキリシェ。
「だが、それも本人は気合いと努力だと言っていたのはわたしが証言する。旅の途中でさえ、アイツが世界中の人間の誰よりも努力していたのは……いや、さすがにそれは努力で何とかなる問題か？」
「それはわたしにもわからない。ただ、アイツがまともに睡眠をとったのを見たことがない。夜中、わたしやフィア、エリーゼが寝ている間もとにかく剣を振るい、身体を鍛え続けていた。あるいは……いま思えば、自分の死期を自ずと悟ったうえで生き急いでいた。そう感じるほどに、アイツの強さは紛れなき修練の結晶だったとは思う」
「……そっか」
剣帝エルライン。
人類の到達点。究極の剣才に恵まれた孤高の騎士。
占書にそう記された英勇の、何人にも知られざる背景。彼と旅した三大姫しか知るべくもないが、それがエルライン本来の素顔なのだろう。
……剣才はあったかもしれない。天才だったかもしれない。
……だけど、そんな剣帝だって努力してたんだ。
エルラインとて人の子なのだ。
人として生まれた者が、人という強さの枠を打ち破るために、いったいどれほどの覚悟と執念を要したことだろう。
「自覚しているだろうが、お前は力押しでなく技巧派の剣士だ。弱点を突いて一撃の下に沈めるべきだ。――そう言えば聞こえはいいが、やはり剣帝とお前とを比べた時に、アイツにあってお前に無いものの決定的な部分はそこだろうな」

純粋な肉体性能。

それはレンが、聖フィオラ旅学園で同世代の学生騎士と比べられた時、まさにもっとも惨めな思いをした部分でもある。

反応と敏捷性では負けていない。

しかし自分より体格に秀でた剣士を相手にした場合、どうしても剣の応酬で不利になる。時間が経てば経つほど、根本的な体力負けでレンが徐々に不利な状況に追いつめられていくのが訓練の日常風景だった。

「……そう、だな」

剣士として恵まれているとはいえない体格。

それを補うつもりで剣の技巧を磨き続けてきたものの、いつか誤魔化しきれない時がくる。それは自分でも薄々と感じていたことだ。

「そう沈んだ表情をしなくてもいいですわ、レン」

「フィア先輩？」

「以前にキリシェが言ったとおり、あなたの努力は間違っていません。ただエルラインの剣技である超絶技巧、すなわち神業と呼ばれる剣技を会得するためには、どうしても最低限の肉体性能も必要である。そういうわけです。ね、キリシェ？」

「そう。それが言いたかった」

フィアの助言に満足げにうなずく竜の少女。

「悪魔の纏う障気、天使が幾重にも展開する守護結界、それに鋼鉄以上の強度である竜鱗。これらも必ず弱点なり、結界の脆い箇所が存在する。わかりやすい例が……そうだな、竜の逆鱗と言えばわかるだろう？」

「ええと、竜の弱点っていうのは聞いたことある」

逆鱗――強靱な鱗のなかで、唯一逆さに生えた鱗のことだ。

竜の体表でもっとも痛覚神経が集中した場所であり、これを切断された場合、いかなる竜であっても激痛で意識を失うとされている。

「人間社会では逆鱗を破壊して竜退治と言われる風潮があるが、とんだ大間違いだ。並の剣士がどれだけ全力で斬りつけようと、子竜の逆鱗にさえ傷一つつけられずに剣の方がへし折られる」

「……そんな甘いわけないもんな」

「人間が竜と戦う場合、エルラインのように拳骨で仕留める変人を除けば、剣の技巧はもちろん、逆鱗を破壊できるだけの威力をのせた斬撃が不可欠になる。今のは竜で喩えたが、大型個獣、あるいは聖域を守る真獣や聖獣でも同じことだ」

「あと精霊も、ね」

そう言ったのは。
今までじっと話を聞いていたエリーゼだった。
「レンにとっての精霊って、もしかしたら火の始原精霊みたいに無害で勝手に懐いてくるイメージかもしれないけど、むしろそれってすごい珍しいからね」
「ああ、俺もそれは学園で教官から教わった」
精霊は個体ごとに気質が大きく違う。
たとえば精霊使いは、精霊の力を宿した武装を使って戦う技能だが、精霊とて自ら進んで力を貸してくれるわけではない。
好戦的な精霊。
悪戯好きな精霊や、臆病な精霊。
精霊の住処を探しだし、そして精霊の気分と気質を見極めて交渉し、初めて精霊が人間の武器に力を授けてくれる。それが精霊具と呼ばれる特殊な武装だ。
「エリーゼも、精霊のそういう知識って誰かから教わったのか？」
「アタシ？　アタシは自己勉強だね。もともと霊的波動体に興味もあったし、冥界じゃあ魔王に挑んでくる奴もいなくなって暇してたから、ちょうど暇つぶしにね。精霊の匂いを探知するのもその時に練習したの」
声を弾ませて答えるエリーゼ。
「だから楽しみだよ。この神殿の精霊はどんな奴かな？　さあどうなるかな？」
「大人しい奴だといいんだけど」
意味深な笑みを向けるエリーゼに、レンは肩をすくめてみせた。
歩き始めて一時間以上。わずかなヒカリゴケの明かりを頼りに、狭い地下通路を進んでいくのは体力以上に精神力を削る戦いでもある。
……罠も徊獣も。
……もう完全にこれっきりって保証もないもんな。
そして精霊。
住処があるとすれば神殿の最深部だというのは予測できるが、現在地がわからない以上、最深部にあたる場所も予想がつかない。
「でも結構歩いたよな？　昨日から考えれば丸一日歩きっぱなしなわけだし」
「そうだねぇ。実は精霊っぽい匂いもしてるんだけど」
「え、それいつから!?」
「ついさっき。キリシェが話しだしたあたりで、やーんと理由があったんだから」
したり顔で口にする褐色の幼女。
「とにかくも、そろそろ楽しい場面に出くわしそうな――」
逆にアタシが一切喋らなくなったでしょ。ち

直後。

大地が、揺れた。

「っ、なんだ!?　この揺れ……」

轟音。

エリーゼの言葉をさえぎって、大規模な落盤を思わせる崩壊の音がこだました。

そしてこの鳴動。地震のような連続性の震動ではなく、不定期に、通路の奥から大量の爆薬が破裂したような爆音が伝わってくる。

「この波長……人間の法術だね」

「ええ、発動源はこの先ですわね。何が起きてるか大方の想像はつきますし、せっかくだから便乗させてもらいましょうか」

愉しげに顔を見合わせる大天使と先代魔王。

そのやりとりを横目に――

「行くぞレン」

「大丈夫、いつでも覚悟はできてる」

真っ先に走りだすキリシェの背中を追って、レンも剣を携えて駆けだした。

……これほどの爆音をまき散らす法術。

……どこかの旅団と徊獣との交戦。それもかなり強力な相手だ。

咄嗟にその光景を思い描く。

最初に出くわした岩蜥蜴？　いや、岩蜥蜴が相手であれば、それが複数体でもここまで巨大な法術の発動は必要ないはず。

だとすれば旅団が交戦している相手は――

「法術の波動、その角を曲がった奥からだよ。レン気をつけてね」

「助かる」

エリーゼの助言にただ一言そう返し、レンは通路を駆けぬけた。

輝かしい光に満ちた広大な空間。

法術による人工灯とヒカリゴケの明かりに照らされた場所は、実に二十メートル四方はあろう巨大な礼拝場だった。

その礼拝場の中央で、拳を振りあげる巨大な影が光のもとに浮き上がる。

――凄まじい巨体を誇る土の巨人。

「鉱巨人！」

自分の十倍以上であろう重量の巨人を見上げ、レンは声を上げた。
……本物を見るのは初めてだ。
時に岩であったり金属であったりと構成素子は様々だが、墳墓や神殿など様々な遺跡で、古来から守護者として使われてきた自動人形。
術者の法術波長に応じて組み上がり、侵入者を排除するまで活動を止めない。
「あ、あなたたちは⁉」
「まだこの神殿にいたのか……そして、こんな時に」
前衛の武闘家、そして後衛の法術上がほぼ同時にふり向いた。
旅団『カナン巡礼聖教船』。いまここにいるのは二人だが、背後の通路から複数人の足音が聞こえてくるのもわかる。
「あ、あなたたち……いったいどこから来たんです⁉」
「プルミエール、交戦時によそ見をする奴がいるか」
我を忘れて声を上げる金髪の少女。
そんな彼女めがけて鉱巨人の黒い影が迫り――
「絶招 交叉」
鉱巨人の腕の真下に潜りこんだタイラスが、丸太のごとき巨大な腕を片手ですくい上げた。無防備となった胴体。流れるような歩法でもって瞬時に距離を詰め、右肘をその脇腹へと突きつける。
「破ッ！」
裂帛の気勢。
と同時に、その肘撃ちを受けた鉱巨人の全身が硬直した。
「素晴らしいですわ」
「えっ⁉　フィア先輩、今のは⁉」
――残像。
――いまの交叉の瞬間、彼の姿が前後に分身したように映ったのだ。
「換歩による巧みな重心移動。そして両足の踏み替え、踏みこみによる緩急をつけた振る舞いが、今の見事な幻惑効果を発揮した。絶招――単なる合理的な技の習得に留まらず、自分だけの究極系として昇華させた紛うことなき歩法の奥義です。あれだけ流麗な歩法に至るまで、どれほどの修練と歳月とを要したことか」
同じ武闘家として感じる部分があったのだろう。
そう告げるフィアが、珍しくも声を弾ませているのがレンにもわかった。
「プルミエール」
「は、はいタイラス先生！」

頷く金髪の少女がその場で目を閉じて。
法術円環。輝く光の環が鉱巨人の腕を締めつけるように具現化し、凄まじい爆風を巻きあげて爆裂した。
タイラスが敵の攻撃を捌ききったうえで隙を作り、それにプルミエールが追随する。
一朝一夕では到底なしえない信頼の連携だ。
「こ、今度こそ確実に……！」
両肘から先を失ったまま動きを止める土の巨人。
だが少女が固唾を呑んで見つめる先で——周囲に飛びちった赤茶色の上の塊が、まるで意志を持つかのように蠢き、みるみるうちに再結合していく。
「だ、だめです先生！　この鉱巨人……何度やっても修復します！」
「落ちつけ」
プルミエールの悲鳴。
対し、剃髪の武闘家は落ちつきはらった表情で。
「今の連携は悪くなかった。だが相手の特性は厄介だな。私の肘撃も掌底も、あの土塊の身体には効果が薄い。それに法術で崩しても修復されるとすれば」
「せ、先生どうすれば！」
「問題はない。そうだなレミ、ネスカレン」
礼拝場の入口に集う二人の女性術士たち。
依然として視線は鉱巨人へと向けながら、タイラスが淡々とした口調で続ける。
「この守護者は私が注意をひきつける。その間に奥のエリアにいる六名を集結させろ。しかるのちネスカレン、お前の結界でプルミエールとレミの法術を強化しろ」
「かしこまりました」
「レミ、お前の精霊具の出番だ。プルミエールの法術に合わせろ。できるな？」
「お任せください。奥のメンバーも早急に呼び戻して参ります。すでに奥の場で待機させていますので時間はかかりません」
金の刺繍入り法衣を羽織った女性二人が、麗しい所作で身をひるがえす。
そんな彼女たちの背を横目に見送って。
「所詮は『詰み』の状況だ。あとはメンバーが到着するまでの時間稼ぎ。プルミエール、自信を持て。お前とお前の仲間たちの法術は、この鉱巨人にも通用する威力がある。カナン巡礼聖教船に選ばれた自分の実力を信じることだ」
「は、はい！」
自分の法衣の裾をぎゅっと握りしめ、気丈に頷いてみせる金髪の少女。
「結構だ。では退いていろ。この鈍重な巨人は、加勢が来るまで私が——」

「ねえどうするの？　倒せないなら代わってあげようか？」
鉱巨人と向かいあう武闘家。
そんな彼の真横から割って入ったのはエリーゼだった。
「なにしろ上の鉱巨人だもんね。岩とか金属とかと違って脆いかわりに、どれだけ破壊しても上が寄り集まって再生しちゃうし。倒せるにしても時間かかりそうな雰囲気だけど、あいにくアタシたちも暇じゃなくてさ。鉱巨人、やっちゃっていい？」
「……何を言っている」
褐色の幼女を横目で見下ろす熟達の武闘家。
「お前たちも見たはずだ。あの再生速度。アレを倒すには、それこそ法術で全身破壊して核晶を露出させるぐらいしかあるまい」
「えー？　もっと簡単な方法があるよ」
「馬鹿な。そんな撃破手段があるという話など聞いたことが――」
「崩壊言語」
歌うように口ずさみ。
幼女の姿をした褐色の悪魔が、指揮棒を操る指揮者のように両手を振るう。
「微睡聖音、黒之夢、絶対静寂」
暗色に輝く法術円環。
その光を鉱巨人が浴びた……そう誰もが認識した時には、上の巨人の身体がドロドロと、本来の赤茶けた泥へと溶けるようにして崩れ去っていく。
あまりにあっけなく。
「……そんな、うそ……」
「面妖な。いま何をした？」
崩れ去った鉱巨人を呆然と見つめる金髪の少女。
対照的に、いまだ平静を保つ偉丈夫の視線はエリーゼへとまっすぐに注がれていて。
「今の術式は何だ。あんな法術円環は見たことが――」
「教えてもいいけど意味ないよ。悪魔限定の崩壊呪詛。今のも初歩中の初歩だけど、人間には、生かかっても使えない法術だから」
「なにっ!?」
「そんなことよりさ、何だかんだで窮地なところを助けてあげたわけだし、何かアタシに言うことはないのかな？」
クスクスと、魔性を帯びた瞳で笑みをこぼす先代魔王。
そんな彼女を訝しげに見つめる二人。が、そんな気まずい沈黙も束の間、先に頭を下げたのは長身の武闘家だった。

「……なるほど。不本意ながらも助力を受けたことは確かだろう。礼が遅れたことを素直に詫(わ)びよう」

「うんうん、いい子だね。そういう素直なの大切だよ」
不敵な眼差しから一転。
外見相応の天真爛漫な笑顔でエリーゼが満足げにうなずいてみせる。
「てわけでアタシは満足したから、レン交代」
「だから、そこで俺にふられても立場に困るっての……」
奇異の眼差しで見つめてくるカナン巡礼聖教船の二人。
最初に出逢った時もそうだが、今のエリーゼの法術も相まって、今は完全に自分たちを不審に思っている顔つきだ。
――この少年騎士と少女たち三人は何者なのか、と。
「どうやら、お前が一番普通のようだな」
「俺？」
「そう。お前だ、少年」
そう頷くタイラスが、ちらりとレンの背後にいる三人を見やる。
竜姫、大天使、先代魔王。
三人とも正体を明かしているわけではないが、熟達の冒険者としての経験で勘づいたのだろう。この三人の醸しだす気配が、常人のソレと明らかに異質であることに。
……そもそも人間なのが俺一人だし。
……そりゃ俺だけ雰囲気が『普通』っていうのも当然か。
「あらためて尋ねよう。お前たちは何者で、この遺跡に何用だ。昨日は、この場所が直接の目的地ではないように言っていたが」
「ああ、まあ最初はそうだったよ。でもエリーゼが……あ、こっちの黒髪の子が言ってただろ。この神殿のどこかに精霊がいるはずだって」
「わかるのか？」
「そりゃカナン巡礼聖教船がいれば、想像もつくさ」
世界最大の精霊信仰都市、聖地カナン。
その都市を代表する旅団のメンバーが海を越えてまでこんな辺境の神殿を訪れた時点で、ここの神殿に何がいるか明らかというものだ。
「……なるほど、確かに」
失笑にも似た笑みをうかべるタイラス。
そんな彼がふと視線を移したのは礼拝場の入口。そこに集結した旅団員たちだ。
タイラスとプルミエールの二人。
その加勢にやってきたのが六人で、計八名。精霊使いらしき精霊具を構えた少女や、療法士らしき女性。さらに探索士らしき測量図を手にした者もいる。
「タイラス様、鉱巨人は？　そして先ほどから気になっていましたが、そこの者たちは？」

入口に集結した六名。

それぞれが奇異の視線でこちらを見つめてくる。

「鉱巨人（ゴーレム）は見てのとおり排除した。この四人は……遺跡の探索に訪れた旅団（パーティ）だ。ひとまず私が代表で話をする。ネスカレン、そして皆も、騒がせてしまったが予定に変更はない。各自、持ち場に戻って調査を続行してくれ」

「かしこまりました」

結界士（エンチャンター）らしき女性が恭（うやうや）しく一礼し、背後にいる五名を従えて礼拝場を後にする。

遠ざかっていく背中を見守って――

「さて、話の続きだったな。素直に話すのであれば我々の任務はたった一つだ。現在知られているかぎりの世界中の精霊を調査し、その状況を確認すること。そして我々の場合がここ、『イスカセル地下神殿』の調査だったというわけだ」

「先生!?　そ、それは聖エリエス様からの特別指令のはずです！　この地下神殿の名前も、ウチの調査部隊がようやく解明したばかりの情報で……」

「問題ない。精霊の住処（すみか）の調査は我が旅団（パーティ）の日課のようなものだ。イスカセル地下神殿の名も、その名前に特別な秘密があるわけでもないからな。明らかにしたとしても支障ない。とはいえ――」

コツン。

獣革の靴で硬い石床を蹴（け）りつけるタイラス。

「目的の精霊は、二年前の調査ではこの祭壇にいるはずだった。それがいざ訪れてみればもぬけの殻。代わりにいたのが先の守護者（ガーディアン）だったというわけだ」

「二年前にはいなかったってことか……」

「そう。それが何者の仕業なのかはわからないが、二年前の調査ではあんな守護者（ガーディアン）がいるという報告はなかった。配置されたのはつい最近のはず」

いるはずの精霊がいない。

代わりにいたのは、前回の調査ではいなかった神殿の守護者（ガーディアン）。

「そっか。それでさっきはあんな焦（あせ）った戦い方だったのか」

「お、お恥ずかしい限りです……」

プルミエールという名の金髪の少女が、しょんぼりとした様子で肩を落とす。

法術士（アリア）としての素養に間違いはない。ただ、あまりに意図せぬタイミングで強敵が現れたことで動揺し、本来の実力を発揮できなかった。それが苦戦の理由だろう。

「さて、ここまで話したことでもう察しはついただろう」

「俺たちが精霊の居場所を知らないかってことだろ？　さっきのネスカレンとかいう部下にも調査を続けてくれって言ってたし。だけどあいにく、俺らも今の戦いの爆音でここに駆けつけたくらいだし……エリーゼは？」

レンがふり返った先には、周囲の壁をじっと見つめるエリーゼの姿。
「精霊の匂い、ここからで間違いないんだろ」
「もちろん。そもそもアタシが鉱巨人を排除したのも、アイツの匂いが邪魔だったからだしね。いなくなったおかげで余計強く感じるよ、精霊の気配。てことは――」
「あとは誰かさんの出番だな」
「楽しみですわね」
エリーゼ、キリシェ、そしてフィアが三人揃ってこちらを見つめてくる。それも何かを期待するように好奇心に満ちあふれた眼差しで。
「さあレン」
「出番だね、やったね？」
「期待してますわ」
「やっぱり俺かよ……」
溜息混じりに吐息をつき、レンはあらためて礼拝場を見わたした。
――精霊の声を聞く。
――竜にも天使にも悪魔にも捉えることのできない神秘の波長。
はるか古代、ごく限られた人間だけがそれを可能にしていた。現代では、聖地カナンの聖女・聖エリエスのみがその正統な術者であるとも言われている。
「？　あの、何をしているんですか？」
「試したいことがあってさ。悪いけど、少し静かにしてもらっていいかな」
首を傾げるプルミエールへそう告げて、レンはその場で目を閉じた。
……集中しろ。
……この部屋のどこかに居るはずなんだ。
およそ二十メートル四方の礼拝場。
鉱巨人であった土塊が部屋の中央に落ちている以外、石畳の床面に怪しい箇所はない。天井も、そして周りの壁面も何一つ変わりない。
それが――
『……ソ……ボ……コッ……チ……』
不意に。
幽かな、ともすれば風鳴りの一種とも思えるほど幽かな声が聞こえてきた。
「っ、キリシェ！」
「聞こえたか？　どこだ」
「たぶんだけど……こっちの壁からだったと思う」

自分から見て左奥の隅。
鉱巨人（ゴーレム）が立ちふさがっていた場所を通りすぎて、何の変哲もない壁の正面へ。
「――――」
無言で、壁に向かって手を伸ばしかけた矢先。
「待てレン、そこに何があるかわからんが用心しろ。精霊の住処に入れるのは人間だけだ。わたしたちは入れない」
「え？」
キリシェの何気ない警告。
が、すでにレンの手は壁に触れていて――
瞬間、周囲の視界が陽炎（かげろう）のように揺らめいた。
「空間が歪（ゆが）む!?」
「やはりか！　レンすぐに手を壁から離せ、引きずりこまれるぞ！」
キリシェが自分に向かって手を伸ばす。
だがその光景も、すぐに眩（まぶ）しい光の照射にかき消されてしまう。何の抵抗もできぬまま、レンは揺らいだ空間の内側へと引きずられていった。

2

砂の世界。
地平線から地平線まで、見渡すかぎりの黄砂（こうさ）に埋めつくされた無音の空間。
木の一本、草の一本存在せず。
そこにはオアシスといったものも存在しない。
「……ここは？」
見渡すかぎりの黄砂。
上空は雲一つない蒼穹（そうきゅう）、そして灼熱（しゃくねつ）の陽（ひ）がまぶしいほどに降りそそいでいる。
その地上で、レンは砂の丘陵をゆっくりと見上げた。
「さっきの礼拝場じゃない？　どこだよここ。こんな砂漠みたいな場所……？」
「精霊の住処（すみか）だな。我々はそこに強制転送されてきたと」
「うあっ!?　ビックリした」
突如、何もない空間から現れるカナン巡礼聖教船（じゅんれいせいきょうせん）の二人。
金髪の少女プルミエール。
そしてその指導役である日焼けした偉丈夫（いじょうふ）。

「プルミエール、早く起きあがれ」
「は、はいタイラス先生……あ、あいたた……腰を打ちました」
砂漠に降り立った拍子に大きく横転したプルミエールが、腰のあたりを押さえながらよろよろと立ち上がる。
一方のタイラスは転移そのものが予想済みだったのか、砂漠への着地も鮮やかだ。
「ここが精霊の住処か。でもさっきの神殿は？　俺たちどこに飛ばされたんだ」
「位置としては神殿最深部のままだろう。精霊は、己の住処として自分の好ましい環境に空間を作り替える力を持っている。ここにいる上の始原精霊にとって、いわばこの砂漠の環境がお気に入りなのだろうな」
周囲を油断なく見わたす武闘家。
だがそんな様子もそこそこに、彼が見つめる先は自分だった。
「ところで私からも尋ねたい。そんな根本的なことも知らずにどうやって精霊の住処を発見した？　たとえ高位の精霊使いであっても、精霊の探索は怪しい箇所を手当たり次第探すしかないというのに」
「そ、そうですよ！　あんな壁際に設置された空間の人口を、何の手がかりもなく一発で見つけられるなんて。いったいどんな探知法術を使ったんですか!?」
「手がかりはあったよ」
「え？」
ぽかんと、惚けた表情で口を半開きにするプルミエール。
「俺もうっすらとだったけど、あの場所から聞き慣れない声がしたから。それで声のした方向に歩いていったら住処を見つけたってわけ」
「……待て。いま何と言った」
驚愕を隠しきれずにタイラスが詰め寄ってくる。それは、沈着冷静を常とする彼が見せた初めての動揺だった。
「声？　まさか精霊の声が聞こえたというのか!?　それに先も、お前の仲間の少女たちが妙なことを言っていたな。精霊の住処に入れるのは人間だけだから、彼女たちは入ることができないと。あれはどういう意味だ。まさか――」
「ま、待ってくれって！　そう矢継ぎ早に言われても困るから！」
「……そうだな。失敬、私としたことが取り乱した」
目の前に迫った武闘家が、やや恥ずかしげに後退する。
「疑問は後回しか。精霊を探しだし、問題なければ精霊具の強化を頼む手筈を優先する。プルミエール、どうだ」
「い、いえ。さっきから探してるんですけど、砂漠の先まで見わたしても上の始原精霊らしい姿が見あたらなくて。法術感知にも引っかからないし」

「ところでさ――」

そんな二人を呼び止めて。

レンは、自分の足下を指さしてみせた。

「その土の始原精霊だけど、こいつは違うのか？」

茶褐色のフード付き外套をかぶった小人。

大きさは小型の猫程度のそんな精霊が、自分の足首に掴まって、不安げに、どこか心細そうにこちらを見上げていた。

『……声、聞コエル……？』

「お。やっぱそれっぽいじゃん。お前が上の始原精霊ってことでいいんだよな？」

『！』

うんうんと、嬉しそうに何度も首を振る小人型の精霊。

そして。

『遊ボ……マタ……先ノ……作ルカラ……』

「はい？」

『ネエ、遊ンデ……ズット……待ッテタ……貴方ガ来ルノ……』

揺れる砂漠。

猛烈な激震が砂の丘陵を振るわせて、上の始原精霊の足下の地中が盛りあがっていく。盛りあがった山から大量の砂が剥がれ落ち、そこに顕現したのは、陽を反射する煌めく赤銅色の巨人だった。

「鉱巨人!?　そんな……まさかそれじゃあ！」

「先の守護者は、他ならぬ上の始原精霊の仕業だったというわけか」

咄嗟に身構えるプルミエールとタイラス。

その姿に倣い、ほぼ無意識のうちにレンも一歩その場から後ずさる。

直後。

『遊ボウ……？』

鉱巨人の振りおろした拳が、レンの立っていた砂地に巨大な穴を開けていた。

巻き上がる大量の砂。

まるでそこに強力な爆弾が投下されたかのごとく、鉱巨人を中心として、砂漠に巨大なすり鉢状の陥没が出来ている。

「ちょっと待て！　これのどこが遊びだよ!?」

「遊び？」

隣に並び立ってくるタイラス。

「にわかには信じがたいが、少年、お前は精霊の声が聞こえると。そして上の始原精霊は、これが遊びだと言っている。そういうことなのか？」

「……ああ」

「なるほど。では神遊びならぬ精霊遊びというわけだ。エリエス様からも聞いたことがある。精霊は自らの声の届く人間に対し、非常に好奇心旺盛な存在であると」

近づいてくる鉱巨人と、その頭部にしがみつく上の始原精霊を見上げるタイラス。

「てことは？」

「上の始原精霊の言葉どおり、これが精霊なりの親愛表現なのだろうな。鉱巨人を使って、まさしく『人形遊びをしよう』と言っている。精霊は純粋であるがゆえにワガママだ。上の始原精霊を満足させるか、あるいは逆に飽きられるかしないと、この特殊空間からは逃げられないと思え」

神々の遊び。

強大な精霊は、古来より一種の神としても崇められてきた。神座、すなわち精霊の住処にて人々が集まり、舞や歌でもって精霊を祀ってきたとされる。

あの礼拝場こそが、まさにその場だったのだろう。

……そこに俺が来た。

……これが土の始原精霊なりの歓迎ってことか。

「人形を倒せばゲームも終わりってことでいいんだろ」

「その理解でいい。だが、こちらとて仲間を神殿に待たせている身だ。精霊の無事を確認できた以上、その遊びに長々と付きあうつもりはない」

レンとプルミエール。

その間に立つタイラスが、赤銅色の巨人に向けて一歩前に出る。

「早々に決着をつけたいところだな。プルミエール、そしてレンと言ったな。私が鉱巨人の相手をする。支援しろ」

「……いいのか、そんな危険な役を頼んで」

「些かの問題もない」

拳の関節を鳴らし、その場でタイラスが軽く身を屈める。

――とレンが認識した時点で。

既にその武芸者の姿はそこに無く、一瞬にして巨人の眼前へと迫っていた。

砂丘という足場の悪さを感じさせることなく、まるで氷上を滑走するように駆けぬける歩法。

「速っ！」

驚愕が声となって喉からこぼれ出た。

……これが本物の武闘家。

……いま一瞬、我を忘れて見入ってた。
肉体を極限まで鍛えあげただけではない。その走行姿勢、呼吸にいたるすべてが理論的に計算しつくされ、理想の走法を実現している。
速いだけでなく、自在に緩急をつけることで残像すら生みだす幻惑の疾走。
ただ「走る」ということ。
すなわち歩法。それ自身が一つの奥義であると感じずにはいられない。
――これが『カナン巡礼聖教船』。
――その幹部。
「さすが先生！」
一瞬で鉱巨人の背後へと回りこむタイラスの姿に、プルミエールからも歓声。
無言でゆっくりとふり向く大型人形。
超重量ゆえに鈍重。
しかも地面は岩盤でなく砂地だ。その場で両手を振りあげるだけで精一杯のはず。
そうレンが確信しかけた矢先。
『――』
巨腕。
無言で鉱巨人が振りおろした拳が、かき消えた。
「タイラスっ!?」
風鳴りさえ置き去りに、頭上から打ち下ろされる高速の拳。
それに紙一重で反応してタイラスが飛び退いた直後、鉱巨人の拳が砂地を深々と穿ち、足場そのものを揺らす轟音と共に砂を巻きあげた。
体捌きは鈍重。
だが、そこから繰りだされる拳だけは俊敏かつ精緻極まりない。
「いい突きだ。力が分散されず一点に集中されている」
賞賛の感情をにじませる武闘家。
「しかしその代償に、胴体ががら空きだ」
タイラスの右足が宙に浮く。
鞭のごとくしなる蹴撃が鉱巨人の足首をすくいあげる勢いで叩きつけられて……
ミシッ
鈍い音が砂漠にこだまして、顔をしかめたのは武闘家の方だった。
「想像以上に硬いな。そして重い」
タイラスの体重をのせた膝蹴りを無防備な状態で受けてなお、鉱巨人はダメージを受けた様子がない。

「やはり今度の組成、上ではないな。プルミエール！」
「はいです！　今度こそ……！」
法術上の描く円環。輝く光の環が鉱巨人を締めつけるように具現化し、凄まじい爆風と砂塵を巻きあげて爆裂する。
が。
「……そんな!?　無傷だなんて!?」
法術による膨大な火煙。
それが収まった後には、まるで平然としたまま微動だにしない鉱巨人が立っていた。
「さっきの鉱巨人には効いたのに……」
「巨体を構成する物質の違いだな。最初のものは土の塊。再生するという強みはあるが、脆い。今度のはその逆。とにかく硬くて破壊が困難な組成になっている」
地中の鉱石を凝縮した個体だ。
炎の将魔のような桁外れの業火を例外とすれば、人間の法術士が扱う炎では融解どころか傷一つつかない金属体。レンの剣でも同じことだろう。
「またしても厄介な組成だな。倒す方法もほぼ限られてくる」
後方へ跳躍して距離を置く武闘家。
「鉱巨人の組成を繋ぎとめる核晶を破壊するしか策はあるまい」
「……あの中心部の亀裂か」
タイラスが指さす先をレンは凝視した。
立ちはだかる巨体の、その喉元にある奇妙な亀裂部分。
鉱巨人をはじめとする人形に共通する弱点だ。その構成を司る核晶を破壊すること。
宝石や呪符など形態は様々だが、あの鉱巨人にとっては、上の始原精霊からの力を受ける受信部分がその核晶であるはずなのだ。
「プルミエールの法術は見ていたな？　あの喉元の亀裂を狙って発動した法術を、鉱巨人が咄嗟に自分の腕を前に出して庇ったはずだ」
「ああ、確かに俺も見てた」
問題は、如何にしてそれを突くか。
見上げるほどの巨体をほこる鉱巨人のさらに頭部付近にある亀裂ゆえ、レンがその場で剣を振りあげても切っ先が届く高さではない。
……跳躍で届くか？
……いや、正面から跳んだって叩き落とされるだけだ。
下半身の動きこそ鈍重だが、振りおろされる拳の速さだけは俊敏極まりない。かといって遠距離から法術で攻撃しても防がれてしまう。

「ね、ねえ！　あなたの仲間の女の子たち……土の鉱巨人を倒した黒髪の子供や、銀髪の女の子に、綺麗な金髪の人もいたはずですよね。なんであなただけがここに来て、彼女たちは助けに来てくれないんですか」

「――――」

プルミエールの言葉は、タイラスが真っ先に気にかけていたことと同じものだった。

「あの子たちなら……」

「いいや」

彼女たちは来ない。人間ではないから精霊の住処には入れない――喉元まで漏れかけた言葉を、レンはかろうじて喉の奥へと押し返した。

確かにそう。

先代魔王エリーゼなら、あの鉱巨人も先と同じ法術であっさり仕留めるだろう。

大天使フィアなら、鉱巨人の巨体を拳一発で軽々と吹き飛ばすに違いない。

竜姫キリシェにいたっては、もはや手段も過程も関係なく、あの守護者を地に沈めている光景しか思い浮かばない。

けれど。

「これは、俺の戦いだから」

「え？」

ぽかんと聞き返す金髪の少女に、レンは横顔だけで頷いてみせた。

むしろ、今後も必ずこういう場面が来ると思っていた。

――炎の将魔戦で痛感したことだ。

彼女たちの加勢が望めない孤独の戦い。それがこの精霊戦だというのであれば、こんなにも自分にふさわしい相手はいないだろう。

「頼みがある」

剣をゆっくりと水平に構え、レンは二人の前に進みでた。

「俺が鉱巨人を惹きつける。その隙に、もう一回法術をアイツにぶつけてくれ。タイラス、あんたもプルミエールの法術を手伝ってやってくれ」

「で、ですが、それだけでは先と同じ結果になりますよ!?」

「足下でいい。急所の喉元を狙うんじゃなくて、アイツの足下で破裂させてくれれば十分。じゃあ頼んだからプルミエール」

「待て、レン。お前いったい何を――」

剃髪の武闘家による制止を振りきって、レンは黄砂の世界を駆けだした。

一直線に。

鉱巨人の頭上にしがみつく上の始原精霊、その嬉しそうな笑顔だけを見上げて。

「いいさ、見てろよ。必ずお前のところまで辿りつく！」
「っ、ダメだ！　剣士であるお前が鉱巨人と正面から渡りあうのは無謀すぎる！」
駆けぬける。
そびえたつ鉱巨人までの距離、およそ十メートル。それを一瞬で零にして巨人の足下へ。
と同時に真横から迫りくる巨腕。
最初の打ち下ろしの一撃がタイラスにかわされたことを学習したのだろう。今度は巨大な両腕を左右に振り、周囲全てを薙ぎはらう軌跡での殴打。
――まさに。
――レンが予測し、そして待ち望んでいた一撃だ。
凄まじい風圧を帯びた巨大な拳が、レンの全身を打ち砕こうと迫りくる。
「危ないっ!?」
プルミエールの悲鳴。
少女の発した声に対し、レンの応えは無言の跳躍だった。
鉱巨人に接近するための前方への跳躍でなければ、拳を避けるために後方を選んだわけでもない。
ただ真上へ。
上の始原精霊の創りし砂の世界で、ただ一つ砂色に染まっていない蒼穹へと跳んだ。
着地した場所は。
「……鉱巨人の腕に跳び乗った!?」
法術士の少女が発する驚愕の声。
「騎士っぽくないけどさ、こういう曲芸は苦手じゃないんだよ」
体躯に恵まれた学生騎士と比べて、腕力も劣っている自分。
そんな歴然たる素質の差を補うためにレンが愚直なまでに修練を積み、鍛えあげてきたものが剣の精密性、そして極限まで瞬発力を高めるための反応速度だ。
――剛力を翻弄する俊敏。
――どこまでもいつまでも、自分は、剣士らしくない剣士でいい。
聖フィオラ旅学園時代から一日たりとも休まず続けてきた修練。
「自分よりデカい相手と戦うのは、今まで嫌ってほどやってきたからな。さすがにこんなデカい学生騎士はいなかったけど」
赤銅色の巨腕を駆け上がる。
不安定この上ない足場。自分を落とそうと腕を振りあげる鉱巨人の力の方向を先読みし、なお速度を落とさず、レンは巨人の肘から肩へと、一気に迫った。
『ッッッ！』

半自動制御された鉱巨人が堪えきれず自分へとふり返る。
その一瞬の虚に。
「いい歩法だ、少年。我流ゆえの粗々しさの中にも、たゆまぬ修練の様が見てとれる」
鉱巨人の膝元まで踏みこんだタイラス。
その全身の力をこめた左右の衝捶二連撃が、鉱巨人の超重量をも微震させる。膝が崩れ、前のめりになる赤銅色の巨人。そこへ。
「プルミエール」
「火と風の儀礼、解放します！」
プルミエールの決死の叫び。
爆風。
耳をつんざく轟音と強烈な風が吹き荒れる。
鉱巨人が姿勢を戻すより先に法術上の炎が追いついて、巻き起こる風と炎の合成法術が巨人をその真下の地盤ごと吹きあげようと膨れあがった。
が――
『ワァッ！』
巨人の頭部につかまる土の始原精霊から愉しげな歓声。
その声に応じるかのごとく、赤銅色の金属で構成された鉱巨人の全身が、さらに一回り大きく肥大化した。
「タイラス先生！　ダ、ダメです……炎が抑えこまれます！」
足下から噴き上がる爆風を、自らの巨体でもって踏み抑えつけようとする巨人。プルミエールの生みだした炎が消えかける、その刹那。
「やれ、火の始原精霊」
炎が、甦った。
今にも押しつぶされ消えようとしていた炎が、鉱巨人を包みこむほどの巨大な火球と化して、一瞬の間隙をへだてて破裂した。
火の始原精霊の干渉。
精霊の力で膨張した炎を受けて、鉱巨人の巨体が軽石のように舞い上がる。
『デキタ？』
「ああ、上出来すぎる」
心なしか嬉しそうに翼を羽ばたかせる、灼熱色の火蜥蜴。
「馬鹿な、精霊だと!?」

「せ、精霊具なんかじゃありません！　先生、本物の火の始原精霊です！」
カナン巡礼聖教船の二人の声が唱和する。
驚愕をこえた畏怖。
世界最大の精霊信仰地である聖地カナン。その地の術者すら滅多にその姿を目撃した者がいないとされる始原精霊が、同時に二体顕現した奇蹟の瞬間だった。
炎を浴びて倒れる鉱巨人。
その無防備な巨体へ、レンは空中で、両手に掲げた剣を全力で叩きつけた。
「お終いだ」
砕けちる鉱巨人の核晶。
金属の集合体である巨人が、レンの振るった剣閃に耐えたのは一瞬だった。
「お前も、もう十分遊んだだろ？」
無数の破片と化して砕けちっていく鉱巨人。
その頭上にしがみついていた上の始原精霊がふわりと地面に落下して、そして――
『……愉シカッタ』
ぴょこんと、自分の足にしがみついてきた。
「お、おい!?」
『マタ遊ボ……イツデモ、召喚デ』
目眩にも似た感覚。
周囲を取り巻く砂の景色が陽炎のように揺らぎ、そして薄れていく。
その最後に、どこか名残惜しそうな眼差しで自分を見つめる上の始原精霊の姿だけが、朧気ながらも最後まで瞼に焼きついて――
そして。

「あ！　レンが帰ってきた！　ねえキリシェ、フィア、戻ってきたよ！」
古ぼけた礼拝場。
「お疲れさま。ねね、どうだった？　ちゃんと精霊仲間にできた？」
スキップ調で近づいてこちらの表情を覗うエリーゼ。そんな彼女に、レンは埃まみれの床に膝をつきながら肩をすくめてみせた。
「多分としか言えないけどさ」
「ていうと？　精霊の住処に行けないアタシらからすると、向こうでレンが何してたのかってすごい気になるんだけど。ねえキリシェ」

「当然だ。説明されないとわからない」
待ち疲れたといった表情で壁際に身を預ける竜の少女。
「と言っても予想はつく。精霊の『遊び』とやらに付きあわされたみたいだな」
「……正解。遊びが激しくてコッチはへとへとだが」
「精霊に懐かれやすい性格が災いしたな。懐かれすぎるのも困りものということか」
壁から身を起こしてキリシェが微苦笑。
そこに。
「失礼。我々も彼には聞きたいことがあるのだが」
割って入ったのは剃髪の武闘家。
その後ろに控える金髪の少女も、惚けた表情でこちらを見つめていて。
「俺？」
「そうだ。……もはや余計な探りを入れる必要もないだろう。単刀直入に尋ねるが、お前は精霊の声が聞こえるというのだな」
聞こえるのかどうか。ではない。
聞こえているはず。そんな断言調で告げてくるタイラス。
「さっきの精霊戦で見ての通り、かな」
「じゃ、じゃあ！　やっぱり火の始原精霊を召喚したのもあなただったんですね！」
小走りに詰め寄ってくるプルミエール。
「ど、どど、どうやったんですか!?」
「どうやったって言われてもなぁ……何か、いつの間にかできてた感じだし。別に大したことじゃなくないか？」
「大したことだから驚いてるんですってば！」
金髪の少女が興奮気味に声を上げる。
「だ、だってあの……その……精霊の声が聞こえる上に、それに精霊召喚だなんて。現代でそれができるのは聖エリエス様一人しかいないはずなのに」
「世界で二人目の適格者、というわけか」
溜息にも似た息をつくタイラス。
「少年。まさかとは思うが、過去にカナンで聖女から教えを受けた経験は？」
「聖女って、あの聖エリエスって人だろ？　いやまさか。俺みたいな一般人がだぜ？」
聖地カナンの指導者である聖女。ただ一人精霊の声を聞くことができると言われており、現代最後の古代詠唱士としても名高い少女だ。
祈りの場に籠もり、滅多に人前に姿を現すことはないとされている。
「庶民の謁見だけでも何年待ちって聞くくらいだし」
「そうだ。しかし、もしもお前が望むのならば、謁見については私がエリエス様に話をしておこう。端くれではあるが、私も旅団の幹部の一人。私の名を出せば聖堂へ案内させる手筈は整えて

おく」

「えっ。どうして――」

「レンのこと、よほど気になるようですわね」

一人沈黙を保っていたフィアが、一歩前に出る。

「聖エリエスとレンを会わせれば、レンの古代詠唱士としての資質が本物か見極められる。本物であれば、それこそカナン巡礼聖教船に勧誘するつもりで？」

「……」

「でもダメですわ。レンは私たちの旅団ですもの」

自分の手を取るや、ぎゅっと自分の胸元に引きよせて抱きしめるフィア。

「ね？」

「……遠からずではあるが、旅団への勧誘までは深読みというものだ」

隣に立つプルミエール。

彼女をちらりと見下ろして、その男は首を横にふってみせた。

「私とて聖地カナンの信徒の一人。信仰対象である精霊を召喚できる人間がいると知って気にならないわけがない。加えていえば、お前たち二人の正体もな。我々が上の始原精霊の空間に閉じこめられた時、お前たち二人は一向に現れる気配がなかった。人間ならば入れるはずの精霊空間に。それが意味するところはつまり――」

「あら？　私たちも正体など隠す気は元よりありませんが、大それた憶測であるうちから口にする必要もないでしょう？」

優雅な微笑みで返す金髪の大天使。

「焦らずとも。また出会う時もありますわ。次は精霊でなく、世界録を探し求める旅路の中で。そうは思いませんか？」

「なるほど」

こちらも意味深な笑みで応える熟達の武闘家。

「くり返しになるが、カナンに立ちよった際にはエリエス様の下へ。楽しみにしている。……行くぞプルミエール。精霊具の強化はできなかったが、目的だった精霊の存在確認は果たした。速やかに帰還する」

「は、はい先生！　残りのメンバーも急いで呼んできます！」

慌てて駆けていく少女。

彼女の後ろ姿に続き、無音の足運びで赤銅色の偉丈夫も通路へと姿を消した。

遠ざかっていく後ろ姿。そんな一部始終を見守って――

「レン、大人気じゃん。やったね？」

「……どこがだよ」

元気に背中を叩くエリーゼに、レンは疲れた表情で首をふってみせた。

「それよりキリシェ」

「ああ。気になっていた精霊の件も片付いた。あとはこの神殿を抜ければ、もう目の前が、竜の渓谷に繋がる道だ」

自らに言い聞かせるようにそう口にして。

銀髪の竜姫は、自分の手を取って足早に歩きだした。

「行くぞレン。ここが神殿の中心地だというのなら、あと一日歩けば出口につくはずだ。一気に踏破する」

Interval. ―― 剣聖

聖地カナン――

世界五大陸のなか、広大な海を隔てた西のシィエラ大陸。通称『赤の大陸』と呼ばれる大陸の海沿いに栄えた一大都市だ。

どこまでも赤土と赤砂の広がる乾燥地帯。

乾ききった大地でわずかなオアシスを求めて人々が都市を形成したのが始まりで、そしてそのオアシスを生みだしたのが精霊『水の始原精霊』。これが、聖地カナンで精霊信仰が始まった起源とされている。

赤砂混じりの風が吹き荒れる聖地。その中心地にそびえたつ巨大な礼拝堂の、さらに最深部に、一般人には入堂すら許されぬ大聖堂が存在する。

『祈りの間』。

虹色のステンドグラスと真鍮色の燭台に彩られた美しき空間。

その祭壇の前に立つのは――

「いつまで姿を隠してコソコソしているつもり？」

金色の法衣を羽織った少女。

年齢は、まだ十代半ば。多く見積もっても十六か十七だろう。

愛らしい表情ながらも濃緑色の双眸に凛とした気高さを湛えており、ステンドグラスを通した光を浴びて輝く瑠璃色の髪が印象的だ。

聖エリエス。

エリエス・シア・凛・ケール。

ここ聖地カナンの精霊信仰を象徴する聖女として知られる少女。そんな彼女が、ふと、目の前の巨大な祭壇から背後へとふり向いた。

「夏蕾」

「あ、バレちゃった？」

いたずらっぽい少女の声。

祈りの間の隅で、不意にその周囲の空間が陽炎のようにゆらぎだす。真鍮色の燭台に飾られた壁際に、いつの間にか黒髪の少女の姿があった。

肩が剥きだしの風変わりな紅白のロープを羽織った少女。

結界士・夏蕾。

現代最高の旅団とも謳われる『精霊の調べ』の一角をなす術者。

騎士の最高位が『剣聖』であるように、夏蕾もまた結界士の最上位『大巫女』の階級を取得している。結界士を志す者で、この天才少女の名を知らぬ者はいないとまで言われる超一流の

術士だ。
「ちゃんと人口の護衛には通行許可を取ったのかしら」
「それってあのデカい男連中？　あいつら、もうちょっと修行させた方がいいんじゃない？　あたしが真横通っても全然気づいてなかったよ」
祈りの間の護衛だけではない。
この大聖堂に入った時から、カナン巡礼聖教船の術者が何十人と集まっているなかで、この結界士の少女は誰一人それと悟らせることなく侵入してみせた。
遮断結界。
光や音、匂いや気配さえ外界と隔離する空間干渉系の結界法術だが、それをここまでの精度で扱える人間は世界でも五人といないだろう。
「それで、あなたたちの肝心のリーダーは？」
「シオンならちょっと遅れるって。んで、それを伝えるために一足先にあたしが来たの。悪いね、約束時間に間に合わなくて」
「いつものことだから。あの剣聖が集合時間を守ったら逆に気持ち悪いでしょう？」
「それは同感」
華奢な肩をすくめて夏蕾が苦笑い。
「ここに来る途中で竜の渓谷に立ちよって調べ物してきたんだけど、それで気になることができたらしくて、調べてから来るってさ」
「リ・インファリエルに？」
竜の聖域と言われる秘境。
いまだ多くの謎に包まれた神秘の場所でもある。
最大の謎は、なぜ無数の竜たちがあの場所を選んで生息しているのか。
世界は広い。探そうと思えばより快適な風上もあるだろうし、竜たちがその気になれば人類の都市など一瞬で攻め落として領土にしてしまうこともできるはず。
だが、そうしない。
秘境リ・インファリエルには、竜にとってそれだけの価値があるはずなのだ。その謎に魅せられた多くの旅団が竜の渓谷に挑み、そして返り討ちに遭っている。稀に通行だけは許可される場合もあるが、どういった基準でそれを許されているかもわからない。
そんな場所で――
「そもそも竜の渓谷での調べ物っていうのは何なのかしら？」
「ああ、それは――」
夏蕾が言いかけた時。
「精霊たちが怯えている。エリエス、君もそれが気になってたんじゃなかった？」
物静かな声が、聖堂にそっとこだました。

「ここに来る前に、カナン巡礼聖教船のメンバーを幾つかの遺跡で見かけたよ。世界中に幹部を派遣して、主要な精霊の調査をさせてるんでしょ？」

大聖堂の人口際に立っていたのは金髪の剣士。

まだ若い。

聖エリエスが十代半ばの外見であるのに対し、こちらは二十代前半だろう。

絹糸のように流れる金髪に、印象的な紫の双眸。

凛々しくもどこか女性的な面立ちに、とらえどころのない穏和で中性的な微笑を湛えた剣士。

しかし剣士らしいのは背部に取りつけた双剣のみ。

身にまとう衣服はおよそ剣士の甲冑からかけ離れた、蒼碧色の旅装束風の外套だ。

――剣聖シオン。

現代最高峰の旅団『精霊の調べ』を率い、既に世界中で数多の秘境を巡り、踏破してきた功績を持つ冒険者。剣士としても、その技量は覇都エルメキアの騎士王ゼルブライトと最強の座を争う若き天才として知られている。

そんな剣聖シオンが、穏やかな微笑でもって片手を上げて。

「やあエリエス。久しぶりだけど元気そうで何より」

「元気じゃないわよ。昨日までずっと礼拝期で、一週間ずっと飲まず食わずに睡眠取らずで大聖堂に籠もってたんだから」

「それだけ重大な役目ということだよ。なんて言ったって聖女なんだから」

臆面もない微笑でそう返されて。

ここ聖地カナンの指導者である少女は、溜息混じりに腰に手をあてた。

「……で、さっきの件。精霊の様子がおかしいっていうのは、あなたも感じていたことでしょ。そのための調べ物が竜の渓谷っていうのはどういうこと？」

「うん。でもほら、僕はエリエスと違って精霊の声まで聞こえるわけじゃないから。精霊の様子が何となくおかしそうだって漠然としかわからない。だけど僕の知るかぎり、歴史上一度だけ、同じような現象が起きたことがある」

「世界中で精霊が怯えてる現象が？」

「三百年前の、終焉戦争だよ」

剣聖の言葉が、美しき祈りの間に響き、こだまする。

終焉戦争――

伝説の英勇エルラインと、それに付きしたがった三大姫たちの戦いの物語。

その全容がどんなものであったか人間は誰一人として知らない。

終焉戦争と呼ばれる戦いだけが、世界の時間軸上から意図的に切り離されたかのように、当時

の記録から抹消されてしまっているのだ。
「……まさか、竜の渓谷に行ったのは」
「うん。無理を承知でね。あの秘境に暮らす竜たちなら、終焉戦争のことを知ってる個体もいるかと思って」
涼やかな表情でうなずく若き剣士。
「他にも何か所か調べ物をしに世界を巡って、僕なりに予想らしきものはあるんだ。でも最後に、どうしても確認しておきたいものがあって」
「世界録ね」
「そう。英勇エルラインが遺した手記。僕の予想が正しければ、それで全ての予感が確信に変わるはず」
「予感？」
「まだ不確定だけどね。だからこそ君の意見も聞きたくて――夏蕾」
「はいはい」
剣聖の頷きに応え、結界士の少女が大聖堂の扉を閉めて施錠。
さらに。
「封鎖しちゃうけど、いいわよね？」
結界法術。
夏蕾の足下から浮かびあがった法術の円環が一瞬で拡張し、大聖堂全域を包みこむ。
――静寂。
――音はおろか、大気の流動さえ止める停止された封鎖空間。
「ずいぶん厳重ね。私の部下たちにも聞かせたくない話ってわけ？」
「そこは君の判断に任せるよ。ただ単に、世界中が、この話を聞いても冷静でいられるかどうかって部分だけだから」
「それ、知られると大騒ぎになる話って聞こえるけど？」
「……否定はできないね」
苦笑にも似た表情でそう答え。
ゆっくりと、金髪の双剣使いは大聖堂の天井へと視線を持ちあげた。
「何から話そうか。まず、全ての事の始まりから――」

Record.4 ― 人と竜と幸せと

1

灰色の連峰。

黒上でも赤茶けた焦土でもなく、その大地は岩のように固い灰色の岩盤に覆われていた。まばらに生えた木々と、そびえたつ山々に全方位を取り囲まれて――

秘境リ・インファリエルへの道。

左右を険しい断崖絶壁に挟まれた一本道を延々と歩きながら。

「ようやく薄暗い神殿を抜けたのはいいけど……」

丸二日ぶりに見る天上を仰ぎ、レンはぼそりと呟いた。

「なあキリシェ、なんか今にも雨が降ってきそうな天気だけど」

「ここは一年中こんな天候だ」

陽をさえぎる厚い暗雲を指さす竜の姫。

「周りを高山に囲まれているから雲がよそへ逃げていかない……というのは人間の地学者の話だが、実際のところはわたしも知らない」

「他に何か理由が？」

「霊的な力のある因縁の場所だ。竜にとってはな。それが天候にまで影響を及ぼしているかはわからないが、いずれにせよ雨は気にしなくていい。こんな曇り空でも雨が降る日は意外と少ないい」

「へえ、じゃあ雨に濡れる心配はしなくて大丈夫そうなんだ」

終わりの見えない道の両脇は、切りたった断崖絶壁。

この道を進むか。あるいは神殿のある樹海にまで戻らないと、雨を凌ごうにも凌ぐ場所もないというのがレンの内心の不安だった。

「ねね、キリシェ、ここんところの竜の渓谷ってどうなのよ？　やっぱりまだ人間の旅団がたくさん来てる？」

キリシェの横に後ろから追いついてくるエリーゼ。

「三百年前と比べて格段に増えた、とカルラが言っていた」

歩く速度は変えずに答える竜の姫。

「三百年前はまだ旅団というものの数も認知度も少なくて、冒険者や開拓者を自称する人間が竜の渓谷に来ることが中心だった。いまは世界録の影響だろうな。人間の旅団が増えたことで、竜の渓谷に踏みこんでくる輩が多いらしい」

「あー、やっぱそうなんだ？　冥界も、ちょっと前に聞いた話だと冥界探索したがる人間が増え

たらしくてさ。まあ九割以上、冥界の自然環境に圧倒されて、日保たずに撤退していくんだけど。この渓谷だと人間がいくらでも侵入できちゃうし、竜にとっちゃ面倒くさいかもね。そういう意味じゃ、人間の姿がなくて一番静かなのが天界かな？」

エリーゼがふり向く先は、旅団の最後尾を歩く大天使だ。

「どうなのフィア？」

「そうですわね。天界の場合は、まず審門を昇れる人間が限られていますから。とはいえ、わたしも四年ほどは地上の旅団養成機関に通っていたわけで、直近の天界事情となると情報不足ですわ。ねえレン？」

「ああ、確かにフィア先輩はそうだよな」

生徒として聖フィオラ旅学園にいた時のフィアは、とにかく全てが模範的だった。

その優秀な成績はもちろん、講義も欠席したという話を聞いたことがない。学園にいた時の彼女には、天界に帰還している暇はなかっただろう。

「フィア先輩が学園にいた時って、天界には戻らなかったんだ？」

「ええ。レンを見ているのに夢中でしたから」

「……その言い方は誤解を生むって」

妙に色っぽいまなざしで見つめられ、あわてて視線を逸らしてしまう。

正面。

自分たちの歩く道の、その先を再び見すえる。

「だけどキリシェ、さっき言ってた割には少なくない？」

「何がだ」

「他の旅団。そんなに竜の渓谷目当てでやってくる連中が多いならさ、俺ら以外の旅団が同じ道歩いててもおかしくないかなって思ってたんだけど」

左右を断崖に挟まれた行く手。

曲がりくねってはいるが道そのものは分岐のない一本道だ。ただでさえ旅団は大所帯であることが多い。他の旅団がいれば足音なり姿なりでわかるはずなのに。

「それが全然いないじゃん」

「さすがに秘境と呼ばれる場所だからな。観光名所じゃあるまいし毎日のように現れるわけじゃない。一月現れないこともザラにある。逆に一日に二旅団やってくるようなこともあるらしいが。……まあ二択だな」

先頭を行くキリシェが、絶壁の上空を見つめるように顔を上げた。

「たまたま今日は旅団がいないのか。あるいは、わたしたちが来たことを知ったカルラが、他の旅団を排除した後か。そのどちらかだろう」

「え!?　まだ竜の渓谷じゃないのに、もう竜たちは俺らが来てること知ってるのか？」

反射的にあたりを見回す。

天上はぶ厚い黒雲に覆われて、周囲はまばらしき姿は見えない。

……竜の渓谷っていうくらいだし。

……でも俺ら、まだ一体も竜の姿を見てない何より審門がない。

天界、冥界への入口として設けられた特殊な次元の扉。竜の聖域も、それに該当する物がある話はレンも聞いたことがある。

だから竜の渓谷もまだ先。

そう思いこんでいたところに、キリシェの話は寝耳に水だ。

「竜の生息地はもう少し先ですが、私たちが歩いている場所は、もうとっくにリ・インファリエと呼ばれる秘境の領内ですわ」

「そうだったんだ……」

「ええ。そういうわけでエリーゼ。私たちはそろそろここで一休みしましょう」

不意に立ち止まる金髪の大天使。

その手で、目の前の先代魔王をそっと手招き

「あー、そうだね。んじゃレン、あとはキリシェに道案内してもらってね。アタシらここで待ってるから」

「ん？　それどういうこと」

「盟約ですわ。二百年前、エルラインによって調停された竜と天使と悪魔の抗争。そこで結ばれた一つの決まり事がありますの。すなわち、互いの領上に互いの種族は足を踏みいれてはならないというものです」

金髪の少女が自分の指先を一本立ててみせる。

――かつて抗争をくり返していた三種の高位存在。

その一つである竜の聖域に、よりによって天界最強の大天使と先代魔王が姿を見せれば、竜たちからすれば何の襲撃かと警戒することだろう。

それを避けるための不可侵盟約。

「ま、何かヤバいことがあったらここまで逃げてきなよ。そしたらアタシらも動けるから、竜側も迂闊に手を出せないし」

「それ先に言われると、ここから嫌な事態になる予感しかしないんだけど……」

「気にするな。竜姫がついている以上、同胞とてお前に危害を加えることはない」

懐から小さな飴玉を取りだし、包みをとって口に放り入れるキリシェ。

「行くぞレン。ここからは二人旅だ」

「わ、わかった！」

後ろで手を振るフィアとエリーゼに首肯で応え、レンはキリシェの背中を追いかけた。

先と変わりない灰色の岩盤。
靴底に硬い岩の感触だけを感じながら、一本道を無言で突きすすんでいく。
そうして、どれだけ歩き続けたことだろう。
「……あの、さ。一つ聞いていい？」
「なんだ」
ふり返ることなく横顔だけこちらに向けてくる竜の姫。
その可憐な面立ちと、神秘的な緑玉色の瞳をじっと見つめて――
「少し未来の話で、気が早いかもって自分でも思うけど」
「未来の話？」
「世界録を見つけたら、やっぱりキリシェは……竜の渓谷に戻るのか？」
「……」
銀髪の少女が、立ち止まってふり返る。
「なぜ、今ここでそれを聞く？」
「今ここでだからこそ聞いてるんだよ。だってキリシェ、言ってたじゃんか」
〝竜の渓谷に戻るのは億劫というのが本音だ〟
上の始原精霊の祀られていた地下神殿で。
自分と二人で燃える焚き火を見つめながら、キリシェは確かにそう言っていた。
「だろ？」
「……なるほど。確かにそうだったな。先に愚痴をこぼしたのはわたしの方だった」
ふっ、と弱々しい微苦笑をこぼす竜の少女。
その華奢な立ち姿は可憐な雰囲気こそ湛えているものの、彼女らしからぬ弱々しさと、そして儚さに満ちていた。
「結論から答える。……正直、まだ考えてない。考えたくないというのがわたしの本音だ。前にも言ったが、今日わたしが竜の渓谷に戻ったのは里帰りのつもりじゃなくて、世界録を見つけるという目的の一環だから」
三百年の封印で失われた自分の力を取りもどすため。
そして、剣聖シオン率いる旅団『精霊の調べ』が渓谷を訪れた理由を調べること。
「考えたくないっていうのは？」
「世界録を見つけた後も、まだ少しだけ、外の世界を見ていたい気持ちはある」
その場に立ち止まったまま。
自嘲か微笑か、どちらともつかぬ幽かな笑みでもってキリシェが首を横にふる。

「わたしは姫だ。本来なら同胞の竜を守るのがわたしの使命で、どんな時があっても竜の渓谷に留まり続けなければならない立場にある。冥界の現魔王や天界の女神がそうしているように」
「……それは、俺も何となくわかってる」
一生を竜の渓谷で過ごす。
他の竜に囲まれ、他の竜を守りながら一生を終えること。最強の竜として生まれてしまったキリシェの、それが姫としての責務なのだと。
「でも、今は違うんだろ？」
「出会ってしまったからな。エルラインと」
頭上を見上げるキリシェ。
「アイツに誘われて外の世界に飛びだして、そして世界を巡る楽しさを知った。フィアとエリーゼとも、最初は互いに警戒だらけの旅だった。いつ寝首を掻かれるかと疑心暗鬼だったが、そんな緊張も数日で吹き飛んだ。それくらい、初めて知る楽しさがあった」
「ああ。フィア先輩やエリーゼもそれは同じだと思う」
聖フィオラ旅学園で、フィアはキリシェの封印が解けるのをずっと待っていた。
彼女の旅の相方にと望んでいた。それはフィア本人が、キリシェをかけがえのない仲間だと思っていたからこその判断だろう。
「しかし、それが過ちだと思う竜の同胞が多いのも事実だ。竜の姫であるわたしが外界をうろつく間、同胞たちを誰が守るのかという話でな」
「……」
「だが、わたしが竜の渓谷を守る必要はない。それがわたしの持論だ」
天上から自分へ。
こちらの目をじっと見つめて、キリシェが一歩だけ傍に寄ってきた。
瞬き一つしない真剣な表情。
言葉以上に、そのまなざしで何かを伝えようとするように。
「天界の天使、冥界の悪魔、地上の竜の対立をあの男が一人で鎮めてしまった。もう竜の渓谷が天使や悪魔の襲撃に怯えることはない。つまり竜姫が同胞を守る時代は、三百年も前にとっくに終わりを告げている」
「……じゃあ、どうして竜たちはキリシェが戻って来るのを望んでるんだよ？」
「望んでるわけではない。ただ『それが古くからの決まりだから』だ。竜は個体数が少ないかわりに寿命が長い。天使や悪魔にも共通する話だが、それが人間と比べれば世代交代が遅いということにつながってしまう面もある」
「年長者の立場ってやつか」
人間社会でも無いわけではない。
大きな都市になれば多少は違うが、小さな村単位では、その長老にあたる人間の発言が絶対的

な力を持つことがザラにある。そしてそういった長老というものは、総じて、過去の慣習を頑なに守ろうとする傾向が強い。

「でもキリシェが、渓谷の中でもダントツに強いから姫に選ばれたんだろ？　年長者ってわけでもないんだし」

「もちろん。しかし竜姫が慣習を率先して破ったら、それこそ同胞たちに示しがつかない。今だってわたしの行動を良く思わない同胞がいるのは事実だ」

弱々しく吐息をつく少女。

「だから、まだ先のことは考えたくない。竜の渓谷に戻る以外の選択が考えられないのなら、いっそ考えない方がマシだから」

「――――」

ぼんやりと呟いてその場に立ちつくすキリシェ。

そんな彼女に、レンもまた一歩だけ近づいていった。

距離。

互いに見つめ合う瞳と瞳の距離だけでなく、言葉と心の距離もまた近づきたい。

その一心で。

〝何でも言いあえる仲間がいた。だから楽しかった。見たことのない世界を巡る旅も、わたし、人ではその魅力も半減していたと思う〟

……自分で言ってたもんな。

……三百年前も、一緒にいる仲間がいるから楽しかったって。

「俺、付きあうよ」

「なに？」

「世界録を見つけた後のこと。竜の渓谷に戻る以外のことが思いつかないならさ、俺が案を考える。お前が気のすむまで旅に付きあおうかって」

「……だが、お前の目的も世界録なのだろう？」

「今の目的はそうだけど、それが最終目的ってわけでもないさ」

世界録を見つけて英勇になりたいから、自分はキリシェたちについてきたのか？

そうじゃない。

純粋に憧れていた。まだ英勇と呼ばれる前からのエルラインの活躍と、そしてそれに付きしたがう三大姫の織りなす冒険譚に。

――未知の世界を見てみたい。

――エルラインが目指した地平を、自分も同じ場所に立って眺めてみたい。

だからこそキリシェたちについてきた。

世界録を見つけるというのも、その夢を叶える第一歩であると思ったからだ。それが最終目的というわけじゃない。

「仲間から誘われてる。それで十分だろ、外に出る理由なんてさ」

「……」

わずかに驚いたように目をみひらくキリシェ。

だがややあって、少女は面白いものでも発見したかのように表情を和らげて。

「……そうだな。それも考えておく」

クスッと、わずかに弾んだ声でそう言った。

「お前に気を遣わせてしまったな」

「そんなんじゃないって」

「いや。嬉しかったのは本当だ。少し気持ちが楽になった」

普段の凛とした立ち振る舞いでもって、キリシェが再び歩きだす。

「嬉しかったが、ひとまずその話は一段落だ。もうじきに渓谷に着く。迎えの同胞たちもいるだろうからな」

拓けた空間。切りたった両端の崖が、まるで扉が開くように左右にわかれ、徐々に道幅が広がって先の景色が開けていく。

その先に――

「……これが審門！」

そびえ立つ巨大な扉。

何百年という風雨にさらされながら、なおも美しい瑠璃色に輝く両開きの扉。それも、レンが頭上を見上げてもまだ天辺が見えないほど大きさ。

まさに竜のためというべき桁外れの巨大さだ。

「すっごいな……こんな大きな建造物、まさか竜が作ったのか？」

「どうかな。なにしろわたしが生まれる前から存在した代物だ。大昔の『失われた技術』の一つと言われている。天界や冥界の審門もコレと似たようなものだが、それとは違って、この審門には何の意味もない。扉の役目もろくに果たせない状態だからな」

キリシェが視線で指ししめすのは、審門のまさに中央部だ。

両開きの扉のはずが、扉の片方が跡形もなく破壊されているせいで扉を閉じることもできそうにない。今では誰でも素通りできる状態になっている。

「ちなみにこの扉を壊したのはエルライン？」

「わたしだ。ちょっと機嫌が悪かった時に軽く殴りつけたら、そのまま壊れてしまった」

「……そっちかよ！」

「ただの骨董品だ。気にしなくていい。それより、審門を通ったら後戻りはできないぞ。気持ち

は引きしめておけ」
まっすぐ正面を見すえたまま審門を通っていくキリシェ。
その背中をレンもまた無言で追いかけていく。
審門を越えて――
「……これ……はっ」
その先の光景に、レンは無意識に喉の奥から声を発していた。
――何十体という巨大な、そして種々の竜たち。
強靱な鎧を思わせる地肌を持つ地竜。
巨大な翼を広げる疾竜。
湖の深きから上がってきたばかりであろう、全身から水滴を滴らせる水竜。
ほかにもレンの知らない無数の竜種たち。
普段ならまず人前に姿を見せないはずの古代竜たちが、目の前にずらりと整列し、それでも並びきれず断崖の上にも並んでいたのだ。
……これが竜の聖域。
……こいつら全部、キリシェ一人を出迎えるために集まってきたのか。
「ご苦労。わたしがいない間、よく渓谷を守っていてくれた」
じっとこちらを見つめる竜たち。
ただそこに「居る」だけで、その重圧で自分は背中がぞっと粟立っているというのに、隣に立つ銀髪の少女はそれを涼やかな表情で見つめている。
すべての竜種の頂点に立つ姫。
「……」
「なんだ？　そんな、そのふしぎそうな目で見られても困る」
「いや、本当にキリシェって偉い奴なんだなって」
大天使フィア。
先代魔王エリーゼ。
天界と冥界での二人の立場も同じようなものなのだろうが、キリシェも含め、その強さはともかく、親しく接しすぎるあまり威厳というものを感じにくかったのが本音だ。
……だけど、キリシェは本当に竜の姫なんだ。
……すごいな。
地上の覇者である竜を束ねる姫。
エルラインと共に終焉戦争を鎮めた伝説の二大姫――ここに勢揃いする竜たちを見て、自分が今までどれだけ超越した姫たちと共に旅をしてきたのか。ようやく実感した。

……すごいけど。

……なんか、なんだろう……この、胸の中の何かが空っぽになりそうな感覚。

この感情を「寂しい」と喩えることが正しいことなのかはわからない。

ただ、そうとしか表現できなかった。

キリシェが、このまま自分の手の届かないところに行ってしまいそうな気がして。

「キリシェ……」

「心配するな。すぐ戻る。カルラと話をしてくれ、それとわたしの封印の解除だな。せいぜい、三時間で済む。それまでここで待っていてくれ」

幽かな微笑とともに横顔を向ける少女。

が、それも一瞬のこと。レンが二言目を発する前に颯爽と背中を向けて、眼前に控える竜たちへと歩いていく。

「皆、この人間はわたしが連れてきた。ぞんざいな真似は許さんぞ」

竜の渓谷。

拓けた空き地のさらに奥へと進んでいくキリシェ。その後ろを、何十体という竜が従うようについていく。

たった一人残されたレン。

いや、自分から二十メートルほど離れた奥に一体だけ残った竜。四肢の先端が遊泳用のヒレに進化した、透きとおるような色味の——勿忘草色の巨大な水竜だけがその場に残って、そして自分を見下ろしている。

接客のつもりか。あるいは観察か、それとも監視なのかはわからない。

自分から近づいてくることはおろか、言葉らしきものを発する気配も皆無だからだ。

静寂の空間。

レンと水竜だけが無言で佇む、竜の渓谷入口。

「……長くて三時間、か」

自分が無意識のうちに手元の剣の柄を握りかけていたことに気づき、レンは慌てて柄に触れた指先を離した。

剣の訓練。キリシェから課された特訓の続きが残ってる。

ほとんど条件反射的にそう考えて身体が動いてしまったが、この渓谷で人間が剣を振り回せば竜たちをいたずらに刺激しかねない。

「やっぱり待つしかないか」

自分に言い聞かせるように呟いて、後ろの断崖に背を預けようとした矢先。

『貴方ハ……エルライン……？』

「え？」
喋ったのだ。
無言で自分を見つめていた水竜が、突然に。
は紛れもなく人の言語だった。
『皆、驚イテイル。貴方ハ……何者……？』
「俺？　いや、俺はエルラインじゃないよ」
初めてキリシェと出会ったときにも間違われ
そんなことを思いだしながら、レンは軽く手
「学園でも……ああ、ええと、人間の都市でも
してる。でも他人のそら似だから。キリシェか
『……ソウ。違ウノカ』
「お、おい!?」
それだけ独り言のように呟いて、水竜まで
興味を失った。
もの言わぬ背中から無言で伝わる感情。
――否。
本来、これが竜というものなのだろう。
地上に棲まう他のあらゆる生物にも興味を示
〝アイツに誘われて外の世界に飛びだして、そ
……ああ、何となくわかったよ。キリシェ。
……お前がここに来ることを嫌がってた理由
そして同時に、彼女が外の世界に焦がれる気
だから待とう。
キリシェが戻ってくるまで、ここで。
「――」
背後の岩壁に身をよせて。
レンは無言で、頭上を覆う黒雲をぼんやりと
竜の渓谷に連なる一本道。
そびえ立つ断崖絶壁に左右を挟まれた道の中
「さてどうでしょうね。レン、歓迎されると思

片言ではあるものの竜の声帯から発せられたソレ
をふってみせた。
よく間違われるくらい似てるってのは俺も自覚は
ら聞いてないのか？」
が立ち去っていく。
さず、永き時をこの聖域で過ごすだけ。
して世界を巡る楽しさを知った〟
。俺も、少しだけ理解できた気がする。
持ちもまた、理解できた気がした。
見上げ続けた。
ほどで――
いますか？」

「んー。どうだろ。ていうか最初は竜もビックリするんじゃない」
大きめな岩に優雅に腰かけた大天使。
その横に腕組みして立つ先代魔王。
「ビックリ……まあそうでしょうね。むしろ警戒されるでしょうか」
「だろうね。なにせ三百年前、たった一人で竜の渓谷に来て竜たちに戦いを挑んだ挙げ句、何十体っていう竜を片っ端から撃沈させた剣帝の生き写しだもん」
地上の支配者。
竜の渓谷に棲まう個体は多いが、それが気まぐれに最寄りの人里を襲撃し、暴虐の限りを尽くしていたのが三百年前のこと。
力の圧政――
理由は単純。自らの圧倒的な力を人間に顕示するためだった。
その暴虐を鎮めたのが剣帝エルライン。
すでに天界と冥界の争乱を鎮めたことで、竜の間でも密かに話題となっていた人間だ。たった一人で竜の渓谷に赴き、あらゆる竜を屈服させ、そして最後に、あろうことか竜姫キリシェを自分の旅路に誘って連れだしてしまった。
「竜からしたら史上最悪の警戒人物だもんね。痛い目に遭わされた挙げ句、大事な姫様を外界に連れだした張本人なんだから」
「そういうことになりますね。とはいえ竜姫本人が連れてきた人間です。あまり無下な仕打ちは受けないでしょうけれど」
「ていうかエルラインと別人だってわかればそれまでじゃない？」
フィアの座る岩の、そのすぐ横にぴょこんと跳び乗ってくる褐色の幼女。
「エルラインじゃないってだけで興味なくすと思うよ。もったいないね。レンがどれだけ興味深い人間か気づけないってのは。気づくのって、せいぜい竜帝カルラくらいでしょ」
「精霊を従えた人間。ますます警戒される気もしますけれど」
こぼれかけた苦笑を押し殺すフィア。
「はたしてレンに、あの竜帝がどんな反応を示すか……」
大天使の吐息。
それは竜の渓谷に吹きこむ風にさらわれて、彼方の天上へと運ばれていった。

2

――どれだけの時間が、流れただろう。
竜の渓谷入口で。
「どういうことだよ……」

下唇を噛みしめながら、レンは寄りかかっていた岩壁から身を起こした。
キリシェを待つ。
そう、自分は待ち続けてきた。
秒刻みで時間を数え続けただけで三時間。それに疲れて瞑想に切りかえて心を落ちつかせて、その後も、体感ではあるが同じだけの時間は経過したはずだ。
六時間。
最初にキリシェが宣言した時間の、その優に二倍以上の時が経過して、今なおキリシェが戻ってくる気配がまるでない。
これが、たとえば渓谷の奥からざわめきがあったり、一体か二体でも竜の姿が見えれば、まだ多少の進展があったと感じられていただろう。
だが実際には、この先の渓谷は怖いくらいに静まりかえっているだけ。
地上にも天上にも竜の姿が見あたらない。
――不自然？
――それとも、これが竜の聖域のいつもの様子なのか？
人間である自分に竜の住処の日常はわからない。
ただ一つ確かなことは、すぐに戻ってくると言ったキリシェが戻ってこないこと。
「……」
その事実は。
レンが胸に秘めた決意を具現化するには、十分すぎた。
キリシェの身に何かが起きたのかもしれない。戻ってくると告げた時間になっても姿を現さないということは、少なくとも彼女の予想と違う何かがあったことになる。
「……なあキリシェ、これはアリだろ？」
足下の岩盤を踏みつけて、一歩前へと踏みだす。
竜の聖域へ。
「俺が、お前を探しに行くのだってアリだよな！」
秘境リ・インファリエル、険しき連峰に囲まれた聖域へとレンは駆けだした。
岩の坂道。
ガリア大炎山ほどの急斜面ではない、穏やかな勾配を駆ける。
目の前には巨大な断崖。
疾竜をはじめとする有翼竜たちなら悠々と飛びこえられる。しかしキリシェの出迎えに集まった竜には地竜や水竜など、翼を持たぬ種もいたはず。
「なら、こっちの道のどちらかか……」
正面には行く手を阻む崖。
その先には、崖を迂回するようにわかれた左右の分岐。

どちらも崖の奥へと続いているように見えるが、その差は歴然だ。
右に迂回する道には、巨大な地竜が這いずりながら通過した痕。それに水滴を滴らせた水竜が通った証拠であろう大きな水溜まりが今も乾ききらずに残っている。
――キリシェに従ってた竜たちは右の道を通った。
それは間違いない。
だがレンが求めているのは竜たちの住処ではない。キリシェが今どこで何をしているのか知りたいだけ。彼女が無事であることを確かめられればそれでいい。
「……だとしたら、俺はこっちだ」
自らに言い聞かせるように口にして。
レンがつま先を向けたのは、左側の道だった。

〝今だってわたしの行動を良く思わない同胞がいるのは事実だ〟

自分は竜たちに歓迎されてはいない。
それは、この何時間という沈黙が何より明確に物語っている。渓谷に棲まう竜から見た自分は、世界録を巡る旅にキリシェを誘う邪魔な人間に他ならないから。
それに、少しだけ興味もあった。
「少しくらい回り道になったって、なるべく竜と出くわさない経路の方がいいよな……」
秘境リ・インファリエル。
竜の聖域だからという意味ではなく、自分を外の世界に連れだしてくれたキリシェが生まれ育った場所だから。
キリシェという少女の境遇と心情を、より深く理解したいからこそ。
この地に眠る歴史を、自分の目と足で確かめたい。
そういう意味でも周りに竜たちがいない方がいい。もしも竜たちにとって秘密の場所がこの聖域にあれば、必ず見張りの竜がいるだろう。無闇にそんな場所に立ち入って竜の怒りを買う真似だけは避けたい。
逆に言えば、そうした見張りの竜の姿がない間は、このまま道を進んでも竜たちの怒りに触れるようなことはないはずなのだ。
「……だけど、なんだ？　この暑さ？」
歩くうちに自然と流れ落ちていく汗。
さっきまでは奇妙なほどの静寂と冷気に包まれていた渓谷が、道を上っていくにつれ、次第に、むせ返るほどの熱気と蒸気に満ちていく。
「なんだよこれ……まるでガリア大炎山の山頂みたいな熱気……」
呼吸するたびに肺が熱せられる気分になる。

竜や天使、悪魔ならばともかく、人間ならばここで一晩野宿するだけで間違いなく熱中症で倒れるに違いない。それほどの熱量だ。

坂道を上り終えた、その先に――

「なっ!?」

喉の奥から漏れだした驚愕が、声帯を震わせた。

血のように真っ赤な溶岩の湖。

ここは活火山の火口ではない。あくまで山と山とに囲まれた渓谷に過ぎない。湖があったとしても、それは清らかで冷たい水のわき出す湖というのがレンの知る常識だ。

……いや、そういう湖もこの渓谷にはあるはずだ。

……そうじゃないとさっきの水竜が生息できないから。

この溶岩の湖だけが特別。そう考えるのが妥当だろう。

「それに、何か普通の溶岩とも違うような……」

ボコボコと沸騰する溶岩の泉。

辺りを包む異常な熱気の正体はコレで間違いない。だが同時に、レンの頭の片隅に生まれた違和感は、この噴きだす溶岩の色味だ。

――鮮血のような赤。

溶岩の組成と温度によっても違いはあるが、溶岩というものは通常、真っ赤というよりも橙色や輝くオレンジ色と喩えた方が近い。

血のように赤い溶岩は、レンの知るかぎりあまり例がない。

……一番近い色を挙げろって言われたら。

……たぶん炎の将魔の炎が、こんな感じの色だったっけ。

炎の化身とも称される大悪魔。

かつてエリーゼの配下だったという五大災の一体が、まさにこんな鮮血色の炎を生みだしていた記憶がある。もちろん直接関係があるとも思えないが……。

「気になるけど、長居してもしょうがないか。体力消耗するだけだし」

溶岩の湖の淵を伝って向こう岸へ。

再び左右をそびえたつ断崖に挟まれた道を進んでいくが、最初にフィアやエリーゼとも通った道と違うのが、こちらは竜の巨体でも通れるほどの広い道ということだ。

「ていうかホントにここが竜の渓谷？　左の道、まったく竜いない気がするけど」

竜の渓谷を過ぎて別の場所に向かう道かもしれない。

引き返す？

レンが、そう迷いながら、それでも足を前に進めたのには理由があった。

――光の柱。

雪のように小さな光の粒子たちが無数に生まれ、そして地上から遙か天上へとゆっくり昇って

いく。その光景がすぐ先の曲がり角の奥に見えたからだ。
あの光が生まれる場所に何かある。
キリシェの覚醒の儀式に関わりがあるかもしれない。だから、あの場所までは歩き続けてみよう。そう心に決めて一歩、また一歩と岩場を進んでいく。
そして。
光の柱の生まれる、すぐ目の前までやってきて――
『……この匂い？　レン？』
断崖でできた曲がり角の奥から。
遠い、遠い残響のように響く、どこか懐かしい覚えのある声が伝わってきた。
人間の声帯が発する声ではない。
先の水竜に似た雰囲気の、けれどもっと人語として流暢で、そして女性的な優しさに満ちたその声音は――
「え？　いま……誰か、俺を呼んだ？」
近い。
正面の断崖を左に折れたすぐ先からだ。
「俺……呼ばれたよな？」
おそるおそる曲がり角へと近づいていく。
と、その奥で、何か巨大な質量のものが動く気配が伝わってきて。そして。
『レ、レン!?　く、来るな、まだ変身も封印も……ば、ばかばかっ！　来るんじゃない、まだこの姿は……その……は、恥ずかし――』
「え？　ごめん、声が乱反射してるみたいで聞き取りづらくて」
妙に慌てたような声。
だが声が妙にこだまするというか、ふしぎな共鳴が重なっていて聞き取りづらい。何を言っているのか理解できぬまま曲がり角を曲がって。
「――」
レンは、言葉を失ってその場に立ちつくした。
神秘的な光に包まれた白銀色の巨竜が、その場に佇んでいた。
……美しい？
いや、神々しいと喩えるべきか。
天使の羽のように純白の羽毛に包まれた、対の翼を有し、真珠よりも儚く清廉な、蒼を帯びた白銀の煌めきを湛えたその身体。

光を反射して輝くのではなく。

その大いなる光は、紛れもなく竜そのものから生みだされている。
大きさは、レンが見上げてようやく頭部が見えるくらい。
体高だけで十メートル以上ある巨体だが、他の竜のように全身を支える胴体が太いわけでもなく、むしろ全身の輪郭はどこか人間を思わせるほどに細く華奢。
緑玉色の双眸もまた至高の宝石を思わせる輝きに満ち、そして優しげだった。
――なんて。
――なんて綺麗で神秘的な竜だろう。
この世のあらゆる宝石よりも美しく、ある種の神性すら感じるさせる存在感。
竜という種族そのものが地上の支配者である事実すら霞んでしまう。竜の渓谷に集結した全ての竜を足し合わせても、この竜一体に何もかもが及ばないだろう。
美しさと存在感。
そしてそれ以上に、言葉に言い表せぬ霊的な絶対性としての「格」が違う。
「……」
『……』
互いに無言。
レンは、目の前の竜の神々しさに言葉が出ずに。
一方の光り輝く竜はといえば、その神秘的な美しさと対照的に、何だか妙にモジモジと、まるで照れたように身体の正面を隠すように横を向いて。
「あ、あの……」
『……なんだ？』
「ええと、俺、キリシェって子を探してて。……知りませんか？」
気づいた時には敬語で接してしまっていた。
いや、それも当然なのだろう。天上から地上、そして冥界を通しても、これほどまでに美しく神秘的な存在はいまい。
畏怖にも似た感情。
初対面であるはずのレンすら、この竜を前にして、見ているだけで意識が遠のくような感覚を覚えずにはいられなかった。
『キリシェを探して……？』
「あ、ええと。はい。たぶんこの渓谷の姫だと思います……けど」
『……』
「……」
『……鈍感』
「はい？」
一瞬、目の前の竜が口にした言葉がレンには理解できなかった。

『……本当に気づかないのか？』
「気づかないって、何が』
『い、いや何でもない！　とにかくそんなジロジロ見るな！……は、恥ずかしい！』
まるで裸身を見られた少女のような反応で。
竜にしては驚くほどに華奢な両腕（両脚？）を器用に交叉させて、なぜか自分の身体を隠そうとする白銀色の竜。
「恥ずかしい？」
『わ、悪いか！』
「いや、ええと気にさわったら謝りますけど、俺から見ても言葉にできないくらい綺麗だと思ったんで。そんな恥ずかしがらずに堂々としてた方が似合うかなって」
『……綺麗……ま、まあそれもそうか。当然だな！』
一転。
今度は妙に嬉しそうに声を弾ませる竜。圧倒的な神秘性と存在感を湛えているわりに、その言葉遣いと言動は妙な幼さを感じずにはいられない。
……あれ？
……なんか俺、こういう感じの奴、知ってるような気がするけど。
「あのぉ」
『わ、わかった！　とにかくキリシェを探しているなら、お前は元の場所に戻っていろ。キリシェには、お前が心配していたと伝えておく』
「え。お願いしていいんですか」
『……任せておけ。心配するな、封印で眠った竜因子を覚醒させるのに、思ったより時間がかかっただけだ。というわけでさっさと戻っていろ！　ほら！』
煌めく尻尾をふって、歩いてきた道を指ししめす竜。
戻れという意味なのだろう。
「わかりました。キリシェがじき戻ってくるなら俺も安心できるんで」
『う、うむ。わたしもすぐ戻るから』
わたし？
謎の竜の謎の呟きに首をかしげたものの、言われるまま、レンはその場を後にした。

人間の少年が立ち去って――
秘境リ・インファリエル。
その最奥に佇む天銀色の竜は、しばしその少年の立っていた地面を見つめていたものの、やあって。
『……綺麗、か……よかった』

照れと恥じらいが混じりあった口調で、そう呟いた。

3

竜の聖域、最奥部前――

大溶岩湖。

「熱っ。やっぱこの溶岩の湖だけ特別に熱いな」

沸騰する溶岩の飛沫を避けながら、鮮血色をした湖の縁を足早に通りすぎる。

たかだか二百メートルほどの距離を歩いただけなのに、その噴きだす蒸気で額から滝のような汗がしたたり落ちてくるほどだ。

「……にしてもさっきの竜、めちゃくちゃ綺麗だったな」

額の汗をぬぐい、レンはふと背後へとふり返った。

溶岩湖の向こう岸。今はもう断崖の奥で見えないが、まさかあんなにも美しく神々しい竜が存在していたなんて想像もしたことがなかった。

蒼を帯びた白銀色。

「そういやキリシェの髪もあんな色だっけ。し、近い関係の竜だったり？　俺にもずいぶんあとでキリシェが戻ったら聞いてみよう。

漠然とそんなことを考えながら、歩いてきた左の分岐を後戻り。ここまで来た時と同じく、やはり道の途中には一体の竜も姿を見せない。

「やっぱりキリシェも右の分岐だったのかな。あっちの道、竜が大勢で通った痕が残ってたもんな。左の分岐はさっきの一体だけだったし……」

二叉の分岐点にまで戻り、レンはあらためて周囲を見わたした。

もし左の分岐で一体の竜とも出くわさずにキリシェの手がかりが得られなければ、このまま右の分岐を進んでいたところだろう。

無数の竜たちが同時に通りすぎたと思われる土埃と、水溜まり。

「……でも、あの綺麗な竜がキリシェもすぐたぶん嘘じゃない。何となくという感覚でしかないが、あの竜は、本当のことを言ってくれている。そんな気がした。

「なら待つか」

最初の待ち合わせ場所。

巨大な断崖に囲まれた、拓けた円形の大空間へ。

フィアとエリーゼはさらに手前の一本道で待っている。竜も、そして仲間たちもいない静寂の空間の中央にぽつんと立ち、何の気なく頭上を眺め――

「無駄です。キリシェ姉様は、あなたの下へは戻りませんよ」
気高き少女の声が渓谷にこだましたのは、その時だった。
「っ、誰だ!?」
弾かれたように視線を地上へ。
――その言葉ではなく。
――レンが恐怖に近いものを感じたのは、その気配の現れ方だった。
声が響くまで、まるでその足音も気配も感じなかった。
突然に出現した。
そうとしか思えないタイミングだったから。
「驚かせましたか？　特にそのような意図はなかったのですが」
「アンタは……」
凛とした雰囲気を湛えた少女だった。
大きな紅玉色の双眸に、儚げながらも知性を感じさせる美しい面立ち。
風にそよぐ銀髪は透けるように透く、微かな陽光を浴びて虹色のグラデーションに煌めいている。
そして、その手に握られているのは王笏。
王笏――時の王や権力者が、自らの絶対的な支配の象徴として携える杖。
少女の携えるソレも、その先端に大きな深紅の宝玉が取りつけられており、杖そのものが至高の芸術品のような美しい装飾に覆われている。
……キリシェに似てる？
……いや、だけど何だ、この胸騒ぎ……背中の寒気が止まらない？
幻想的とも言える雰囲気の少女。
なのに、こうして向かいあっているだけで心臓を鷲づかみにされているような錯覚さえ感じてしまう。この圧力はいったい何だというのか。
「やはり理解しかねますね」
「え？」
「この渓谷を出て外を巡りたい。そんなキリシェ姉様の気持ちが少しでも理解できるかと、私も戯れにこんな人間の姿になってはみましたが……結局、理解できない。やはり姉様は心乱れていらっしゃる。早く竜姫としての威厳を取り戻してもらわねば」
ふう、と重々しい溜息をつく少女。
移りかわる虹色に輝く髪を、その華奢な指先で梳りながら。
「さて、私の自己紹介が必要ですか？」

「……まさか」

レンの頬を、一滴の冷たい汗が伝っていく。

どこかキリシェを想わせる容姿。

そして彼女を「姉様」と表現する、その言葉が意味するものは一つしかない。

すなわち――

「私はカルラ。キリシェ姉様にかわり、この地の同胞を守る者」

「そうか、アンタが……」

レンも薄々と感じるところはあった。

人間の姿をしていながらも、その湛える圧力と存在感はまるで別物。かつて炎の将魔と対峙した時も似た寒気を味わった。

……キリシェと姉妹の契りをかわした竜帝カルラ。

……だけど違う。

キリシェと、そして目の前の彼女はまるで別物だ。

紅玉色のまなざしに浮かぶ表情は冷酷、あるいは無感情に等しいものだ。キリシェのような笑顔も、恥じらう表情も、そうした一切の感情の起伏がない。

「話は聞いてる。アンタがこの渓谷で一番偉い竜なんだろ」

「そうなりますね。あくまでキリシェ姉様が不在の期間ということに限定してですが」

淡々と答える竜の少女。

「だとして、そんなアンタがここに来たのは……俺に何か話でも？」

「話ではない。これは私からあなたへの、一方的な宣告です」

流暢な人語でそう告げて。

大いなる竜帝が、冷たい深紅の瞳でこちらを睨みつけてくる。

「人間、あなたはキリシェ姉様にとっての害悪です」

「……なんだって」

「あなたの選択に委ねましょう。一つ目――今すぐに引き返し、奥にいる大天使と先代魔王を連れてこの地を去ること。二つ目――今この場でわたしを相手にし、力ずくで竜の渓谷から追いだされること」

「……」

「意味がわかりませんか？　ならばこの機にハッキリと伝えましょう」

無感情の瞳。

圧倒的な力の暴君が、弱小たる人間を見下ろす支配の構図がそこにはあった。

「キリシェ姉様は私たち竜の仲間。今日をかぎりに、世界録などといった宝探しの遊戯には終止符を打たせてもらいます」

そして。

無慈悲なる竜帝は、その手に握る竜の王笏を、気に頭上から振りおろした。

――暴風。

大気が悲鳴を上げてねじ曲げられ、その場に竜巻さながらの旋風が巻き起こる。

「ぐっ!?」

身体が宙に浮き、そのまま背後の断崖へと叩きつけられる。

……精霊具？　いや、違う。

……こいつはただ、自分の王笏を思いきり振りおろしただけだ。

大天使フィアがその拳だけで突風を巻きあげたのと同じ。

単純な物理作用。

だがそれは、人間を遙かに凌駕する神がかりな「力」によって為されたもの。

「姉様を、返してもらいます」

それが布告。

竜の渓谷の守護者からの、人間に対する決定的な拒絶の意思の表れだった。

Record.5 ― 極光の竜帝カルラ

1

「始まりは、今から三百と十六年前――」

秘境リ・インファリエル。

険しい山脈に囲まれた渓谷にして、あらゆる竜種が集い生息する竜の聖域。その人口にあたる拓けた空間に、少女の凛とした声音がこだまする。

「キリシェ姉様は、最古の竜種である天銀竜の純血として生まれました。それも、生まれながらに同属の天銀竜はもちろん、私を含めたあらゆる竜をも超越した強さを有する奇蹟の個体として」

「……それは知ってる」

竜の王笏をその手に握ったまま微動だにしない竜帝カルラ。

彼女を正面から見すえ、レンは微かに首肯した。

「ですが、これはまさに偶然ですが、同じ時代にもう一つ、世界の運命の悪戯によって生まれ落ちた特異の存在がいました。エルライン――当時、剣帝と呼ばれた人間の剣士です。あの男と出会い、そしてあの男と戦った日から、姉様は変わってしまわれた」

剣帝エルラインと竜姫キリシェの戦い。

幾日幾夜にもおよぶ、有史以来最大の決闘と言われる衝突。その戦いで、世界地図にある山脈が消え、新たな渓谷と平野が生まれたとも言われるほどに。

天界では女神をはじめとする多くの天使が。

冥界では現魔王と、その配下の高位魔族が。

地上では人間と竜とが。

三界に生きる存在すべてが、その戦いの行方を固唾を呑んで見守ったという。

「アンタが一番偉い竜なんだろ。三百年前のキリシェとエルラインの戦いも見てたのか？」

「……いいえ」

わずかに首を横にふる竜帝カルラ。

「姉様とエルラインの戦いはあまりに激しく、私ですら近づくことはできませんでした。それは天界の女神や冥界の魔王も同じ。あの戦いの結末を知っているのは姉様とエルラインの二人だけ。戦いの果てに何が起こり、どう決着がついたのかも、知るのは当事者だけというわけです」

「そして今は、キリシェ一人ってわけか……」

「そうです。ですが一つ確かなことは、その戦いの後にキリシェ姉様が変わってしまったということ。戦いの後、姉様は私を呼びだしてこう言いました。『わたしは、あの人間の旅についていい

くことにした』と。……耳を疑いました。そしてさらに、その人間に天界の大天使フィアと、冥界の当主たる魔王エリーゼまでもが同行すると聞いて、今度は姉様の正気を疑いました」

対立する三すくみ。

天界、冥界、地上を支配する高位存在の長たちが、人間の剣士に同行するとは。

それが前代未聞のことだというカルラの主張はレンにもわかる。

……だけど俺は知ってる。

……俺はキリシェの口からその話を聞いたから。

〝アイツに誘われて外の世界に飛びだして、そして世界を巡る楽しさを知った〟

「キリシェは、その旅が楽しかったって言ってたぜ」

「それは違います。姉様は、未体験の刺激を前に一時的な錯覚に囚われただけ。時間が経てば再び竜姫としての威厳を取りもどすでしょう」

「……」

「――と、思っていました」

ゆっくりと。

人間が溜息をつくように、重たい余韻をまじえる少女。

「キリシェ姉様が終焉戦争による封印から解きはなたれたのはつい最近のこと。この時代にエルラインはおらず、共に旅団を組んでいた大天使も先代魔王も、その名を風の噂に聞くばかり。つまり姉様を翻弄する者たちは皆いなくなったわけです。私も他の竜たちも、キリシェ姉様が封印から脱出して渓谷に戻ってきた時には、ようやく待望の竜姫が戻ってきたと安心していた。ところが――」

「世界録か」

「そう。エルラインが遺したという手記を求め、再び姉様は旅立っていきました。そしてようやく戻ってきたと思った時には、姉様の隣にはあなたがいた。あの剣帝の再来ともいうべき姿をしたあなたが」

「それ、さっきアンタ以外の別の水竜にも聞かれたけどさ」

敵意混じりの視線でこちらを見つめる竜の少女。

幻想的な極光色に輝くその髪が風にそよぐ光景を見つめながら、レンは続けた。

「俺はエルラインじゃない。ああ、確かにキリシェにも一回は間違われたよ。だけど俺は英勇と比べられるような功績なんてない。ただのⅢ級騎士だ」

「エルライン本人かどうかが問題ではありません。あなたという存在が、キリシェ姉様にエルラインという男との旅路を想起させるのが問題なのです。あなたという人間が傍にいるかぎり、姉様はいつまでも外界巡りに魅せられたまま。……それにあなた自身も、本当に有象無象の人間た

ちと同一視できる程度の剣士かというと、私はそうは思いません」
「……どういうことだ？」
「私は霊王竜。あなたを守護する精霊の匂い、気づかないと思いますか？」
「っ！」
思わず息を呑む。
竜帝カルラがこちらをじっと観察していたのは、単に自分を見ていただけではなかった。彼女は勘づいていたのだ。
占代召喚術――自分を取り巻く精霊の気配に。
「先ほど、私に会うなり姉様が言いました。面白い人間に出会ったと。エルラインそっくりの見た目だがエルラインではない。剣士としても未熟でまだまだ半人前だが、エルラインとは別の面白さのある人間だと。声を弾ませて」
「俺が……？」
「そして私は直感しました。ああ、またかと。今度こそ姉様が戻ってくると思ったのに。あなたという人間がいるかぎり姉様は戻ってこない。それはつまり――」
極光色の髪の少女が、その手に握る王笏を再び振りあげる。
「人間、お前は全ての竜に仇なす敵だ」
砕ける王笏。
竜の怪力によって大地に叩きつけられた衝撃で、王笏に取りつけられた深紅の宝玉が澄みきった音を立てながら千々の欠片となって虚空に舞い上がる。
そして生まれる閃光。
「今度は光!?」
竜の王笏が砕けたことで生まれる膨大な光。
あまりの眩しさに一瞬、レンの視界が真っ白になったその直後――
そこに、少女の姿はなかった。
『私は竜帝カルラ。キリシェ姉様にかわり、すべての竜の頂点に立つ存在』
レンの視界が、何か巨大な影に覆いつくされた。
「疾竜……じゃない、これはっ!?」
巨大な翼を持ち、あらゆる竜種の中でももっとも速く飛翔する空の支配者。
だが違う。
頭上を優雅に飛翔する竜は、レンの知る疾竜という竜種の体長を遥かに凌駕する巨体と、そして極光のごとく無数の色が混じりあう極彩色の輝きを湛えていた。

巨大きい。

単純な体長と重量なら、先に見た白銀色の竜よりもさらに一回り大きいだろう。同時に、こうして対峙するだけで全身から一気に冷たい汗が噴きだしてくるのがわかる。

――異次元の威圧感。

先の神秘的な竜の雰囲気を、大いなる神性の結晶と喩えるならば。

この虹色の竜は、さしずめ圧倒的な『力』と『威厳』の具現そのもの。

……まさか。

……この極光色の竜が、さっきまでの……

『レン――』

「カルラ、それがお前の真の姿か!?」

竜の声帯から発せられた声。

だがそれは紛れもなく、直前まで自分の眼前に立っていた少女のものだった。

『あなたを許さない。姉様を……返してもらいます！』

「待ってくれ！　俺は別に、そんなつもりじゃ――」

『あなたの意思に意味はない。あなたの存在そのものが、あの人間と世界録とを姉様に想起させる。その事実が問題なのです！』

竜の咆吼が秘境にこだまする。

旋風。

極光の竜帝が翼を羽ばたかせる。ただその一挙動だけで、翼から生じた大気のうねりが、竜巻じみた螺旋状の暴風を引き起こす。

「――痛っ!?」

咄嗟に顔を庇って交叉させた腕が、鋭利な何かに切り刻まれた。

風の刃。

鎌鼬とも称される現象だ。風そのものではなく、強烈な突風に煽られた無数の砂塵と石の破片が、銃弾のごとき勢いで身体の表面を掠めて傷つける。

……王笏を振りおろした時の風なんか比じゃない。

……ただ地上から飛びあがっただけでこんな超常現象が起きるのか。

これが竜。

ただ動くだけで、地上のあらゆる生物を震撼させる高位存在。

『怖くなりましたか？　理解しましたか？　竜というものを。あなたが共に旅団を組んでいたキリシェ姉様もまた、本質はこういうものだということを』

「……」

可憐な姿をした少女が、一瞬にして巨大な竜へと姿を変える。

竜こそが本来の姿だったとして、そしてそれを事前に知っていたとしても、その外見の変わり様は、人間に驚愕と脅威を抱かせるに余りあるだろう。

それはレンとて同じ。竜帝カルラの変貌に、数秒まともに声が出なかったのは事実だ。その点は認めざるをえない。

だが。

『あなたも所詮は人間。キリシェ姉様を恐れ――』

「本質？　いいや、わからないね！」

左手に携えた鞘から抜刀。そのまま迷わず大気を横に薙ぐ。

キンッ、と乾いた音を立てて何かが弾ける。

――砂礫の一粒。

今まさにレンめがけて飛んできた極小の風刃を、レンの振るった剣先が狙い違わず真横に薙ぎはらい、斜め後方にはじき飛ばしたのだ。

「確かにそうさ。俺は今も、キリシェが竜になった姿なんか想像つかない。もし目の前で突然アイツが竜の姿に戻ったら最初は驚くかもしれないし、もしかしたら……本当にもしかしたらだけど、一瞬だけキリシェが怖くなるかもしれない」

初めて見る物に対して警戒心を抱く。

それは生物としての本能だ。表向きは冷静を装うための訓練を積んだところで、内心の動揺は変わらない。それはキリシェにも伝わってしまうことだろう。

『理解しているようですね。ならば――』

「違う！　それが何だって言うんだよ！　キリシェがどんな竜だって俺は構わない。俺もキリシェも、そんな弱っちい覚悟で一緒に旅しているわけじゃない！」

暴風のなか声を張り上げる。

遙か上空を飛翔する竜帝に伝わるように。

「お前にキリシェの本質がどうとか語られてもサッパリわからねぇよ。なにせ、俺はまだアイツと出会って一月も経ってないんだ。ただ漠然とすごい奴だってことと、意外に照れ屋で恥ずかしがり屋ってことくらいしか知らない。だからこそ――」

剣を水平に構え、レンは頭上の竜帝へと叫んだ。

「俺は、俺の信じるままキリシェを受け入れる。それだけだ！」

ここで待っていてくれと。すぐに戻ってくるからと。

彼女は、そう言ったのだ。

だから待ち続ける。たとえ此処が竜の聖域で、自分がキリシェ以外のすべての竜たちから疎まれようとも。

「俺はキリシェを待つ。たとえアンタに恨まれたって」

『……そう。残念です』

カルラが無感情な声でそう吐き捨てる。
直後。
浮遊していた巨体が急降下し、一瞬で巨大な影として視界を埋めつくした。
――押しつぶされる!?
迫りくる超質量の風圧に全身から汗がふきだした。
「ぐっ……！」
防御も回避もなく、ただただ全速力で後ろに身を投げだした。跳び下がって着地ということも忘れ、硬い岩盤の上を転がりながらも落下範囲から脱出。
轟ッ！
カルラの巨体が地を穿つ。
足下の岩盤が音を立てて歪み、破砕し、その場に蜘蛛の巣状の亀裂を生じさせる。
……これもただの落下だ。
……飛んで降りただけ。なのに、人間の法術以上の破壊力で地面が砕けたってのか。
立ち上がり、さらに距離を空けようと膝に力をこめて――
『姉様とあなたの縁あっての、一度きりの警告です』
竜帝カルラの宣告。
その口元に、言葉ではない、具現化した深紅の輝きが灯ったのを確かに見た。
『火の始原精霊を召きなさい。さもなくば軽い火傷では済みません』
「――息吹っ!?」
竜の息吹。
極光色の竜から、深紅の輝きを放つ「何か」が吐きだされた。
炎？
否。それは限りなく炎に近いながらも炎とは次元を異にした、かぎりなく純粋な力の波動そのものの噴出だった。

――『Rh/ s hec ele Selah』――

古代詠唱。
精霊の声を聞き、その呼びかけに応えるための言霊。
ほぼ同時、カルラの放った竜の息吹が、光の洪水としてレンの姿を呑みこんだ。
そして。
『ガリア大炎山で、あなたが五大災と戦うにあたり火の始原精霊の力を行使していたのは知っています。炎の将魔と精霊、二種類の強い炎の波長を感じましたから』

放出された竜の息吹が二つに裂けた。
さながら海が割れるように、レンを呑みこみ押し流そうとする深紅の輝きの洪水が、まるでレンを避けるかのように真っ二つに裂けたのだ。
『しかし、火の始原精霊をすでにそこまで自在に従えているのは予想外でした。せいぜい私の息吹の威力を軽減する程度と思いきや、まさか強引に流れをねじ曲げるとは』
「従えてるんじゃない。コイツが懐いてくれてるだけだ」
レンが縦に振りおろした剣。
その剣先のちょうど真上あたりを翼持つ火蜥蜴が浮遊する。
火の始原精霊の炎干渉。
レンが剣を振りあげるのを精霊が、その意図を酌みとって剣の軌跡どおりに竜の息吹に干渉。
その押しよせる力の流れを歪ませたのだ。
竜の息吹は、炎でなく純粋な力の波動。
一方の精霊もまた完全な霊的存在であるため、そうした力への干渉は得意なのだろう。
『なるほど。懐く……いささか不似合いな言葉ではありますが、確かにその精霊、あなたに好意的な感情を抱いているのは間違いでもないようですね』
「わかるのか？」
『竜種では私だけが例外です。竜種はその強力な力の代償に、霊的波動体への交感値が著しく乏しい。キリシェ姉様ですら例外ではない』
「アンタだけが特別ってことか」
『それは私が霊王竜だから。竜帝カルラの名を継承した理由です』
名の継承？
人間では一部の王族間のみ、子が親の名を引き継いで二世、三世と名乗ることもあるが、竜種においても同様の慣わしがあるのは初めて聞く話だ。
『霊王竜カルラ。太古の昔に実在した「孤独と禍の竜姫」。生まれながらに呪いの炎を纏い、肉体は業火に爛れ、溶岩よりも熱い猛毒の血液が皮膚を突きやぶって噴きだしていたことから、あらゆる天使と悪魔、同胞すら、彼女に近づくことはできなかった』
「……それで」
『その禍の炎はカルラ自身の身体をも焼きつくしました。しかしカルラは、自らの呪いの炎でもって秘境リ・インファリエルを最期まで守ろうとしたのです。想像を絶する痛みと苦しみの中、竜姫カルラは渓谷の「ある場所」に辿りつき、そこで力つきたと言われています。あなたも目撃したでしょう。あの沸騰する鮮血の湖を』
「あの湖が!?」
真っ赤な血の色をした溶岩の湖。
ガリア大炎山で噴き上がる溶岩とも似て非なる、不気味なほどに赤い溶岩が湧きあがってい

た。つい先、あの幻想的な白銀の竜と出会う直前に見つけた場所だ。

「まさか、湖そのものが初代カルラの亡骸だっていうのかよ……」

『という伝承が竜の間に残っているだけです。あの鮮血色の湖こそ、かつて霊王竜カルラの身体を組成していたモノであると』

極光色の竜帝が一瞬、後ろをふり返る。

自分たちのはるか背後――

秘境リ・インファリエルの最深部に位置する「その場所」を懐かしむように。

『その言い伝えが事実かはわかりません。ですが、あの場所がいまだ非常に強い竜因子を帯びているのは確かです。キリシェ姉様が自らの封印を解くために渓谷を訪れたのも、あの場所でならば自分の竜因子を覚醒できる――すなわち、本来の竜の姿に戻るための儀式に適しているから』

「……」

『さらに言えば、あなたの隣にいる火の始原精霊にも関わりのある話です。なぜその精霊が竜に似た姿をしているのか。考えたことはありますか？』

翼を持つ火蜥蜴。

輝く霊的波動体である存在を見下ろす竜帝。

「コイツが何だっていうんだ？」

『その精霊こそが、始原の霊王竜カルラの亡き後、その力の残滓から生まれた霊的波動体。そう言われています。もちろん、これも伝説の域を越えませんが』

「火の始原精霊がっ!?」

霊王竜――

どの竜種にも属さない、偶然のみが生みだす奇蹟の個体。

始原の霊王竜であり竜姫であったカルラは、自らの炎で焼け朽ちるまで竜の聖域を守り、そして死後に、その力の一端が精霊となった。

『真偽は不明です。しかし私を含めた過去の霊王竜が、生まれながらに精霊との交感度が高いのは紛れもない事実。そして強さも同様です。代々、その時代に霊王竜が誕生すれば、その個体が竜姫となって渓谷を守るのが決定事項でした。ゆえに私も、私の前の霊王竜も、始祖の霊王竜カルラの名を継承した。……ですがこの時代に、どんな運命の悪戯か、そんな霊王竜すら超越する一体の規格外が誕生したのです。尋常ならざる強さ。特異点とも言うべき異端の竜。それこそが――』

「キリシェ、か」

『そう。霊王竜すらまるで相手にならない。いえ……ただ強いだけではない。その美しさ、気高さ。同じ天銀竜の純血の中にあってもキリシェ姉様は別格でした。ゆえに竜姫の位は姉様のものとなり、私は竜帝と呼ばれるようになった』

竜帝カルラ。

キリシェさえ誕生しなければ、正統なる竜姫として聖域を守る竜であった霊王竜。

「……わからないよ」

対し。

レンは剣を構えたまま、竜帝カルラをまっすぐ見上げた。

「アンタ、何を考えてるんだ」

『というと？』

「そんな大事な秘密、俺に話していいのかよ」

いまの話は、竜種の中だけでの秘密であるべきものだ。

始祖の霊王竜カルラと火の始原精霊の関連性は、竜種による伝説だとしても。

問題は、鮮血色の湖の言い伝え。

強い竜因子を帯びた竜の聖域。つまりそれは、なぜこの秘境リ・インファリエルが竜の住処とされているのかという根本に関わる話のはずだ。

「その話が、もしも心ない人間とか、天使や悪魔に知られたらどうするつもりだったんだ。湖のことを調べたいって輩がいつどれだけ出てくるか――」

『おや？　私の見こみ違いでしたか？』

わずかに、竜帝カルラの口調に嘲笑めいたものがまじった。

『この程度のこと、キリシェ姉様がすでに話しているかと思いましたが』

「なにっ!?」

『差しつかえない話。あの湖が強力な竜因子を帯びていることは、高位の天使や悪魔には遙か過去から知られている事実です。それは天界、冥界の秘境とて同じ。単に人間だけが真実を知り得ていないだけ』

「……それすら知らされてない俺は、キリシェに信用されてないと？」

『いいえ、むしろ逆』

竜帝カルラが首をふる所作。

そしてその答えは、レンの意とまるで逆のものだった。

『あなたとキリシェ姉様は出会って本当に間もないのでしょうね。渓谷に来るまでの期間も、そんな話すら聞くこともない短時間での旅路だったこと。今、あなたの反応から理解しました。その短期間でよくぞキリシェ姉様にああも懐かれたものだと思います。三百年前、同胞にすら心を開かなかった姉様なのに……』

「――――」

『あなたは先ほど問いましたね。なぜ竜の秘密を自分に教えるのかと。それはまさに、あなたにそう自覚させるためですよ。あなたはキリシェ姉様に心開かれている。それは認めましょう。しかし私たち同胞もまた、姉様と共に過ごしてきた時間があり、竜として共有する秘密がある。触れあってきた重みが違う。それはつまり――』

渓谷の守護者。

不在の竜姫に代わり、同胞たちを守ってきた竜帝からの。

『人間と竜とは、相容れない生き物なのです』

それが、決定的な決別の言葉。

一切のつながりを断ち切るべく振りおろされた、拒絶の言霊だった。

『そもそも命の長さが違う。あなたも知っているでしょう？　人間の頂点であった剣帝エルラインの生きた約三十年。それから三百年という星霜が経過し、なお私は生き続けている。けれど人間は違う。三百年前の剣帝エルラインの存在など、もはやその強さも活躍も、語り継ぐ者のいない伝説と化しているでしょう？　生きる時の長さが違えば、その時を歩む歩幅も違う。共に歩むことなどできはしない』

「……」

『ゆえに、これが最後の警告です。疾く去りなさい。いますぐ去れば、私もあなたをこれ以上傷つけることはいたしません』

「……そうか」

一言。

ただ一言だけ、レンは小さくそう呟いた。

『理解しましたか？』

「一つ、聞きたいことがある。竜種全体じゃなくていい。アンタ個人の意向でいい。今の話を聞いても俺にはどうしてもわからない」

剣を水平に構えたまま。

偽英勇の少年は、眼前の竜帝に向けて問い返した。

「竜が欲しがってるのはキリシェか、それともキリシェの力の方か？」

『……いま、何と？』

「この渓谷の人口で、俺とキリシェの二人とで、少しだけ話す時間があった」

ほんの僅かな時間だった。

何かを語ろうとするにはあまりに短い時間。

けれど、何かを伝えるには十分すぎる時間。

「キリシェはその時間で、渓谷の秘密なんかまるで話そうとしなかった。さっきの始祖の霊王竜のことも、真っ赤な溶岩みたいな湖のことも何一つだ。そのかわりに俺がキリシェから聞かされたものは何だと思う？」

『……』

〝心配するな。すぐ戻る〟

渓谷を守る竜姫としての自分の役目は、三百年前に終わりを告げた。
――地上。
――天界。
――冥界。
対立する天使と悪魔と竜の抗争をエルラインが鎮めたことで、終止符が打たれた。
だからこそ、もっと世界を巡ってみたいと。
キリシェはそう言っていたのだ。
「確かにアンタから聞かされた竜の秘密は驚いたよ。人間の俺には知らないことばっかりだった。……だけど、それだけさ。他人を驚かせるだけで何も心に残るものがない。それはアンタがただ事実を告げているだけだったから」
『であれば、何だと言うのですか？』
「アンタは最初からキリシェの気持ちなんかわかっちゃいない！」
構えた剣を斜めに振り下ろし、レンは叫んだ。
「お前が一度でもキリシェの本心を聞いたことはあるか？　歴史を見ろよ。お前が言った、たかだか三十年しか生きることのできなかった英勇が、天使も悪魔も竜も、全部ひっくるめて抗争を鎮めたじゃないか。もう、キリシェが渓谷を守る必要なんてない！」
『それは一時の感傷というものです。ここに留まり竜としての自覚をもてば、じきにその感情も忘れるでしょう』
「それが間違いだって言ってるんだよ！　感情を忘れる？　それを忘れたくないと思ってるから、キリシェもフィア先輩もエリーゼも今こうして集まってるんじゃないか！」
忘れたくない。
それは大天使も先代魔王も同じ。剣帝エルラインに付きしたがった三大姫は、その思いがあるからこそ、彼の遺した世界録を追い求めてるのだから。
……ああ、そうさ。こんなことキリシェは絶対に自分から言えやしない。
……だからこそ、この役目だけは俺のものだ。
誰にも譲れない。
そう、きっとこの瞬間のために――
「お前の言うキリシェの居場所に、キリシェの幸せなんてない。だから――」
『だから？』
すべてはこの時、この瞬間。
そのために、自分はこの聖域を訪れたのだから。
「俺が、キリシェを解放する」

この澱みきった聖域から、囚われた竜姫を解きはなつ。
三百年前の英勇がそうしたように。
「アンタは力ずくで俺を排除するって言った。なら約束しろ。もしも俺がアンタに一矢でも報いることが出来たなら、キリシェを自由にしてやってくれ。この渓谷を守るのはアンタだけでも十分すぎるはずだ！」
『それはできません。叶わぬ望みです』
「な――」
なぜ。
そう発しようとした言葉が、喉の奥で止まった。
『竜帝に一矢報いる？　傲るな、人間が！』
竜の怒号。
怒りをともなった咆吼が現実へと干渉し、周囲の大気が凍りついていく。
ほのかな肌寒さを感じさせる微風。それが数秒とたたず、骨の髄まで染みわたる氷雪まじりの突風へ。
『精霊を従えたがゆえか？　それともキリシェ姉様の強さを身近に感じ、それが自分の強さであると錯覚したか？　愚かな……愚考極まりなし。ならばいっそ安寧なる夢心地のまま、凍てつく大地に跪け』
極光色である竜帝の体表が、まるで画板を塗りつぶすようにその色味を移していく。
美しき虹色の鱗の輝きから深い蒼へ。
氷海色。
極寒の海を想起させる色が、竜帝カルラを支配していく。
『氷結支配』
天を衝く氷柱。
硬い岩肌であった大地に亀裂が生じ、そこから巨大な氷の柱が轟音とともに突き出し、周囲の断崖も何もかも呑みこんで凍りつかせていく。
――氷塊に閉じこめられる！
瞬時にそう悟り、レンは眼前にせり上がる氷柱から後退した。
「火の始原精霊！」
レンの声を受け、火の精霊がその身を強く発光させる。
炎熱に干渉する霊的波動体。
その子猫ほどの体躯から生まれた小さな火の粉。儚い火の欠片にしか見えないソレが、大地を凍てつかせる氷塊に触れた直後、真白い蒸気を噴出しながら、一瞬にしてその氷塊が蒸発した。

『……っ。凄まじい熱。私の氷属性にここまで抗うとは』

火の始原精霊の炎によってまたたく間に溶かされていく大地の氷塊。その光景を一瞥し、竜帝カルラが小声で呟く。

『本当に、精霊に好かれているのですね』

「え？」

『古代召喚術で召喚した火の精霊にできるのは、同じ火の波長を持つ法術への干渉のみ。炎の術式を無効化することはできても、氷の術式を防御するほどの炎熱を発生させることはできないはずなのですが……それを可能にする力の執行。もはや使役ではなく、精霊自身の意思であなたに従っているとしか考えられない』

「賞賛のつもりか？」

『ただの分析です』

そう告げる竜帝の言葉に焦りはなかった。

『逆に言えば、それ以外の波長は全て通じるということなのだから』

輝く鱗の色に再び変化が生まれる。

凍てつく氷海色から、眩いばかりに輝く黄金色の煌めきへ。

『古代の人間は、天上から地平へと降りそそぐ落雷を神格化し、奉っていたようですね。落雷が大気を進む際の黄金色を、その象徴として』

「……まさか」

その言葉、そして竜帝に浮かびあがる黄金色を前に。

レンの背筋からぞっと冷たい汗が噴きだした。

『地電流。大地を這いすすむ電撃があることを知っていますか？　知っていたとしても、あなたに防ぐ手だては無いでしょうが』

電流。

光速で襲いかかる不可避の一撃。もしもその光を人間の目が捉えたとしても、その時には自分が雷撃を受けて倒れた後だ。

「火の始原――」

精霊の名を呼びかけて、だがその先がレンにはどうしても紡げなかった。

……呼びかけてどうする？

……呼んだって、コイツにできるのは炎と氷を防ぐことじゃないか。

そう察した瞬間。

レンがその名を呼べなかったのは、火の始原精霊が役立たずだからではない。

自分にこんなにも懐いてくれる精霊が、もしも……もしも万が一……

むしろ、恐れた。

雷撃から自分を守ってくれと反射的に頼んでしまえば、そして強引にでも命令すれば、

火の始原精霊（サラマンダー）は自らの身を盾に雷撃を受けることを選ぶのではないか？

犠牲の未来視。

自分にずっと懐いてくれた精霊だからこそ、そんな恐れが頭を過（よ）ぎった。

もちろん精霊ならば竜の雷撃にも耐えられるかもしれない。精霊がどれほど強靱（きょうじん）なのかはわからない。しかしそれでも、「精霊を盾に我が身を守る」という選択肢そのものが、レンにはどうしても選べなかった。

〝どのつまり、お前はそういう奴（やつ）なんだろうな〟

思い返せば――

それは、他ならぬキリシェから聞かされた言葉だった。

変わり者。

自分以外の人間で、もしも古代召喚術ができるようになれば、きっと彼らは覚えたての失われた術式（エイシェント）を心ゆくまで自慢し、召喚した精霊がどれだけ力を発揮できるのか、その限界を確かめようとするだろう。

だがお前は違う、と。

逆に召喚する精霊のことを気遣って、精霊がなるべく力を出さずに済むことをまず考える。それが『優しい』と呼ぶものかはわからないから、彼女はそんな自分を『変わり者』と表現するしかなかったと。そう言っていた。

……ああ、コレがそうか。

……確かにキリシェの言うとおりだ。

剣を握ったまま、レンは内心、自嘲（じちょう）じみた笑（え）みを浮かべていた。

「――――」

キリシェは、もしかしたらこの瞬間（とき）を予感し、懸念していたのかもしれない。

優しさであり弱さになりえる心。

咄嗟（とっさ）の判断で悩み揺れる、心に生まれた隙間（すきま）を。

『地脈支配（ふるえて、ねむれ）』

竜帝（りゅうてい）カルラの言霊（ことだま）。

黄金（きん）色に輝く竜から生まれ、大地を伝って迫る終焉（しゅうえん）の雷撃。それが自分に襲いかかる瞬間を為（な）す術（すべ）なくレンはなかば覚悟して――――

そして。

だからこそ、呆然（ぼうぜん）としたまま気づかなかった。キリシェがこの可能性に気づいておきながら、しかし明確にそれをレンの弱点と断言しなかった理由。

優しさが弱点になるのなら、なぜそれを克服しろと言わなかったのか。

それは――

『ネエ。顕現モ、イイ……？』

隆起する大地。

今まさに雷撃の通過経路であったはずの岩盤が割れ砕け、千々の欠片となり、それが宙で集結して鈍色に輝く巨人を形成していく。

「鉱巨人!?」

名もなき古代神殿で確かに見た。身体を構成する岩石の組成が違うため体表の色味こそ異なるが、その巨大で逞しき大地の守護者の姿を。

『そんなまさか……上の始原精霊まで!?』

竜帝カルラの呟きに混じる驚愕の感情。

その声に応じるかのごとく、鈍色に輝く巨人がレンの前に仁王立ちになり、そして自らの身をもって大地を伝う雷撃を受けとめた。

落雷に等しい威力の強電流。

が、鈍色の鉱巨人はソレすら微風かのように平然としている。

「お前……」

『来チャッタ！』

足にとびついてくるフード姿の小人。

レンと目が合うなり嬉しそうに飛び跳ねて、ぴょこんと肩先にしがみついてくる。飛びつかれている感覚はあるのに、ふしぎと重さを感じない。

『今の一瞬で精霊を召喚した？……いえ、そんな動きは見えなかった。召喚した精霊の力を最大限に発揮するだけでなく、精霊に自らの意志で顕現までさせるとは』

雷撃を防がれたことではない。

竜帝カルラが目をみはったのは、上の始原精霊がレンを守るために自らの意志で顕現したことと。その事象そのものだ。

『私がかつて見た、どの古代詠唱士もそんな真似はできなかった。占代召喚術そのものが失われたはずの現在に、なぜあなたのような才能の人間が――』

「才能？　そうじゃない」

『え？』

「キリシェは、もっと違うこと言ってたぜ」

剣先の上空を浮遊する火の始原精霊。

自分の肩にしがみつく上の始原精霊。

二体とも、じっと自分を見つめてくれている。出番はまだなのかと、その輝く眼差しがそう告

げてくれている。
……そうだよ。
……キリシェは、最初から言ってくれてたじゃないか。
〝お前の古代召喚術は、もしかしたら才能や素質ですら無いのかもしれない〟
〝その精霊を惹きつける性格というか気質こそ、お前本来の『特別なもの』なのかもしれないな。お前が精霊を呼ぶのでなく、精霊の方からお前に集まってくる〟
「俺は何もしてない。こいつらが自分の意思でやってくれてるだけだ」
自分に力を与えてくれる精霊たちへと無言で頷いて。
レンは眼前の竜帝を睨みつけた。
「今のもそうさ。アンタの雷撃を防ぐための一瞬の判断が、今の俺にはできなかった。それを、精霊の方から力を貸してくれただけだ。そんな精霊任せの結果でしかないものを、才能なんて呼べると思うか？」
『――――』
「でもな、だからこそ俺は負けたくないんだよ。力を貸してくれる奴らがいるから！」
右手に握った剣に力をこめて。そして。
レンは、砕けた岩盤を蹴って竜帝カルラ目がけて走った。そびえたつ氷柱を迂回し、地盤に走った亀裂を跳躍して飛びこえる。
黄金色に輝く竜のもとへ。
『地脈支配』
三度目となるカルラの言霊。
再び全身から放出され、大地を経由して強力な雷撃がレンへと迫る。
「上の始原精霊！」
『デキル、ヨ』
レンの意思に応えて精霊が片手を振りあげた。
大地の脈動。
電撃の伝う地盤に亀裂が走り、隆起し盛りあがった壁によって電撃が阻まれる。
『デキタ？』
「ああ、上出来だ」
嬉しそうに声を弾ませる精霊に微苦笑で応えつつ、駆ける足は一瞬とて止めない。
彼我の距離五メートル。
竜帝カルラの足下に生まれた巨大な影に、レンの足が踏みこんだ。
『正気とは思えませんね。自ら私に近づいてくるとは』

カルラが、その巨腕を振りあげる。
その一振りで都市の市壁すら容易に砕くであろう強力無比な破壊の具現。
『力の差。人間と竜のもっとも根本的な違いを――』
「知ってるさ」
振りおろされた腕を睨みつける。
瞬き一つすら惜しみ。
全集中力を傾注して、繰りだされる一撃の軌跡と速度を見極める。
「力の差なんて人間と竜だけのものじゃないってそうさ。いつだって俺は、痛いくらいその現実を思い知らされてきた」
『なに?』
「偽英勇と英勇。偽英勇と学生騎士たちと比べられ。
聖フィオラ旅学園では、自分より屈強な学生騎士たちと比べられ。
ガリア大炎山でも、炎の将魔を相手に痛感した。
――いつだってそう。
――世界には、自分より強い相手しかいないことくらいわかってる。
後退せず。
地を踏みしめる足に力をこめて、レンは全力で前へと駆けた。
『なっ!?』
怯えて動きを止めるか直前で後退する。そう予測したうえで振りおろしたカルラの一撃が、レンのはるか背後の地盤を穿つ。
「胴体、がら空きだぜ?」
カルラの顔を真下から見上げ、大木を想わせる四肢をくぐり抜ける。
そこからさらに、暗い影になった胴体の下をすり抜けて。
『動きは俊敏。ですが――』
苛立ち混じりの声を響かせる竜帝。
その巨大な尾が蛇のように蠢いたと思った直後、鞭のようにしなり、地上の自分めがけて横殴りに薙ぎはらいにかかる。
「くっ……! 頼む鉱巨人!」
――あと数秒でいい。時間がほしい。
――それで全部こと足りる。
地盤を削り、隆起した岩壁をも破壊しながら迫る竜の尾。
人間であれば直撃はおろか掠めるだけで木の葉のごとく吹き飛ぶだろう。そんな一撃を、鈍色の巨人が正面から受けとめた。
『小癪』

ミシッ。

尾を受けとめていた鉱巨人の全身に、蜘蛛の巣状の亀裂が走る。

竜帝の一撃。

その衝撃と破壊力を前に、大地の守護者が耐えられたのは刹那の一時に過ぎなかった。

『私を誰だと思っているのですか』

鉱巨人の巨体が宙に浮く。

直後。その巨体もろとも、レンはそのカルラの尾に薙ぎはらわれていた。

「――――っ！」

咄嗟の衝撃に息が詰まる。

悲鳴すら上げることも許されず、レンは遙か後方の断崖まで鉱巨人もろとも吹き飛ばされていた。尾の威力の大半を鉱巨人が受けとめ、一時的には完全に抑えきったはずの一撃なのに、力の残滓だけでこの有り様だ。

「……っ、……たくっ……怪力にも……ほどがある、だろ」

痛めた背中を庇って前のめりに立ち上がる竜帝カルラ。気づいた時には、既にその体表は剣を支えに。

前方からは、ゆっくりゆっくりと近づいてくる本来の極光色に戻っている。

『竜からすれば、あなたの意識があることが不思議です』

「……コイツが庇ってくれたからな」

血の味のする口で、絞りだすように言葉を紡ぐ。

起き上がった自分のすぐ後ろ。倒れたままの元の岩石へと戻っていく鉱巨人の姿がそこにはあった。

……ありがとう。それに、ごめんな。

……俺のために傷ついて。

『しかし意外な表情ですね？　意識があることに安堵するのではなく、悔しがるとは』

「悔しいさ。アンタと戦ってると、俺がどんだけ弱いのかすごくよくわかる」

よろめきながらも、支えとして大地に刺していた剣をひき抜いた。

「俺が弱いままであるかぎり、きっといつまでもコレがくり返されるんだろうなって思う。それが何より悔しいから」

自分を庇って――

キリシェが、フィアが、エリーゼが、今のように傷つく未来があるかもしれない。そう思うだけで自分の弱さを恥じたくなる。

『そう。私が危惧しているのがまさにその点です』

こちらを見下ろす竜帝カルラ。
その視線に混じる心情の色彩は、激怒と哀れみ、そして憂慮との混色だった。
『キリシェ姉様、それにあの大天使フィアと先代魔王エリーゼまでもが揃った旅団。その中で、あなただけが不釣り合いではないですか？　あなたが窮地に陥って、それを助けようとキリシェ姉様が窮地に陥る。それが万に一つでもないと言いきれますか？』
「……」
『竜姫、大天使、先代魔王を従える。それは剣帝エルラインだからこそ許された所行です。あの剣帝は、史上ただ一人、キリシェ姉様の息吹に耐えきった唯一の存在でありました。私の尾の一撃で意識を失いかけるあなたとは違う。彼の外見を模っただけの贋作には、それを実現する実力も求心力もない』
「……ああ、その通りだ」
唇から顎先へと伝う一滴の赤いしずく。
背中を打ちつけた時に内臓まで痛めたか、あるいは単に口の中を切っただけか。全身激痛の状態では、もはや自分がどれだけの傷を負っているかも定かではない。
それを――
「だけどな、そんなのはキリシェたちについていくって決めた時からわかってたさ」
〝最初から強くあれとも、いきなり強くなれとも言わない〟
〝だが、お前がわたしを庇って疾竜へ挑んだ気概を忘れるな。それが、わたしたちが旅団を組むたった一つの条件だ〟
唇からこぼれる血しずくをぬぐい取り。
ふるえる喉が痛みを感じるほど強く、レンはその場に声を響かせた。
「絶対に認めさせてやる。だから見てろよ竜帝！　次が俺の正真正銘の全力だ。その一撃で、お前の逆鱗を打ち砕く！」

竜の渓谷に連なる一本道。
そびえ立つ断崖絶壁に左右を挟まれた道の中ほどで――
「だいぶ派手にやってるみたいだねぇ」
「そうですわね。まあ十中八九、こうなる気はしていましたが。どうやら竜帝の方もそれなりに本気のようですし」
硬い地盤から突きでた大岩に。

そろって腰かける金髪の大天使と、褐色の小柄な先代魔王の姿があった。
フィアはじっと考えこむように腕組み。
一方のエリーゼは、何かを探知中であるかのように天上を見上げたまま動かない。
「それでエリーゼ、どうですか戦況は？」
「始まった時から変わりなし。わざわざレンとの戦いの場に特別な結界を張ってる。おかげでどんな攻防が起きてるのか、こぼれた波長の残滓しか読みとれない。アタシたちがレンの加勢に駆けつけると思ってるのかな？」
「それ以上に、竜姫に勘づかれるのを懸念してるんでしょうね」
自分が連れてきた人間。それをよりによって竜帝が攻撃していると知れば、キリシェの心境も穏やかではあるまい。
「何とかなりそうですか？」
「……んー。生き残るだけなら、何とかここまで逃げてくれたらいいんだけど」
戦いが始まって数分。
一瞬のように思えるが、人間と竜との交戦としては十分すぎる時間だ。エリーゼが常に戦況を追い続けてはいるが、まだ窮極的な局面には至っていない。
「弱りどころですわ。レンと竜帝との戦いに、大天使か先代魔王どちらか片方でも介入してしまえば、三百年前にようやく鎮まった火が点きかねません。それを承知で加勢に入りますか？」
「ここが竜の渓谷以外だったらね」
フィアの溜息に、同じく溜息で返すエリーゼ。
不安定な岩場に腰かけながら、器用にその場で両膝を抱えて丸くなる。
「場所が悪すぎる。竜の聖域にアタシらが立ち入るのだけは禁忌でしょ。地上、天上、冥界の三界の均衡を崩しかねないもん。……まあ、レンが無事に逃げてくるのを待つしかないよね。もちろん勝って帰還できたなら理想だけど」
「レン、単身で勝てると思います？」
「竜帝次第でしょ」
両膝を抱えるエリーゼの視線は、変わらず天上を向いたまま。
「なにせレンは剣帝みたいな常識外れの強さじゃない。カルラも竜帝の意地があるし、弱小種族の人間なんかに間違っても本気は出せない。手加減の限りを尽くしてまだ余裕と思って様子見するはず。カルラがそうしてレンを侮っているうちに、レンが精霊の力を借りるなりして一発当てれば、それが奇蹟につながる」
「その一発というのは、逆鱗？」
「うん。ていうか現在のレンが竜に勝てるとしたらそれしかないよね。竜の逆鱗のことは知ってるみたいだったし」

古代神殿での探索中。
何気ないキリシェとレンとのやりとりのこと。

〝竜の逆鱗と言えばわかるだろう？〟
〝ええと、竜の弱点っていうのは聞いたことある〟
「そうですわね。竜の逆鱗は人間社会でも『竜の逆鱗に触れる』という諺があるくらい、有名な弱点にもなってます」
逆鱗――強靱な竜の鱗のなかで、唯一の弱点とも言われている部位だ。
体表でもっとも痛覚神経が集中した場所でもあり、これを破壊された場合、いかなる竜であっても激痛で意識を失うとされている。
「聖フィオラ旅学園の生徒であればなおさら、新入生が早々に教官から学ぶ基礎事項ですわ。ただしそれは竜への挑戦を勧めるためのものではなく、そんな諺のとおり甘いものではないという戒めであり警告としてですが」
竜の逆鱗に触れる。
言葉としては人間にも馴染み深いが、実際、では人間がそれを破壊できるかというと、これは無謀そのものと言っても過言でない。
並の剣士がどれだけ全力で斬りつけようと、子竜の逆鱗にさえ傷一つつけられずに剣の方がへし折られる。霊王竜の逆鱗となればどれだけの硬度になることか。
「アシェンディア戦で見せたように、あの霊剣ヴィエルジュであれば竜帝カルラの逆鱗に触れても一方的に刃が砕けるようなことは無いでしょう。ただ……」
凱旋都市エンジュに遺された英勇の剣。
炎の将魔との死闘において、レンはその剣を手元に召喚することで、高位悪魔の障気を切り裂いた。
「相手が竜帝カルラというのが厳しいですわね」
「霊王竜は、逆鱗の場所がどこにあるかわからないんでしょ？」
逆鱗の位置は種族ごとに固有。
たとえば疾竜であれば顎の下であり、水竜や地竜はまた別の位置にあることが知られている。過去に逆鱗の場所を特定できていれば、その同種の竜が何体いようと逆鱗の位置は同じ。それが竜に挑む人間たちの数少ない希望にもなる。
だが霊王竜には、そんな希望すら存在しない。
「アイツら、個体ごとに逆鱗の場所が違うんだっけ？」
「そうですわ。霊王竜は突然変異の個体ゆえ、その時代に生まれた個体ごとに姿も体格も、体色すら違います。そして何より肝心な逆鱗の位置も」

フィア自身、一世代前の霊王竜と交戦した経験がある。
当時の霊王竜の逆鱗は下腹部に存在した。天空を舞う大天使にとって、巨体の陰に隠れた逆鱗を上空から特定する作業は至難を極めた。
そしてまず間違いなく。
現代の霊王竜カルラの逆鱗もまた、そんな過去の個体の位置とは違うはず。
「エリーゼ、もしかして知ってたりします？　現竜帝の――」
「まさか」
肩をすくめる先代魔王。
「霊王竜自体、表に出てくることなんて滅多にないしね。カルラの逆鱗なんて、位置を知ってるとしても竜種の仲間くらいでしょ。そうは言っても、もう今の時点で逆鱗の位置を探知できてなかったらレンの負け。元々の地力に差がありすぎるもん」
「……そうですわね」
微苦笑とともにフィアもまた頷いてみせる。
「ですが、このまま見ていたい気持ちはありますが」
「ん？」
「レンの逆鱗破壊。はたして竜帝相手に成せるかどうか」
「……そうだね。それはちょっと興味がある」
そこまで言って。
岩場に並んで腰かける大天使と先代魔王は、ふと、同時に顔を見合わせた。
――気づいたのだ。
――自分たちがレンに加勢しない一番の理由を。
それは三界の均衡崩壊を恐れることでも、竜との全面抗争を懸念するからでもない。
奇蹟の再現。
偽英勇と呼ばれた少年が炎の将魔を撃破した、あの瞬間をもう一度見てみたい。
「ま、私の可愛い後輩ですし。当然に――」
「アタシがわざわざ古代召喚術の手ほどきした人間だし。もちろん――」
その昂ぶる感情こそが何にも勝る理由であると。
二人は同時に理解した。
「勝ちなさい、レン」
「勝ちな、レン」

秘境リ・インファリエル。

険しい山脈に囲まれた渓谷にして、あらゆる竜種が集い生息する竜の聖域。その入口にあたる拓けた空間で――

『破壊する？　私の逆鱗を？』

疑問でも嘲笑でもなく。

極光色に輝く竜帝のその呟きは、放心にも似た声音だった。

理解できない。

この人間はなぜ唐突にそう宣言したのか。いや、なぜそう断言できたのか。

『理解できませんね。そもそも私の逆鱗の場所がどこにあるか、あなたに教えたつもりはありません。……まさかとは思いますが、キリシェ姉様から？』

「いいや、教えてくれたのはアンタだ」

鈍色に輝く剣を携えて。

その剣先の上空に火の始原精霊。

自分の肩には、今もしがみついて離れない上の始原精霊。

二体の精霊と共に――

レンは、眼前に立ちはだかる大いなる高位存在を睨みつけた。

「竜帝カルラ、どうして極光色に戻ってるんだ？」

『……なんですって？』

「俺が見たなかでアンタの体表が極光色だったのは、息吹を放出する時だけだ。それ以外、自分が使う力の波長に合わせて体表の色を変えていた」

氷海色――天を凍てつかせる氷の波長。

黄金色――大地を奔る強大な雷の波長。

それが能力発動の制約なのか、それとも体表の色を変えることで発動する波長の効果を引き上げているのか。その理由まではわからないが。

「それがアンタの力の発動条件であることは間違いない。そうだろ？」

『……それで？』

カルラは否定も肯定もしない。

だがその声音には、今までにない警戒の色が混じり込んでいた。

「使う能力に合わせて色を変えるなら、手間をかけて極光色に戻る必要なんて無いはずだ。氷海色から黄金色へ。さっきみたいに直接その色に変化すればいい」

『……』

「だけどアンタはそうせずに元の極光色に戻った。つまり戻した方が都合がいい。いや、都合がいいなんて程度の理由じゃないはずだ。たかだか人間一人を相手にもそれだけ念を入れる。そんな重要な理由なんて一つしか考えられない」

『それが、逆鱗の件とどう関係するのです？』
「それはアンタが一番知ってることだろ。そう、アンタの逆鱗は――」
輝く極光の巨竜へと。
その握った剣の切っ先を突きつけて、レンは告げた。
「アンタの全身のなかで逆鱗だけは、極光色から色が変わらない」
氷の波長を発動する際に、全身を氷海色に染めたとしても。
雷の波長を発動する際に、全身を黄金色に変えたとしても。
極光の竜帝カルラの全身のうち、逆鱗だけは永遠に極彩色のまま。
「色を変えたままだと逆鱗の場所が明白だ。それで万が一にも俺にバレることを警戒して、すぐに元の極光色に戻ったんだ」
『……』
「そして逆鱗の位置もおおよそ予想がついてる。あんたの頭の上から首の後ろ、それから背中にかけてのどこかだ。違うか？」
『……まさか、あの時に！』
竜帝がその全身を戦かせる。
〝胴体、がら空きだぜ？〟
〝――あと数秒でいい。時間がほしい。それで全部こと足りる〟
カルラが、全身を氷海色に染めていた時のこと。
「アンタの隙をついて懐に潜りこんだ時に、大方の部位は観察できた。逆鱗が極光色のままっていう特徴はたったいま勘づいたことだから、あの時は闇雲に逆鱗を探してただけだったけど。それでも首から胸元、下腹部にかけて。それとアンタの四肢と翼の内側はほとんど確認できた」
しかし結果的に、極光色の逆鱗は見つけられなかった。
つまりカルラの逆鱗は、あの時にレンが見ることのできなかった部位に存在する。
「あと、そのデカい尾で俺に攻撃してきたよな。てことは尾にも逆鱗は無い。尾に逆鱗があったら、そんな弱点付きの部位で攻撃してくるわけがないからな」
ゆえに竜帝カルラの逆鱗の位置は絞られた。
レンの視点からでは見上げても視認できない死角に逆鱗は隠されている。つまり背中か、あるいは首から頭部にかけてだ。
竜よりも高い位置を羽ばたく鳥のみが知る、竜帝カルラの逆鱗。
『……』
長い、長い、沈黙。
不気味なほどの静寂が竜の渓谷を包みこむ。

少年と竜帝。
互いに、どれほどの長きにわたり向かいあい、見つめ合ったことだろう。
『……あなたは』
「ん？」
『あなたは変わった人間ですね。レン』
竜帝カルラの呟き。
そしてそれは偶然にも、姉である竜姫キリシェの言葉を想起させるものだった。
『なぜ、そんな発見を敵である私に伝えるのです？　もし正解だったとしてもそれを告げる利点がない。逆鱗の位置を知られた私が警戒を強めるか、あるいは最悪、重大な秘密を知った人間をただで返すわけにはいかないと考えるか……そうは考えなかったのですか』
「利点はある。アンタに伝えたいことがあった」
『私に？』
――言ってみなさい。
その瞳に真摯なまでの感情を湛え、こちらを見つめる竜帝カルラ。
「さっき言ったとおりだ。俺は、アンタに認めてもらいたいだけなんだよ」
キリシェが世界を巡ることを止めない。
そしてその旅に、自分という矮小な人間が同行すること。
「アンタが俺のことを認めてくれて、それにキリシェのことも快く送り出してくれるなら、俺はアンタと戦いたくなんかない。互いに痛い思いをするのも嫌だし、敵意をぶつけ合うのもご免だから」
『私の逆鱗の秘密を見破ったことを評価してほしいと。あなたは只の足手まといではなく、かつての二百年の英勇の、その再来であると』
「そこまで大げさなつもりはないさ」
ただ、旅団の一員でありたいだけ。
自分でそう名乗るのではなく、キリシェやフィア、エリーゼたち。そして自分たち四人以外からも認めてもらうことに意味がある。
「だから頼むカルラ。キリシェの気持ち、汲んでやってくれないか。キリシェは俺にだけ教えてくれたんだよ。まだ世界を巡っていたいって！」
『……』
極光色の竜は無言。
そして大いなる竜は、その長きにわたる沈黙の果てに。
『……もしも……私が霊王竜でなかったら……』
「え？」
『もしも私が一介の竜として生を受けていれば、あなたの気持ちを汲むこともできたかもしれま

せん。……何より、キリシェ姉様の気持ちも』

本心の発露。

竜帝としてではなく。

キリシェの妹竜として、心の深奥を初めて垣間見せた瞬間だった。

『しかし私は竜帝です。すべての同胞たちの代表者として、人間の望みを聞き入れるわけにはいかない』

「カルラっ！」

『――ゆえに、越えてみせなさい』

魂振るわせる言葉。

敵に放つ棘ある言葉でなく、その言葉はまるで味方を励ますかのように力強く響き、竜の聖域にこだました。

『あなたが英勇エルラインの贋作に過ぎぬ人形でなく、紛れなき彼の再来であると。私と、この渓谷にいる全ての同胞に証してください。それが、私の立場からあなたに伝えられる精一杯の言葉です』

竜帝カルラが翼を拡げる。

その翼が光り輝く極光色から一転、禍々しいまでの黒き深緑色へと移りかわる。

『手加減はしません。腑抜けた私が勝ちを譲ったところで、渓谷の同胞たちに示しがつかない』

巨竜が翼を羽ばたかせる。

風がうねり、大気が軋み、甲高い風切り音が鳴りひびく。

豪風。

はるか頭上から打ち下ろされるその突風が肌に触れた途端。何かが焼けるような音と共に、肌が一瞬にして真っ赤に腫れ上がった。

「猛毒の風っ!?」

ぽこっ……ちゃぷん……

しずくの跳ねる音が地中から伝わってくる。そうレンが認識した時には、足下の亀裂という亀裂を中心にして奇怪な法術文様が描かれていた。

『呪毒支配』

法術の円環から噴き上がる猛毒と呪法の混成物質。

まるで瀑布のごとき水量でもって噴き上がり、ソレが岩壁に触れた途端、不気味な気泡を生みながら岩壁がみるみるうちに溶けだしていく。

――直撃する。

「くっ……！」

剣を握りしめて跳躍。後方から斜めに噴出した毒液の直撃をかろうじて避ける。

が。

……足に……力が、入らない？

……さっきの猛毒の風はこのための布石か！

『先の風、一息でも吸ったのは失態でしたね』

浮遊する巨竜。

そう告げる間も、なおも上空から降りそそぐ猛毒の風。

『このまま吸い続ければ、じきに全身の自由がきかなくなる』

「火の始原精霊！」

レンの声に、浮遊する精霊が頷いた。

燃え上がる深紅の風。

火の始原精霊が生みだした炎が場の大気を熱し、竜巻のごとき上昇気流を作りだす。

『私の風を熱風ではじき返しましたか。良い機転。しかしそれだけでは届かない』

はるか上空を浮遊する竜。

一方で地上は猛毒の液体に冒され、足場と呼ばれるだけの場所も残っていない。翼を持たない人間にとって、天上を舞う竜はあまりに高く遠い存在だった。

――どうする。

――どうすれば、あの竜まで剣の切っ先が届く。

『そして、残る地上もこれより消滅する』

光が生まれた。

白光。

もっとも弱く穢されやすく、しかしだからこそ、もっとも気高き色。

『これが最後です』

雪よりも白く。

一片の穢れなき純白の光をまとう、美しき竜帝の姿がそこにはあった。

『静寂色彩、純白之天命』

破壊の光。

一切の慈悲も容赦もない、純粋なる破壊の力をもって放たれた天の裁断。それは一本の光の柱として顕現し、至高き天上から地上へと降りそそいだ。

崩壊する地盤。

そこに音はなかった。

無音の破壊か、あるいは人間の鼓膜が聴き取れる波長の限界をこえた音だったのかは、わからない。わからないまま――

「――」

レンは、空へと跳んでいた。

竜帝カルラの放った光が地面に刺さり、跡形もなく地盤を吹き飛ばしたその爆風に乗り、さらに火の始原精霊が地上から吹きあげる熱風に押しあげられて。

はるか上空へ。

人間の創りしあらゆる建造物よりも高く、跳んだ。

極光の竜帝カルラの、その頭上まで。

そして見た。

雪よりも真白い体表にたった一部、美しき極彩色に描かれた逆鱗を。

――両翼の付け根。

大きく羽ばたく両翼の境に存在する極小の極光色。

『さあ、どうしますか？　その鋼の切っ先では、あなたの願いは叶わない』

頭上の人間を見上げるカルラ。

無防備な逆鱗を晒しながらも、彼女の口調はあまりに優しく穏やかだった。

『キリシェ姉様と共に世界を巡るとあなたは言う。キリシェ姉様を解放すると言いました。そのためにあなたは何を諸手に握り、何を振るうというのですか？』

竜帝カルラの最終提題。

その問いかけに、レンは右手に煌めく琥珀を握りしめていた。

先代魔王の宝玉。

古代召喚術の発動を支える神具であり、それが可能にするのは物体転移。召喚する物体と自分の因果が強いほどにその力は増す。

……これで二度目。

……炎の将魔の時より、絆は深くなってるはずなんだ。

輝く発動体。その直後――

レンの手に握られていたものは、透きとおった蒼色に輝く一本の剣だった。

『霊剣ヴィエルジュ!?』

「ああ、剣帝の剣だ。三百年前にアンタも見たことあるだろ？」

両手に輝く霊剣を握りしめ。

レンは、眼下に煌めく極光色の逆鱗へと全力で振りおろした。

――衝撃。

両手に奔る反動が手首を伝って肩先までも痺れさせる。

『……惜しかった、ですね』

背中に跳び乗った自分へとふり返る純白の竜。

『見事ここまで到達し、私の逆鱗を見いだし、その手に携えた剣も紛れなき本物。そこにあと

一つ。あなたに・流の剣上としての技量が備わっていれば、私の逆鱗を破壊することができたでしょうに』

足りなかったのだ。

レンが全体重をのせて全力で振りおろしても破壊するだけの威力を与えることができなかった。

『あなたの健闘は――』

「いいや」

剣の切っ先を輝く逆鱗へと突きたてたまま、

「あいにく俺は・人じゃない。コイツがいる」

自分の肩にしがみついたままの精霊。

上の始原精霊（ノーム）。

空へと跳ぶ際にも、振り落とされないよう必死についてきてくれた。それが今――

「待たせたな。ようやく出番だぜ」

『……出番キタ？』

「ああ、お前の力を見せてやれ」

『そんな馬鹿（ばか）な。大地に干渉する上の始原精霊（ノーム）が、こんな高き天上……で――』

言いかけた竜帝（りゅうてい）の言葉が半ばで止まる。

気づいたのだ。

自分たちが浮遊する天上のさらに上空より飛来する、巨大な質量の存在に。

――隕石（いんせき）。

天より降りそそぐ大地の結晶。

「アンタの放った光だよ。あんな威力で地面を吹っ飛ばしたらどうなるか」
『まさか……私が宙に噴き上げた砂と岩を、全て、つに再集結させたというのですか!?　そのために土の始原精霊を!?』
超質量の大地の結晶。
さながら避雷針めがけて降りそそぐ落雷のごとく。
それは狙い違わず、レンの突きさした霊剣へと遙か天上から落下した。
「決着、だな」
金剛石にも比類する強度の逆鱗。
その逆鱗と――
上の始原精霊の力で集結した超質量の流星の衝撃を受けた、霊剣ヴィエルジュの破壊力とが鬩ぎあい――
一瞬の均衡の後。
澄みきった音を立てて、砕けたのは虹色に輝く逆鱗の方だった。
『……見事、です』
苦悶の息をもらしながら、竜の体表が本来の極光色へと戻っていく。
逆鱗を破壊された激痛。
それでもなお、誇り高き竜帝は自らの意識をかろうじて保っていた。
『眼下をご覧なさい――』
「え？」
言われるまま竜の背から地上を見やって。
その先にある光景に、レンは思わず息を止めて見入っていた。
何百体という竜たちが再び集結し、自分とカルラを見上げる姿。
そしてその先頭には。
「……まったく。妙に騒がしいと思ったら、この有り様か」
煌めく銀髪をなびかせる少女。
微苦笑でこちらを見上げて、手を空へと伸ばすキリシェの姿があった。
「早く降りてこい。いつまでわたしを待たせる気だ？」
遠い遠い地上からの呼び声。竜の渓谷に吹きこむ風に乗り、上空のレンまで伝わってきた。
さらにその彼方では――
「見事でしたわ。さすが私の自慢の後輩です」
「なに言ってんの。フィアってば、最後なんかハラハラして見てらんなかったくせに」

竜の渓谷にいたる道で。
微笑でこちらを見上げる大天使と先代魔王。
「キリシェに……フィア先輩、エリーゼも？」
『少し残念ですが、やむを得ませんね』
どこか気の抜けた声でそう呟く竜帝カルラ。
『キリシェ姉様のこと、よろしくお願いします
をかけてあげること。でないとすぐ不機嫌にな
「……それは、もう何となくわかってるよ」
『ならば安心です』
ふっ、と声をやわらげて。
極光色の竜帝は、レンを乗せたまま再び竜の

2

大地に降り立って。
周りの同胞たちに囲まれたカルラと一瞬視線
に歩いてくる銀髪の少女。
「愚妹が手間をとらせたな」
「……見てたのかよ」
毒液の消え去った大地に腰をおろし、レンは
「もしかして一部始終？」
「最後の決着の部分だけだ。何が起きたのか、
ついているし、そんな予感も薄々と描いていた
背後に佇む巨大な竜帝へと目をやって。
そんなキリシェの表情は、どこかバツの悪そ
「止めに入れなかったのは……その……悪かっ
「いいよ。竜の事情ってやつだろ」
カルラが竜帝として最後まで振る舞ったのと
その姉であり竜姫であるキリシェとしては、
いかなかったのだろう。
「痛っ……」
「無理して立つな。そう軽い負傷でもないだろ
「いや、何とか大丈夫だから。フィア先輩もエ
戻らないと心配じゃなくて怒られそうだし」

悲鳴を上げる全身に鞭打って、かろうじて再び立ち上がる。
「そっちは」
「わたしか？　炎の将魔の時より多少マシになったとは思うが、身体にとりついた何十個という枷の一つが外れた。実際にはそのくらいの差違だ」
くるっ、とその場でキリシェが一回転。
「どうだ？　何か違うか？」
「見た目じゃわかんないって」
「要はその程度のものということだ。しかし多少の前進はあった。それはまたフィアとエリーゼがいるところで話すとして――」
そこまで告げて。
妹である竜帝カルラの方へと、キリシェがゆっくりと向きなおる。
「カルラ」
『皆まで言う必要はありません。それがキリシェ姉様の決断ならば』
やわらかい声音。
姉にそう告げるカルラの口調は穏やかだった。
『ですが、先ほどキリシェ姉様にお伝えした通りです。剣聖シオン――彼の者がこの地に現れて、そして私に告げた予言は恐らく間違っていない。世界録を巡る旅路。この先に何が待っているかわかりません。ゆめゆめ油断なさらぬよう』
「剣聖シオン？」
現代最高峰とも名高い旅団『精霊の調べ』を率いる若き天才剣上。竜帝カルラが告げたその名を、レンは漠然とくり返していた。
「あ、そうだよ。キリシェのことばっか気になってたけど。その剣聖の話もどうだったのか確かめないと」
竜の渓谷を訪れ、何かを調べていったという剣聖。
彼の目的も竜帝カルラなら知っているはずだ。しかも今のカルラの口調では、キリシェは既にその情報を伝えられている？
「なあキリシェ」
「わかってる。だがわたしたちだけで話してもしょうがない。ほら行くぞレン。フィアもエリーゼも待ちくたびれている頃だ」
「あっ！　ちょ、ちょっとキリシェ歩くの早いって！　俺、傷だらけだってのに！」
「気合いで治せ」
「治るかよ!?」
大気の断裂による鎌鼬と、火傷と、猛毒の風と、そして断崖にまで叩きつけられた衝撃。それだけ受けていつも通りに歩けという方が無茶な話だ。

「痛っ！　痛てて……」
「しょうがない奴だな。ほら」
ふり返ったキリシェが、苦笑まじりに手を差しだす。
「……」
「どうした？　さっさと掴まれ」
「……いや、ありがとな。でもやっぱそれはいいや」
カルラをはじめ多くの竜たちの視線を背中に感じ、レンは彼女の差しだした手をやんわりと断った。
「ちょっと恥ずかしいし」
「何だ、その遠慮。まあお前が大丈夫というならかまわないが」
隣を歩く銀髪の少女。
その歩調は先よりも幾分ゆっくりで、こちらに合わせてくれるものだった。
が、十メートルも進まぬうちに。
「あ、そうだキリシェ。話変わるけどさ」
先に言葉を発したのはレンだった。
「俺すごい竜見つけたんだってば！　向こうに溶岩みたいな湖があるの知ってるだろ？　その奥に、言葉にできないくらい綺麗で、神秘的っていうか厳かっていうか、もう本当に、ちょっと別次元ていう感じの竜がいてさ」
「ふむ？」
「あんな綺麗な竜がいるんだな。聖フィオラ旅学園の教本にも載ってない竜だったから、たぶんすごい稀少な竜なんだろ？　それで何か感動しちゃってさ」
「まあ……稀少と言えば稀少だな」
なぜか言葉をにごすような口調で、キリシェ。
「正直に言え。その竜は……お前から見て怪物っぽくはなかったか？　本当に、アレを見て恐いとは思わなかったか？」
「怪物だなんて、全然。すげぇ綺麗だったよ」
「……そうか」
レンの言葉をそのまま噛みしめるように呟いて。
キリシェが、なぜかほんの少し、ほっとしたように安堵の息をついた。
「その竜にはわたしから伝えておく。悪い気はしないだろうからな」
「頼むよ。俺ももう一度会ってみたいし」
「会えるとも」
凛とした声でそう断言するキリシェ。
「お前が望むなら、あの竜は、いつでもお前の傍にいてやれる」

「ん？」

「い、いや……こっちの話だ。あとちょうど良い機会だから、私からも言っておく」

竜の渓谷に吹きこむ風を受けながら。

すべての竜の頂点に立つ竜姫が、その可憐なまなざしを向けてきた。

「わたしは、お前がエルラインの再来だと思ったから旅をしたいわけじゃない。今はただ、お前と旅をするのが楽しいから」

「何だよ？　そんな唐突に」

「い、いいだろう！　ちょっとそんなことを言いたい気分だっただけだ！」

ぷいっと顔を背ける少女。

それはまるで、耳まで紅潮した表情を隠すためであるかのように。

「目的は果たした。さあ行くぞ、世界録探しの再開だ」

Epilogue ― 終焉の地

竜の渓谷にいたる細道。
左右を断崖絶壁に挟まれた道の、その中ほどに、見知った顔の大天使と先代魔王。
「おつかれさまですわ」
「おそーい。待ちくたびれたよ！」
淑やかな微笑をうかべるフィア。
隣に立つエリーゼも、口では文句を言いながらも愉快げな表情だ。
そんな二人のうち、まず落ちついた様子でこちらに歩みよってきたのはフィアだった。
「レン、だいぶ精霊の扱いにも慣れてきたようですわね」
「え？　ああ……でも慣れてきたというか、俺の場合、大部分が精霊任せだけど」
すでに火の始原精霊も上の始原精霊も消失した後。
二体とも役目を終えて寂しそうな雰囲気ではあったが、消耗させた力を回復させてほしいというのがレンの個人的な感情だ。それを察してこちらに来てくれたのか、レンが口にするより先に二体ともどこかへと姿を消した。
「あと、エリーゼからもらった宝玉もまた役に立ったよ。ありがとな」
「アタシも見てたよ。エルラインの霊剣、ああやって使えば使うほどレンとの因果も深まるから、次はもっと長い時間使えるかもね」
「……いや。まあ使わざるをえない状況にならないのが一番なんだけどな」
「そうだけど、肝心な時に召喚失敗ってのも怖いじゃん。それは練習。しっかし火の始原精霊に上の始原精霊ねぇ。アタシ、レンのこと見てるの本当に楽しくなりそう」
「え？」
「ううん、ひとりごとー」
クスクスと意味深な笑みをこぼし、エリーゼがスキップ調でキリシェの方へ。
「で。キリシェの方だけど、そっちは多少マシになった感じ？」
「竜の姿に戻れるようにはなった」
「へぇ。それは結構デカいんじゃない？　まだ竜因子が全部戻ってなくたって、息吹が使えるのは大きいもんね。なにせ竜の奥義なわけだし」
楽しげにエリーゼが声を弾ませる。
そして。
「ま、姉思いの妹がいて良かったじゃん」
「……気づいていたのか？」
「竜帝の波長が、あなたを守護するように取り巻いていますからね。大方そうだろうと、エリー

ゼと話していたところですわ」
エリーゼの言葉を継いだのはフィアだった。
対するキリシェもまた、複雑そうな微苦笑で首肯してみせる。その仕草に――
「ええと……それってどういうこと？」
たった一人だけ話に乗りそこね、レンは首をかしげた。
「フィア先輩？」
「つまり姉であるキリシェが竜の姿に戻るために、竜帝カルラが自分の力を注いでいたというわけですわ。人間の輸血のようなものですよ。足りないモノは、他人が分けあたえてあげればいいのですから」
穏やかな口ぶりで答えてくれる大天使。
そのまま器用に片目をつむって。
「でもレン、気を落とさなくていいですよ。勝ちは勝ちです。たとえ竜帝がキリシェに力を与えたばかりで疲弊した状態だったとしても、ね」
「うわっ!?　そういう事かよ！」
悲鳴なのか驚愕なのかもわからない声が、喉の奥からこぼれ出た。
「……やられた。全然、その発想はなかった」
〝手加減はしません〟
嘘はついていない。
だが竜帝カルラの示す全力というのは、自らの力をキリシェに注いだ後の、そのうえでの全力という意味だったのだろう。
「……」
「自信喪失ですか？」
「まさか。何ていうか、やっぱり竜の頂点っていうのは流石だなってさ」
苦笑を隠さずにレンは首を横にふってみせた。
――上には上がいる。
――いまだ自分の想像が及びもつかない高位存在や精霊たち。
途方もなく広大な『世界』の一端を、また垣間見ることができた。そんな気分だ。
「俺、もっと頑張らないと」
「そう。それでこそ、わたしもお前の鍛えがいがある」
凛と澄ました微笑でふりかえるキリシェ。
そして彼女は歩きだす。
古代神殿の出口から歩いてきた道を、今度は引き返す方向へ。

「行くぞレン。世界録を探しつつ、また剣の訓練も再開だ」
「あ、そうそう。なあキリシェ、世界録のことで思いだしたけど、一つ気になってたんだ。剣聖シオンのこと」
歩くキリシェの横へ追いつくと、彼女もまた、こちらにそっと横顔を向けてきた。
「剣聖シオンが竜の渓谷を訪れた理由、カルラから聞けたんだろ？」
「多少はな」
いつになく神妙な声音で頷く竜姫。
その視線はどこか遠く。この大地をはるか越えた、世界の果てを見つめているようで。
「で、シオンの目的はやっぱり世界録？」
「そう。そこまでは予想どおりだった。しかし剣聖シオンがカルラに尋ねたのは、厳密には世界録の場所ではない。そもそも世界録の場所などカルラも知るわけがない。知っていればわたしが直接聞きだしている」
「……ていうと、つまりは」
「剣聖シオンが竜たちに問いかけたのは、終焉戦争の決戦地だったそうだ」
「終焉戦争!?　それって三百年前の……」
剣帝エルラインを『英勇』へと決定づけた古の大戦だ。
終焉戦争――
その全容がどんなものであったかは、三百年後の現代でも調査が進んでいない。
ただ一つ確実なことは、世界が『何か』の侵攻に見舞われた。
人間だけではない。地上だけではなく天界、冥界までもその禍々しき侵略者に脅かされ、戦火は広がった。
その侵攻を止めたのが剣帝エルライン、そして彼の下に集結した伝説の三大姫だ。
天界からは、女神の勅命を受けた最高位天使フィアが。
冥界からは、地底世界の主たる魔王エリーゼ自らが。
地上からは、天界からも冥界からも恐れられた最強の竜姫キリシェが。
つまり目の前にいる三人だ。
……人間は何も知らない。
……「その時」、「その場所」で彼女たちが何と戦っていたのかすら。
ただ一人の証人も存在しない決戦。
しかし三界を代表する姫がエルラインの下に集結し、彼を含めてたった四人で、世界に侵攻する『何か』に挑み、激戦のうえ勝利したというのは史実だと言われている。
竜姫キリシェが三百年の封印につき。
大天使フィアが癒えぬ傷を負い。
先代魔王エリーゼが、転生を余儀なくされた戦闘。それが――

「終焉戦争……」

「知りたいか？　あの時に起きた戦いのすべてを」

神秘的な緑玉色の双眸で見つめてくるキリシェ。

どこか寂しげで。

けれど並々ならぬ決意をも秘めた瞳。

「終焉戦争の説明はわたしにはできない。お前の足でたどりつき、お前の目で確かめてみろ。そこでお前が感じたものが、そのまま三百年前の真実だ」

「終焉戦争の場所に？」

「そうだ。世界の終わりの場所。そして間違い――」

一呼吸。

躊躇いをぬぐい去るための空白の時間を隔て、竜姫の少女は最後にそう告げた。

「世界録は間違いなくそこにある」

Continued ― 咆吼する世界

白き大地。

かつては深海の底であった場所。それが三百年前、大規模な地殻変動によって海底が持ち上がり、新たな大地として誕生したものだと言われている。

白砂に見えるものも、その正体は千々に砕けた珊瑚の欠片。

――白の地上。

――天上は雷光うずまく夜。

ぶ厚い黒雲におおわれた天上は、猛り狂う雷の輝きと轟音に満ちていた。

さながら空の咆吼。

今にも落雷を予感させる稲光と、轟き。

そんな荒れくるう天の下。眩しささえ感じさせる稲妻の光に照らされて……

「天界への審門。ここが例の場所か？」

軽量の甲冑をまとった人影。

背丈は、ちょうど十代中頃の少年程度だろう。

肩にかかるほどの濃緑色の髪に、赤みを帯びた双眸。

その顔だちは奇妙なほど中性的で、映る角度によっては可憐に。わずかに顔をそらせば凛々しいとも思わせる造形だった。

その声音も、思春期前の少年のような美しきボーイソプラノ。

少年、それとも少女？

間近で観察してもすぐには答えが出せないということだろう。

――が。

ただ一つ明確なことは、その者が人間ではないということ。

黒妖精のごとき褐色の肌に、ツンと伸びた長い耳。

その軽甲冑からのぞく二の腕はうっすらと鱗のようなものが肌を覆っている。そして何より特徴的なものが、その臀部からのぞく巨大な尾だ。

形状だけならば竜を想起させる。しかしその者の全身からにじみ出る禍々しい障気は、明らかに高位悪魔が湛える障気そのものだった。

只ならぬ高位悪魔。

それが、地上と天界とを繋ぐ審門の目の前にまでやってきていた。

「騒ぐな天使ども。お前たちの審門を破壊して天界へ押し入る気はない。魔王様にもその命は受けていないからな」

迸る頭上の雷光に向けて。

その高位悪魔がそう呟いた。

「もっとも、お前たちから挑んでくるのであれば拒みはしない。だが手はあるか？　オレを止められる者が天界にどれだけいる？　あの暴君天使フィアが不在にしている今、残る七大天使を出すか。それとも女神レスフレーゼ、貴様自らがこの地上まで降りてくるか？　一度貴様とも手合わせしてみたかった」

好戦的な笑みを浮かべる褐色の悪魔。

一方で、頭上で吼えたける雷鳴に変化はない。それをしばし見上げ――

「聞こえぬフリか。まあいいさ。オレとてお前たちに用はない」

意外なほどにあっさりと地上へと向きなおる。

拓けた空間。

広間の中心にそびえ立つのは、三本の巨大な大聖塔だった。その中心部からは、神々しい光の柱が天上へと昇っていっている。

これが審門。

天界に通じる扉そのもの。

世界五大陸のあらゆる場所に設置されている。今はこうして可視化して顕現しているが、それも天使たちの気まぐれ一つで隠されてしまう。それを求め、数多の旅団たちが世界中を駆けめぐっているのが現代の世界録大争奪時代でもある。

が、そんな審門を前にして。

「相変わらず仰々しいにも程がある。冥界の審門を見習ったらどうだ？」

その悪魔は呆れ笑いを浮かべたまま、あっさりと大聖塔の横を通過していった。

眼中にない。

天の審門をはるか背後に置き去りに。

「ここか」

褐色の悪魔が、ふと足を止めて周囲を見わたした。

白の大地。頭上の雷光も先と何一つ変わりない。だがその高位悪魔は、そこで何かを探すようにしきりに周囲の様子を伺っていた。

「オレの部下が何者かに襲われた……相手は人間でも天使でも竜でもない『何か』だと？　炎の将魔め、いつもの冗談にしてはタチが悪いぞ」

沈黙。

数十秒が数分へ変わり、そして一刻が経過して。

「……時間の無駄か」

腕組みをほどき、その悪魔からこぼれる溜息。

「正体不明の襲撃者。地上を見張っていたオレの部下たちを一掃した。そんな愉快な相手ならば是が非でも一戦をと思っていたが。やはり既に別の場所に……」

言いかけた矢先。

――ピシリッ。

硝子が罅入るような音がこだまして。

目の前の虚空に小さな亀裂が入ったのは、その時だった。

最初は一本の線。

それが徐々に枝分かれしていって、網の目にも似た巨大な裂け目へと成長していく。

「空間が割れていく？　これは！」

空間が無数の欠片となってはじけ飛ぶ。

そして。

そんな「世界の傷痕」から現れたモノは、神々しいまでに光輝く存在だった。

褐色の悪魔が見上げるほどの、人型をした発光体。

「……精、霊？」

そう呟いた瞬間、大気が弾け飛んだ。

轟音。そして閃光。

何の予兆もなく生まれた光の破裂が凄まじい高熱と衝撃とをともなって、まるで無防備な高位悪魔をはるか彼方まで吹き飛ばしたのだ。

「――――っ！」

苦悶の声を上げることすら許されなかった。

砕ける軽甲冑。受け身も防御もできぬまま、高位悪魔の身体が彼方の岩壁へと激突し、その衝撃で岩壁までもが粉々に破壊される。

並の悪魔、いや高位悪魔であっても立ち上がることは不可能。

それだけ強力にして無慈悲な一撃だった。

『……』

神々しき発光体。

世界の亀裂から突如として現れたソレが、勝利を確信し、ゆっくりと身をひるがえす。

その、寸前で。

「どこへ行く気だ？」

遙か後方に積もった瓦礫が、吹き飛んだ。

「我が名は魅亞。魔王直下『五大災』が一人ゆえに――」

舞い上がる砂塵から姿を現す褐色の悪魔。

まとっていた軽甲冑は粉々に砕け、その下の驚くほど華奢な肉体がさらけ出される。

全身に刻まれたおびただしい火傷と裂傷。

止めどなく流れ落ちる紫の血液。

だが、それでも褐色の悪魔にはまるで苦痛の表情がない。むしろその口元にはうっすらと微笑さえ浮かんでいる。

「良い技だな。無気配にして無挙動。受けるまでまったく感知できなかった。これほど静かな攻撃は『氷の将魔』以来か」

首筋を伝う血を指先で払い落とす。

褐色の裸身をさらしながら、その将魔はたった一言。

「だが、もう覚えた」

その言葉に応じるかのごとく。

魅亞――悪魔の全身に刻まれた傷が、みるみるうちに塞がっていく。

少年とも少女ともつかない華奢な肉体の内側で、破壊された筋肉組織が恐るべき速度でその組成を回復させているのだ。

さらに強靱に。傷を受ければ受けるほどに、その肉体は強化されていく。

進化し続ける怪物。

世界にたった一体だけ生まれた、竜と悪魔の特異混成種。

雌雄の区別なく。

竜と悪魔の境界さえ、その肉体には存在しない。

「よもや、これで終わりというわけでもあるまい？」

拳を握り固める将魔。

その全身から、大気を震わせる不可視の『波』がゆっくりと放出されていく。

『……』

対し、その神性なる発光体に変化はない。

怯えた様子も警戒した様子も皆無。先の攻撃が通じていなかったことを受けながらも、まるで動じた気配を見せない。

「そう。そうでなくては。わざわざ地上へと上がってきた甲斐がない」

『……』

「我、五大災が一人『波の将魔』なり――」

伝説の最上位悪魔。
かたや正体不明の混沌たる発光体。
自らの実力に絶対の自信を持つ者同士が、正面から向かいあう。
そして。
「魅亜・G＝クレシェンド、参上」
大地を震わせて。
人智を超えた高位存在たちの激戦が――

═══

「……始まった!?」
聖地カナン――
大聖堂、『祈りの間』。
虹色のステンドグラスと真鍮色の燭台に彩られた美しき空間で。
「風の始原精霊、あなた怯えているの？」
聖エリエス。
金色の法衣を羽織った少女は、自分に寄りそう不可視の精霊へと声をかけた。
風を司るモノ。
その身にまとう風が、震えている。
『……』
「戦闘位置はユメル大陸の北端。まさか、よりによって天界の審門がある場所で!?」
喉からこぼれた声は驚愕。
一流の旅団だけが知り得る天界への扉。
天使たちは慈悲深いが、仇為す者には一切の容赦がない。もしも天界への審門の周りで騒ぎを起こせば間違いなく天の鉄槌が打ち下ろされるはず。
しかし今。
そんな天使の怒りも恐れぬ二つの存在が現れ、そして戦いは突然に始まった。
「二つの尋常ならざる気配。一つは悪魔。しかもこの力は五大災!?　炎の将魔に続いて、まさか波の将魔まで地上に現れた……？」
冥界に君臨する五体の最上位悪魔。
いずれも先代魔王たる魔皇姫エリゼリス・ディ・マリアブレイズが魔王戴冠の儀として戦い、死闘の果てに従えた伝説の悪魔と言われている。
だが問題は――

そんな五大災と、今まさに五分の激戦を繰り広げている正体不明の存在だ。
その「何か」が現れた瞬間に、この聖堂にいる風の始原精霊をはじめ、世界中に点在する精霊たちの声が一瞬にして静まったのがエリエスには理解できた。
怯えたように声を押し殺している。
「二つの強大な力。互角……いえ、むしろ押されているのは五大災……？」
エリエスとて激戦の様子が見えているわけではない。
精霊が紡ぐわずかな言の葉と、そして微かな様子の変化で戦況の理解に努めているのだ。
だが、それとて限度はある。
「――――」
数秒ほどの黙考を挟み。
エリエスが取った選択は、法衣に偲ばせた金色の呼び鈴を鳴らすことだった。
澄みきった音色。
美しくも繊細な音が大聖堂にこだまする。数秒と経たずに大聖堂の扉が音もなく開き、濃紫色の法衣をまとった三人の女性が姿を現した。
「御用ですか」
目の前に傅く三人。
カナン巡礼聖教船の最高幹部。いずれも精霊使い、法術上、療法上、これらの術式系の技能において最高位にあたる女性術士でもある。
「話したとおりよ。シオンが推測と言っていた話、どうやら本当だったらしいわね」
「――剣聖様のあの話ですか」
一人が相づち程度に言葉を返し、残り二人は沈黙。
動じた様子は皆無。
どれだけの事態が起ころうと、彼女たちが心乱すことはない。それだけの訓練は積んでいるし、そうでなくてはこの大旅団の最高幹部に値しない。
「いかがしましょう。剣聖シオン様をお呼びしますか？」
「無駄よ。今から追いかけたって、もうとっくに聖地から離れてる。目指す場所があるって言ってたし、アイツにはアイツで情報収集してもらわないと困るから」
てたし、アイツにはアイツで情報収集してもらわないと困るから」
片膝をつく三人を見下ろし、エリエスは首を横にふった。
……この事情をもっとも把握しているのが私とシオンの二人。
……ほかに勘づいている可能性があるとすれば。
……覇都エルメキアの『王立七十二階位特務騎士団』と、一握りの超一流旅団たち。
特に、騎士王ゼルブライト。
剣聖シオンと並ぶ世界最強の剣士。常に覇都を拠点とし、自ら動くことは滅多にないが、あの男の行動が常に計算されつくしたものであることはエリエスも知っている。

剛にして柔。

武を極めながらも同時に賢者である騎士王（ゼルブライト）が、

……だけどまだ覇都から動かない。

……今のところ『王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）』も情報を収集中のはず。

カナン巡礼聖教船（じゅんれいせいきょうせん）が、世界中の精霊の様子を調べているのと同じように。

騎士王ゼルブライトが、何らかの意図をもって部下たちを世界中に派遣していることはエリエスも察知している。

序列上位の幹部たちを直接、覇都の外へ。

エリエスの知るかぎり、それは異例とも言える命令だ。

そして、派遣した先はおそらく天界の審門（ゲート）。

剣聖シオンが竜の渓谷（けいこく）を訪れたように、『王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）』もまた、独自の目的をもって動き始めている。

……騎士王ゼルブライト。

……あなたも、今の世界の状況が気になっているのかしら？

そう。

人間はまだ、この世界の異変を察知しつつあるだけ。

その異変に対し、為（な）すべき手段も選択もいまだ見いだせてはいないのだから。

「いかがいたしましょうエリエス様」

「私が動く」

あくまで気高く。

聖エリエス――聖地カナンの聖女にして現代唯一（ゆいいつ）の古代詠唱士（エイシエンター）である少女は、颯爽（さっそう）と自らの法衣（ほうえ）をひるがえした。

「ネビリム、聖地に残ってる旅団（パーティ）の幹部を片っ端から集合させて。聖地の外に出てる幹部たちにも、今すぐ戻ってくるよう連絡を取りなさい」

「かしこまりました」

跪（ひざまず）いて並ぶ三人の最高幹部。

その中心にいる女性術士が、姿勢はそのままに深々と頭を下げてみせる。

「精霊の怯（おび）えの原因も察しがついたわ。シオンも既に動き始めてる。ここから先は、危険を覚悟のうえで『終焉（しゅうえん）戦争』の秘密を探るしかない」

空白の大戦争。

英勇（えいゆう）エルラインと、彼に率いられし伝説の三大姫たち。

三百年前のあの時、どこで何が起きたのか。

そして、それら空白の歴史のすべてが世界録（アンコール）に記されている。剣聖（けんせい）シオンのその推測についてはエリエスも一切の異論がない。

「世界録争奪戦、我が旅団もいよいよ参戦ですか」
「ええ。だけど並行して確かめたいことがある。……あの情報が確かなら」
聖地カナンの聖女として。
そして何より現代世界唯一の古代詠唱士として、確かめなければならぬことがある。
「火の始原精霊を従える少年の話、聞いているわね？」
「幹部タイラスからの報告ですね。旅団『再来の騎士』。あの五大災を撃破した四人組の新生旅団。そのうちのレンという少年が精霊を召喚したという話。にわかには信じがたいことですが、上の始原精霊の声を聞き取っていたという報告もあります」
それだけではない。
その少年が、まさに英勇エルラインの生き写しの姿をしていたという。
さらに話を聞けば、彼に同行していた三人の少女たちもまた、いずれも並々ならぬ雰囲気を湛えた者たちだったとのこと。まさにエルライン剣帝旅団の再来というべき構成だ。偶然の一致にしてはあまりに出来すぎている。
「その旅団の現在地は？」
「不明です。タイラスの話では、イスカセル地下神殿を抜けて、北の方角へ向かった模様との情報までは届いていますが」
「秘境リ・インファリエルがある方向ね」
竜の渓谷。
……剣聖シオンが少し前に訪れていたはずの聖域。
……その後すぐ、その地に、精霊を従えた少年もまた訪れた。
……これは……本当に偶然と呼べるものなの？
世界録争奪戦。
そこに突如として現れた謎の旅団『再来の騎士』。その一人であるという英勇生き写しの少年が、精霊を従えているという情報。
そして剣聖シオンの残した予言めいた世界の異変。
さらには精霊を脅かす何者かの存在。
今はまだ知りようもないが、いずれこの事象たちがすべて一つの軸で結びつく。そんな予感がしてならないのだ。
……だからこそ確かめる。世界の真相を。
……私自身で。
「風の始原精霊、それに水の始原精霊。あなたたちも力を貸してちょうだい」
聖堂を駆けめぐる風。
そしてエリエスの足下へと滲みあふれていく蒼き水。

昂揚する精霊たちの気配を感じながら――

「私がすべてを解き明かす。『再来の騎士』の正体も、精霊の怯えの原因も何もかも」

聖女は、凛とした声でそう宣言した。

あとがき

本書を手にとって頂き、ありがとうございます。
お久しぶりです。細音（さざね）です。
この『世界の終わりの世界録（アンコール）』でデビューして、それから三か月。
たくさんの方の応援に支えていただき、無事に2巻目を出すことができました。おそらく3巻も出せそうということなので、この『世界録（アンコール）』シリーズ、ますます面白いものにできるよう頑張りたいと思います！
ちなみに第2巻ですが――
今回は『世界録（アンコール）』世界に数多（あまた）ある秘境の中から、「竜の渓谷（けいこく）」をテーマの一つとして描いてみました。竜というと多くの本や映画でも広く愛されている魅力的な幻想生物ですが、そんな竜側の視点や生息地まで描かれる頻度は多くない気がして、せっかくなので竜姫（キリシエ）を語るエピソードの一つとして、ぜひ盛りこんでみたいなと。
そして偽英雄（レン）ＶＳ竜帝（カルラ）。
相変わらずレンが強大（すぎる）相手に挑戦しています。あとがきから読むという方も、そうした秘境の冒険＆竜帝バトル、楽しんでいただければ幸いです。
さて第2巻の御礼を――まず、本当にご尽力を頂きましたＭＦ文庫Ｊ編集部各位、とりわけ編集長、そして現担当Ｎ様、本当にありがとうございます！
また、今回もとびきり美麗なイラストで本作を盛り上げてくださったふゆの春秋先生。カルラのデザイン最高でした！
そして何より、この本を手にとってくださった全（すべ）ての方へ。
一巻からの温かい応援、本当にありがとうございます。これからも一話一話を大事に描いていきたいと思っておりますので、引き続き応援していただければ幸いです。
最後に予告を――
『世界録（アンコール）』、次の第3巻はたぶん、来年の2月頃かと思います。
これに併せて少しだけ宣伝を。
来年の2月予定の『世界録（アンコール）』にあわせ、その前月の1月に、同ＫＡＤＯＫＡＷＡ（カドカワ）系列である富士見Ｆ文庫（ファンタジア）にて、『Ｓ.Ｉ.Ｒ.Ｅ.Ｎ.（サイレン）』４巻を刊行予定です。こちらもまだ先月に第3巻が出たばかりのシリーズですので、もし興味を持って頂ければ、手にとって頂けると嬉（うれ）しいです。……というお知らせをしつつ、あとがきもお終（しま）いが近づいてきました。
それでは、また。
『世界の終わりの世界録（アンコール）』３巻（天界編）にてお会いできますように。

細音　啓（けい）

著者
細音啓（さざね・けい）
最近買い換えたパソコンのおかげで、作業がはかどるようになりました。
まだｔｗｉｔｔｅｒも使いこなせてないけれど、情報社会に適合していけるよう頑張ります。

イラスト
ふゆの春秋（ふゆの・はるあき）
イラストレーター。ライトノベルをはじめ、多数の作品の挿絵を手がける。近作に『知らない映画のサントラを聴く』（新潮文庫ｎｅｘ）など。